

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第152集

# 石 煙 I 遺 跡

平成15年度 (主)焼津森線歩行者等緊急安全対策事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第152集

# 石 畑 I 遺 跡

平成15年度 (主)焼津森線歩行者等緊急安全対策事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

# 序

石畠Ⅰ遺跡の調査は、県道焼津森線改築工事の一環で実施された。

今回の調査で、弥生時代後期の環濠集落が確認された。環濠とは集落を囲むように掘られた溝のことと、掛川市においては、原新田遺跡、領家遺跡に次いでの発見となる。本遺跡では、掘削時期が異なる弥生時代後期前半と後半の環濠が検出された。

前者の環濠は幅約1m、深さ約1mの溝が数条重複している。溝の中には、炭化物や有機物が堆積していること、弥生土器が比較的まとまって出土していることなどから、当時の人々が土器や生活ゴミ等を廃棄し、埋め戻しや再掘削を繰り返していたと考えられる。この溝は、集落内を区画するものと考えられる。

これに対し、後者の環濠は埋め戻しや再掘削による溝の重複は認められず、古墳時代前期頃まで埋まっていたいなかったことが確認できた。幅2m以上、深さ約1.5mもあることから、この環濠は集落を防御するためのものと考えられる。このように、掘削時期、性格の違う2つの環濠が、同じ遺跡内から検出されたことは大変意義深い。

そして、前者の環濠からは、弥生時代後期初頭から前半にかけての菊川様式古段階の土器が多量に出土した。今までこの時期の土器は出土事例が少なかつただけに、当該時期の貴重な基準資料となるであろう。

また、柱根が残る中世の掘立柱建物跡も検出されているが、調査範囲が限定されていたため、建物跡の一部しか検出できず詳細は不明である。しかし、1間の幅がそれぞれ4.6m、2.7mと長いこと、柱材に樹齢80年以上、直径30cm以上のヒノキを使用していることなどから、通常の民家に使用されたとは考えにくく、仏堂や神社等信仰に関連するなど特別な意味をもつ遺構の可能性もある。

今までの調査では、中世の掘立柱建物というのはあまり重要視されなかつた。今回の発見を機に、中世の掘立柱建物についての論考がなされるようになれば幸いである。

倉真川流域の遺跡において本格的な調査が行われるのは、今回が初めてであろう。その上、このような貴重な発見を提示できたことは喜ばしいことであり、これらの資料が今後有効に活用されることを願う次第である。

本遺跡の調査及び本書の作成にあたっては、静岡県袋井土木事務所掛川支所ならびに掛川市教育委員会をはじめとする関係機関各位に御理解と御協力をいただいた。また、調査にあたっては、多くの皆さまに御指導、御助言をいただいた。この場をかりて厚くお礼申し上げたい。最後に、現地作業、資料整理に関わった多くの方々の労をねぎらいたい。

平成16年8月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

# 例　　言

1. 本書は、静岡県掛川市上西郷に所在する石畳Ⅰ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 平成15年度の調査は、(主)焼津森線地方特定道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成16年度の調査は、(主)焼津森線歩行者等緊急安全対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、静岡県袋井土木事務所掛川支所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、掛川市教育委員会の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
3. 確認調査は、平成14年3月に掛川市教育委員会が実施し、本調査は、平成15年7月から平成15年10月までと平成16年5月から平成16年6月まで静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。整理作業は、平成15年10月から平成16年8月まで実施した。

## 4. 調査体制は次のとおりである。

### 平成15年度（本調査・整理作業）

所長 斎藤 忠 副所長 飯田英夫 常務理事兼総務部長 条田徳幸  
総務部次長兼課長 錦田英巳 総務課副主任 鈴木訓生  
調査研究部長 山本昇平 調査研究部次長 栗野克己（総括）佐野五十三（国・県事業）  
調査研究三課長 足立順司 調査研究員 白鳥直樹 河合 敦（7月～9月）  
主任技術員 西井 亨  
平成16年度（本調査・整理作業）

所長 斎藤 忠 副所長 飯田英夫 常務理事兼総務部長 平松公夫  
総務部次長兼課長 錦田英巳 総務課副主任 鈴木訓生  
調査研究部長 山本昇平 調査研究部次長 栗野克己（総括）佐野五十三（国・県事業）  
調査研究三課長 足立順司 調査研究員 白鳥直樹 主任技術員 西井 亨

5. 本書の執筆は足立、白鳥、西井が分担して行った。
6. 中世の掘立柱建物跡については、伊藤延男氏（神戸芸術工科大学名誉教授）に御教授いただいた。
7. 金属製品、木製品の保存処理は当研究所保存処理室が行った。
8. 遺物写真撮影は当研究所写真室が行った。
9. 現地における基準点測量、空中写真測量、空中写真撮影は大鍾測量設計株式会社に委託した。
10. 遺物実測の一部と遺物実測図及び遺構編集図のトレイスは株式会社フジヤマに委託した。
11. 本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
12. 発掘調査に関する資料は静岡県教育委員会が保管している。

## 凡　　例

本書の記述については、以下の基準に従い統一を図った。

1. 調査区は、建設予定道路の主軸方向を基軸として、発掘調査対象区域を網羅するグリッド方眼を設定した。グリッドは1辺10mとし、アルファベット（A～C）と通し番号（1～14）を用いて、その位置を標示している。
2. 調査区の全体図には、国土座標数値も表記しているが、この座標軸は世界測地系（測地成果2000）を用いており、図中の方位表示はこの方位（座標北）である。
3. 本文中に用いる色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修、1992）を使用した。
4. 本書で使用した遺構、遺物の表記は次の通りである。

### <遺構>

S B…堅穴住居跡 S H…掘立柱建物跡 S D…環濠・溝状遺構 S F…土坑 S P…小穴  
S E…井戸状遺構 S X…不明遺構

### <遺物>

S…石器又は礫 W…木製品 M…金属製品 無印…土器



掛川市の位置

# 目 次

序  
例言  
凡例

第Ⅰ章 調査に至る経緯（白鳥）	1
第Ⅱ章 位置と環境	2
第1節 地理的環境（白鳥）	2
第2節 歴史的環境（足立）	2
第Ⅲ章 調査の方法と経過（白鳥）	5
第1節 調査の方法	5
第2節 基本土層	6
第3節 調査の経過	7
1 現地調査	7
2 整理作業	8
第Ⅳ章 調査の成果	12
第1節 弥生～古墳時代の遺構と遺物（白鳥・西井）	12
1 竪穴住居跡	12
2 挖立柱建物跡	14
3 環濠	18
4 溝状遺構	23
5 土坑	30
6 不明遺構	32
第2節 弥生時代後期の出土遺物（西井）	33
1 後期弥生土器の様相	33
2 弥生時代の石器	43
第3節 中・近世の遺構と遺物（足立）	76
1 挖立柱建物跡	76
2 溝状遺構	76
3 土坑	78
4 井戸状遺構	80
5 不明遺構	82
6 遺構外の遺物	83
第Ⅴ章 まとめ	86
第1節 石畠Ⅰ遺跡における弥生集落（西井）	86
1 出土土器について	86
2 環濠の種類と機能	87
3 弥生集落の変遷	88
第2節 石畠Ⅰ遺跡周辺の中世宗教（足立）	91

## 挿 図 目 次

第1図	掛川市の地形	1	第34図	S D06出土土器(2)	51
第2図	周辺の遺跡	4	第35図	S D06出土土器(3)	52
第3図	グリッド配置図	5	第36図	S D07出土土器(1)	53
第4図	基本土層柱状図	7	第37図	S D07出土土器(2)	54
第5図	調査区全体図	9	第38図	S D07出土土器(3)	55
第6図	遺構配置図(1)	10	第39図	S D07出土土器(4)	56
第7図	遺構配置図(2)	11	第40図	S D07出土土器(5)	57
第8図	S B01・02	13	第41図	S D07出土土器(6)	58
第9図	S B03～06	15	第42図	S D07出土土器(7)	59
第10図	S H01・02	16	第43図	S D07出土土器(8)	60
第11図	S H03	17	第44図	S D07出土土器(9)	61
第12図	S D01～04	19	第45図	S D08出土土器(1)	62
第13図	S D05	21	第46図	S D08出土土器(2)	63
第14図	S D06	22	第47図	S D09・11出土土器	64
第15図	S D07	24	第48図	S D11出土土器	65
第16図	S D07・08	25	第49図	S D11・12・14出土土器	66
第17図	S D09～11	27	第50図	S D13・15・16出土土器	67
第18図	S D12～16	28	第51図	S F01～03出土土器	68
第19図	S F01～06	31	第52図	S F03～06、S X01・02出土土器	69
第20図	S X01・02	32	第53図	石器実測図	70
第21図	後期弥生土器器種分類図	34	第54図	S H04・05	77
第22図	弥生土器器種組成比率	36	第55図	S D17	78
第23図	壺形土器器形構成比率	36	第56図	S H05・S D17出土土器	78
第24図	甕形土器法量比率	38	第57図	S F07・08および出土遺物	79
第25図	遺構別器種組成比率	39	第58図	S E01～05	81
第26図	胎土の違いによる組成比率	41	第59図	S E06・S X03	82
第27図	S B01・03、S D01出土土器	44	第60図	S E01・02・05出土土器	83
第28図	S D01出土土器	45	第61図	遺構外出土遺物	83
第29図	S D02・04出土土器	46	第62図	木製品実測図	84
第30図	S D05出土土器(1)	47	第63図	石烟I遺跡遺構変遷図	89
第31図	S D05出土土器(2)	48	第64図	原野谷川・逆川流域における 弥生時代後期の集落	90
第32図	S D05出土土器(3)	49			
第33図	S D06出土土器(1)	50			

## 挿 表 目 次

表1	周辺遺跡地名表	4	表10	遺物観察表（弥生土器・土師器・須恵器）	71
表2	調査工程表	8	表11	遺物観察表（石器・玉類）	75
表3	弥生時代堅穴住居跡一覧表	14	表12	中・近世土坑一覧表	80
表4	弥生時代掘立柱建物跡一覧表	17	表13	中・近世井戸・遺構一覧表	82
表5	弥生時代環濠・溝状遺構一覧表	29	表14	遺物観察表 (山茶碗・陶磁器・土師質土器)	85
表6	弥生時代土坑一覧表	32	表15	遺物観察表（鉄製品）	85
表7	弥生土器遺構別個体数一覧表	39	表16	遺物観察表（銅質）	85
表8	弥生土器の搬入・模倣パターン	42	表17	遺物観察表（木製品）	85
表9	弥生時代時期別遺構一覧表	43			

## 図版目次

カラー図版1	石畠I遺跡遠景（西より）	図版13	S H04完掘状況（南より）	
カラー図版2	石畠I遺跡遠景（北東より）	2	S H04P1柱根検出状況（北東より）	
カラー図版3	調査区全景（合成）	3	S H04P2柱根検出状況（東より）	
カラー図版4	1 1区全景	4	S H04P3礎板検出状況（東より）	
	2 2区全景	5	S H04P4柱根検出状況（東より）	
カラー図版5	石畠I遺跡出土後期弥生土器	図版14	1 S H05P1柱根検出状況（西より）	
カラー図版6	1 S D05上層出土土器	2	S F08遺物出土状況（東より）	
	2 S D06出土土器	3	S F07遺物出土状況（北より）	
カラー図版7	1 S D07出土土器	4	S E01完掘状況（東より）	
	2 S D08出土土器	図版15	1 S E02完掘状況（東より）	
カラー図版8	1 S D11出土土器	2	S E06竹枠検出状況（南より）	
	2 その他の溝状構出土土器	3	S X03遺物出土状況（北より）	
図版1	1 3区全景	図版16	S D01出土土器	
	2 1区東側完掘状況（西より）	図版17	S D02出土土器	
図版2	1 S D01～05完掘状況（西より）		S D05中・下層出土土器	
	2 S D06～08完掘状況（西より）		S D05上層出土土器(1)	
図版3	1 S B01・02完掘状況（西より）	図版18	S D05上層出土土器(2)	
	2 S B03・04完掘状況（西より）	図版19	S D05上層出土土器(3)	
図版4	1 S H01・02完掘状況（西より）	図版20	S D06出土土器(1)	
	2 S D01～04完掘状況（南東より）	図版21	S D06出土土器(2)	
図版5	1 S D05完掘状況（西より）	図版22	S D07出土土器(1)	
	2 S D05完掘状況（北より）	図版23	S D07出土土器(2)	
	3 S D05土層断面	図版24	S D07出土土器(3)	
図版6	1 S D06遺物出土状況（東より）	図版25	S D07出土土器(4)	
	2 S D06遺物出土状況（東より）	図版26	S D07出土土器(5)	
	3 S D06遺物出土状況（西より）	図版27	S D09・11出土土器	
図版7	1 S D07遺物出土状況（東より）	図版28	S D11出土土器	
	2 S D07・08遺物出土状況（東より）		S D14出土土器	
図版8	1 S D07遺物出土状況（北より）		S D15出土土器	
	2 S D08遺物出土状況（南より）	図版29	S F01出土土器	
	3 S D07遺物出土状況（西より）	図版30	S F06出土土器	
図版9	1 S D07土層断面		S X01出土土器	
	2 S D09遺物出土状況（西より）		弥生時代の石器	
	3 S D09遺物出土状況（北より）		S E01出土土器	
図版10	1 S D11遺物出土状況（西より）		S E02出土土器	
	2 S D12遺物出土状況（西より）		S F07出土遺物	
	3 S D15遺物出土状況（南東より）		短刀	
図版11	1 S F01遺物出土状況（南より）		図版31	錢貨
	2 S F02遺物出土状況（南より）		礎板（S H04P3）	
	3 S F04完掘状況（北より）		柱根（S H04P1）	
図版12	1 S F05完掘状況（南より）		柱根（S H04P4）	
	2 S F06遺物出土状況（北より）		柱根（S H04P2）	
	3 S X02遺物出土状況（西より）			

## 写真目次

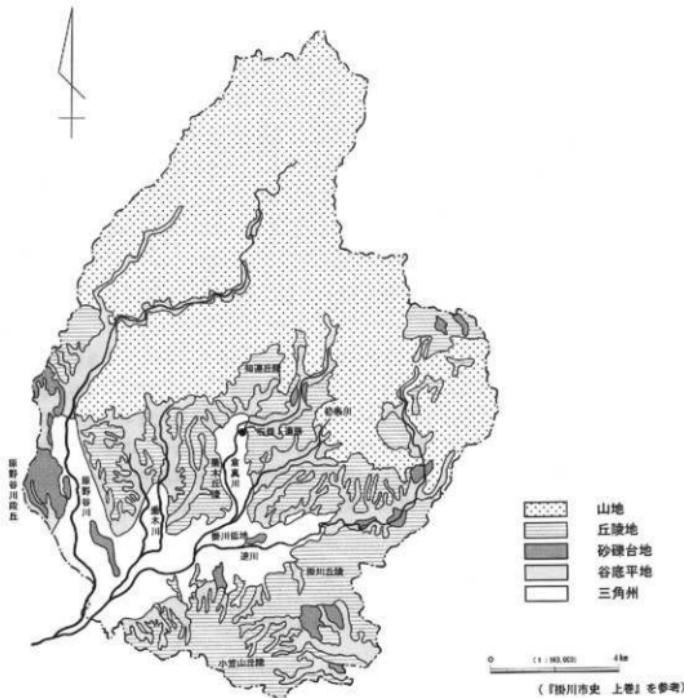
写真1	作業風景
写真2	現地説明会

写真3	上西郷庄銘の篆板
写真4	伝一寧一山供養塔

# 第Ⅰ章 調査に至る経緯

本書で報告する石畳I遺跡は、掛川市のほぼ中央部に所在する。県道焼津森線の改築工事に伴い、2002（平成14）年3月に、静岡県袋井土木事務所掛川支所、静岡県教育委員会、掛川市教育委員会の間で協議を行い、掛川市教育委員会によって確認調査が実施され、弥生時代から古墳時代の土器とともに柱穴を確認した。その結果を受けて再び関係各機関の協議を行い、当研究所に発掘調査の実施が依頼され、2003（平成15）年7月から本調査を行うこととなった。

その際、調査対象範囲は歩道部分を除く車道部分（道幅にして約7m）とすること、調査範囲内にある貯水池と排水溝の一部は調査しないこと、諸事情により7月現在で調査できない調査対象範囲の一部（南西側）も場合によっては調査を実施することなどを協議した。この範囲は、2003（平成15）年に確認調査を行い、翌年の2004（平成16）年5月に本調査を実施した。



第1図 掛川市の地形

## 第Ⅱ章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

石畳I遺跡は、静岡県西部地方の掛川市に所在する。掛川市は大型河川である大井川と天竜川とに挟まれた、東遠江と呼ばれる地域に位置している。

当遺跡は、国道1号線掛川バイパス西郷IC北側約2kmの倉真川左岸に位置する。この倉真川は、市内北東部の栗ヶ岳の西側を源流として、新第三紀中新世の地層（倉真層群や西郷層群）からなる山地や丘陵を開析し、当遺跡付近で滝ノ谷川や支流と合流、南方向に流路を変え、盆地状の沖積平野を形成し、逆川と合流する。当遺跡は、近くに丘陵が迫る沖積平野の北端、標高約35mの低位段丘面上に立地している。

市内西端を流れる原野谷川流域には、台地や丘陵上に遺跡が多く存在する反面、平野部に少ない。その理由の一つとして、洪水被害を避けて丘陵や台地上に集落を作ったことが考えられる。

石畳I遺跡周辺も、倉真川やその支流が合流しているため洪水被害が多かったと想像できるが、実際には、今回の調査では洪水で埋没した痕跡は認められなかった。当時の倉真川は比較的の水量が少なかつたり、流路が安定していたため、人々は洪水に悩まされることが少なく、稻作を中心とする生活が可能だったと考えられる。

### 第2節 歴史的環境

石畳I遺跡は倉真川の形成した谷底平野に存在する。調査の結果、弥生時代後期前半に中心を置き、後に中世にも集落が営まれていたことが判明した。現在の石畳集落もほぼ同じ場所に営まれている。これからわかることは、昔も今も谷底平野の低位段丘が、家を建て、ムラを営むことにきわめて適していた場所であったということである。

では、石畳I遺跡周辺に認められる縄文時代から古墳時代後期までの有り様を述べ、石畳I遺跡がどんな歴史的環境にあったかを考えてみたい。

倉真川流域には縄文時代の遺跡として、金井場遺跡、藪下・山崎新田遺跡、山崎寺中遺跡があり、これらはいずれも、河岸段丘に位置している。石鏃や石斧、石剣が出土しているが、石器を製作する際はぎ取った剥片以外、定型の石器があまり認められない遺跡も多い。縄文時代後期～晩期の遺跡と考えられているが、藪下・山崎新田遺跡、山崎寺中遺跡を除くと、規模はきわめて小規模で、採集された遺物も少ない。掛川市内では、原野谷川上流域にある上ノ段遺跡で、拠点的集落を中心に一定の領域の中で半ば定住生活が営まれたと考えられるが、倉真川流域には縄文時代の大規模なムラがあった様子ははつきりしていない。

西日本で稻作がはじまった頃、東海地方東部では、貝殻や棒の先で土器の表面を調整した条痕文土器が見られ、古い順に櫛王一水神平一丸子式土器と呼ばれている。掛川市原川遺跡では丸子式土器の時期に冲積地への進出が見られ、掘立柱建物と埋葬施設である土器棺墓が発見されたが、遺跡の立地から湿地帯を切り開いて米作りが始まったと考えられる。

それ以前の条痕文土器の時期は、段丘や丘陵上に遺跡が立地する。これらの遺跡からは石斧や石鏃などの道具が発見されているが、縄文時代晩期の暮らしとは基本的に変化はなく、また掛川市内ではこの時期、遺跡の規模は小規模で、ムラの分布や人口密度も希薄ではなかったかと推定される。

弥生時代中期（嶺田一白岩式土器の時代）には、稻作とともに新しい墓制である方形周溝墓も見られ、

この地域に新しいムラ作りが定着した様子を垣間見せている。ただし、土器の変化の様子やもともとの土器棺墓も併存していることから、弥生前期と中期の間に断絶はない。掛川市域の弥生時代のムラは、他地域からの移住によって広まったというよりも、従前の人々が米作りを通じて時代とともに変化していったと理解されよう。

弥生時代後期（菊川式土器の時代）には、掛川市内では丘陵や段丘上に多くの集落がつくられている。菊川式土器はその様相から古・中・新段階と時期の推移が分けられ、この尺度を使うと、菊川様式中～新段階で、集落が多く分布する。またこれらの集落は以前と比べ、たくさんの竪穴住居跡が見られる事から、長い期間、多くの人々が暮らしたムラであったことが分かっている。それとは逆に丘陵尾根部に、あまり重複のない竪穴住居跡が見られる集落遺跡も発見されており、少数の人々が短期的に暮らしむらと推定される。

このように一見異なるような当時のムラは、おそらく人口の増加と稻作耕地の拡大によって、母集団と小集団といったムラ分けがあり、菊川様式中～新段階で大きく開拓が進み、今日流の経済発展があつたとみることもできよう。しかしながら、その後の土器が出土していないことから、何かの理由で一時的に移り住んだか、はたまたその場所に適応せず、次の可能性を求めて移動したと考えられる集落も存在する。このような短期間で消滅するムラもあることから、必ずしもこの時代のムラが長く安定的に発展をしたとはいえない、とも評価されよう。

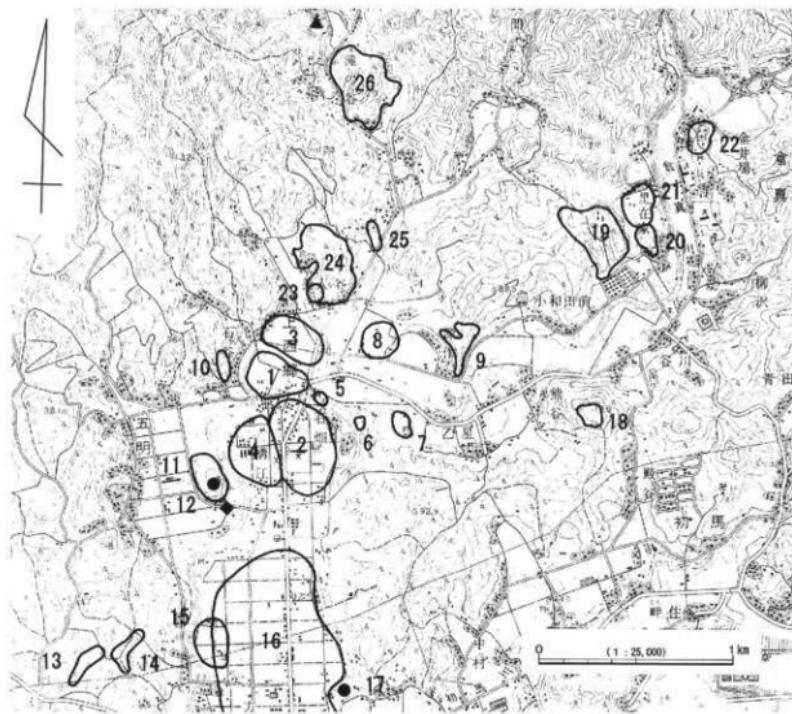
古墳時代になると、五明集落の西側丘陵上に稻荷山古墳群、打越古墳群が築造されていたが、現在その面影をとどめていない。以前、掛川西高等学校郷土研究部には五明古墳と書かれた5世紀末から6世紀初めの須恵器坏身があったが、この稻荷山古墳群、打越古墳群の一角から出土したと推定される。

石畠Ⅰ遺跡周辺の古墳時代は、平塚古墳の築造された頃から明瞭となる。平塚古墳は横穴式石室に石棺2基を埋葬施設とする方墳（もしくは円墳）であり、倉真川流域では早い段階で横穴式石室を取り入れた首長墓と考えられる。この他に昭和8年の開墾によって8基の横穴式石室を主体部とする古墳が発掘された美人ヶ谷古墳群（総数20基程度と言われている）、石ヶ谷古墳群、屯倉古墳群など、いずれも横穴式石室を主体部とする古墳群が石畠Ⅰ遺跡の近隣に存在する。

現状では、倉真川流域の原横穴群、梅ヶ谷横穴群から上流部には横穴群は認められない。垂木川流域には、海塚古墳群のような横穴式石室を主体部とする古墳群が存在するが、鰐原横穴群、飛鳥横穴群から上流部には横穴群は認められない。また、家代川流域から原野谷川流域、原谷・本郷周辺では横穴式石室とともに横穴墓が認められるが、調査事例が少ないとあって、横穴墓と古墳との併存についての詳細な検討は難しい。

広く東遠江の横穴墓をみると、その特徴から大きく二分できる。その一つの特徴を持つグループには、飛鳥横穴群から楠ヶ谷横穴群、古銭（戦）横穴群、地域では垂木川流域、原野谷川流域・本郷地区の横穴群が含まれる。その特徴は、太田川中流域（森町飯田・一宮、袋井市宇刈・堀越）の横穴墓と平面や断面形態において共通する。このことから、この地域の横穴墓を造った人々は、横穴墓を墓制とする集団（氏族）の中において、さらにそれ自身の細かいグループ分けの中でも、共通する同族的深いつながりを持つ関係であったと推定できる。

他方、石畠Ⅰ遺跡周辺では、前述の横穴墓を造った人々とは異なり、横穴式石室を墓制とする集団（氏族）が居住していたと考えられる。



第2図 周辺の遺跡

表1 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	種別
1	石畠Ⅰ遺跡	弥生(後)～古墳 中・近世	集落
2	石畠Ⅱ遺跡	縄文、弥生	散布地
3	石畠Ⅲ遺跡	弥生(中～後)	散布地
4	川久保遺跡	弥生(後)～古墳(前)	散布地
5	屯倉古墳群	古墳	古墳
6	牛丸西谷田遺跡	縄文(後～晩)	散布地
7	牛丸上ノ山遺跡	縄文(後)	散布地
8	柿ヶ谷遺跡	縄文(前～中)	散布地
9	小和田前遺跡	縄文～古墳	散布地
10	石ヶ谷古墳群	古墳	古墳
11	平塚山遺跡	縄文(中)	散布地
12	平原古墳	古墳(後)	古墳
13	打越古墳群	古墳	古墳
14	稻荷山古墳群	古墳	古墳

番号	遺跡名	時代	種別
15	五明遺跡	弥生、古墳、中世	散布地
16	中下遺跡	古墳(中～後)	散布地
17	下山古墳	古墳	古墳
18	熊ヶ谷大谷遺跡	縄文～古墳	散布地
19	山崎鎮守遺跡	弥生(中)	散布地
20	山崎寺中遺跡	縄文(晩)、弥生(後)	散布地
21	戸下山崎新田遺跡	縄文、弥生	散布地
22	金井場遺跡	縄文(後)	散布地
23	美人ヶ谷古墳群	古墳(後)	古墳
24	美人ヶ谷城	中世	城館
25	保戸貝戸古墳群	古墳	古墳
26	瀧ノ谷城	中世	城館
◆	貞和二年銘石塔	中世	
▲	滝泉寺推定地	中世	

『静岡県文化財地図・地名表II』(昭和64年3月発行)を参考

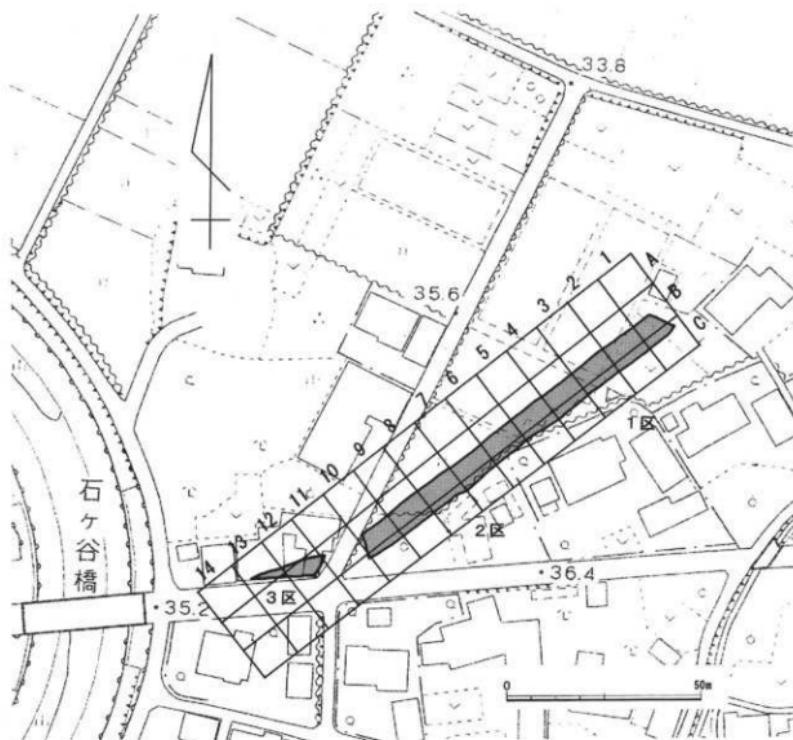
## 第III章 調査の方法と経過

### 第1節 調査の方法

調査区は、道路計画路線内そのため、北東—南西方向に長く（約140m）、北西—南東方向に狭い（約7m）。そのため、調査の際の測量や遺物取り上げの基本となるグリッドは、国土座標に合わせるよりも調査区の形状に合わせた方が、測量、図化も容易で合理的であると判断し、道路の主軸方向を基軸として10m×10mのグリッドを設定した。

2003（平成15）年の本調査は、調査区が細長く、一括調査が困難だったことから、調査区の東半分を1区、西半分を2区とし、1区の調査から開始した。

表土除去については、重機とクローラーダンプを用いて行った。排土については1区の調査では調査区外に排土置場を設けた。2区の調査では、調査が終了した1区を埋めて、そこに排土置場を設けた。



第3図 グリッド配図

また、協議の結果、調査終了後は埋め戻しを行わずに引渡すことになった。

現地調査では、想定以上の遺構、遺物数になったため、土器が集中して出土した場合には出土状況の実測を行い、そうでない場合でも時期が確定できる土器についてはトータルステーションで点取りし、その他の土器についてはグリッド内を南北に二分割して一括して取上げる等簡略化を図った。

2004(平成16)年の本調査は、前年度調査区の西側(面積約100m<sup>2</sup>)を3区として調査を行った。表土除去については、重機を用いて行った。排土については、調査対象外の歩道部分や前年度調査区に仮置きした。

図面記録はトータルステーションを使用し、1/10あるいは1/20を基本として行った。基準杭設置、完掘状況測量及び地形測量は、大鐘測量設計株式会社に委託した。

写真記録は6×7判モノクロ撮影を基本とし、35mmカラーネガ、リバーサルでの撮影も行った。必要に応じて6×7判リバーサルでの撮影も行った。高所からの撮影は高所作業車等を使用し、一部大鐘測量設計株式会社に委託し、ラジコンヘリによる空中写真撮影も行った。

## 第2節 基本土層

調査区で確認された土層は、表土、古墳時代～中・近世の遺物包含層、弥生時代の遺物包含層であった。しかし、古墳時代～中・近世の遺物包含層は、1区東側にしか残っておらず、弥生時代の遺物包含層も、後世の土地改良や耕作等で削平されていたため、わずかしか残っていなかった。遺構覆土は弥生時代が暗褐色、中・近世が黒褐色で、ある程度判別が可能であった。

### 1層 表土

土地改良や耕作のため攪乱されている。場所によっては遺物の表面採集もできる。

### 2層 黒褐色砂質土 10YR 3/2

細かな砂粒を主体に、小礫を多量に含む層である。場所によって、焼土粒、土器片や炭化物を含む。15～40cmの厚みがある。古墳時代～中・近世の遺物包含層であり、中・近世の遺構の覆土でもある。後世の削平を受けていて、今回の調査では1区東側にのみ残っていた。

### 3層 暗褐色砂質土 10YR 6/1

細かな砂粒を主体に、少量の小礫、多量のマンガンを含む層である。5～15cmの厚みがある。弥生時代の遺物包含層である。1区中央部に残っていた。

### 4層 明黄褐色砂質土 10YR 7/6

自然堆積層である。マンガンを多く含む。基本的にこの層の上面で遺構を検出した。

### 5層 磐層

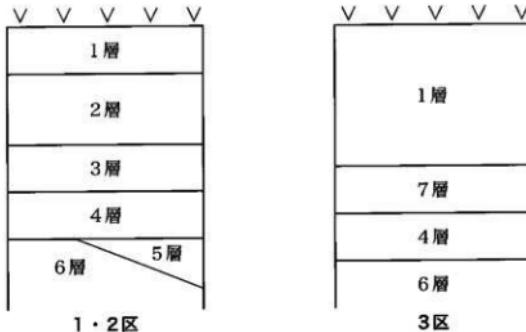
主に2区西側に見られる。径1～5cmの礫を多量に含んでいる。

### 6層 青灰色砂質土 5BG 6/1

場所によっては粘性の強い部分もある。腐植物を含む。井戸状遺構はこの層まで達しているものが多い。

### 7層 暗灰色粘質土 N 3/

近年の水田跡である。



第4図 基本土層柱状図

### 第3節 調査の経過

#### 1. 現地調査

2003（平成15）年7月上旬から草木伐採作業、プレハブ設営等の諸作業、重機による1区の表土除去作業を開始した。掛川市による確認調査の結果、1区の東側のみ古墳時代と弥生時代の2面、他は弥生時代1面と想定していたため、東側から作業員による人力掘削作業を開始した。

7月下旬、1区東側で中世の掘立柱建物跡と柱根などを検出した。

調査が進むにつれ、1区東側が古墳時代と弥生時代の2面ではなく、同一面に弥生時代～中・近世の遺構が存在することを確認したため、残りの西側の人力掘削も並行して行った。ここからは、弥生時代の環濠や溝状遺構を数条検出し、遺構内から多数の土器（須恵器、土師器、弥生土器）が出土した。

8月上旬、1区東側で検出された中世墓から山茶碗、短刀、割板が出土した。8月19日に、当研究所保存処理室長の西尾太加二により短刀と割板の取上げを行った。8月25日には、中世の掘立柱建物跡について神戸芸術工科大学名誉教授伊藤延男氏の現地指導を受けた。

8月中旬、2区西側の古墳時代の遺構を確認するため、重機による表土除去を行った。その結果、弥生時代の住居跡の炉跡と思われる遺構は検出したが、古墳時代の遺構は存在しないことがわかった。

想定ていなかった溝状遺構の検出、想定以上の遺物の量、7月の長雨等の理由で、予定していた9月中旬には調査が終了しないと判断し、9月2日、静岡県袋井土木事務所掛川支所、静岡県教育委員会文化課と協議を行い、その結果10月中旬まで工期が延長となった。

9月3日には1区のラジコンヘリによる空中写真測量を実施し、1区の調査を終了した。9月5日には、2区の残りの範囲について重機による表土除去を実施し、その後人力掘削を行った。この面からは、住居跡、掘立柱建物跡、環濠、土坑、井戸状遺構等を検出した。環濠は2区の北側を縦断する形で検出され、埋土から大量の弥生時代後期の土器が出土した。

10月10日に2区のラジコンヘリによる空中写真測量を実施し、12日には上西郷地区の住民を対象に現地説明会を実施した（見学者125名）。10月15日には3区の確認調査を行った。その後、撤収作業を20日まで行い、平成15年度の調査を終了した。

2004（平成16）年は、昨年10月の確認調査の結果を受け、5月6日より3区の本調査を実施した。重機による表土除去後、人力掘削を行い、掘立柱建物跡の柱穴と思われる遺構、井戸状遺構等を検出した。

5月25日にはラジコンヘリによる空中写真測量を実施した。その後、撤収作業を行い、6月上旬に調査を終了した。

## 2. 整理作業

出土した遺物の水洗、注記、遺物取上げ台帳の作成、写真整理作業等の基礎整理作業は、現地事務所にて調査と並行して行った。本格的な整理作業は、2003（平成15）年10月下旬から開始した。

想定以上の遺構や遺物の量になったため、実際の遺構、遺物数を基に積算し直したところ、当初設定の4か月では終了できないということがわかり、静岡県袋井土木事務所掛川支所、静岡県教育委員会文化課と協議を行った。その結果、整理作業は2004（平成16）年の本調査分と合わせて8月までとなった。

遺構については、現地実測図に基づいて個別の遺構の検討を行い、遺構編集図を作成した。そして、全体図の作成と遺構編集図の版下トレースは業者に委託した。

遺物については、土器の接合から始め、可能なものは復元も行った。その中から、実測図化できるものをを選択した。遺物実測の一部、遺物の版下トレースを業者に委託した。実測がすべて終了した段階で、実測図番号を付け、遺物カードを作成して整理した。

また、遺物の写真撮影は、4×5判と6×7判のカメラを使用して撮影にあたった。金属製品、木製品については当研究所保存処理室が実測、保存処理を行った。

表2 調査工程表

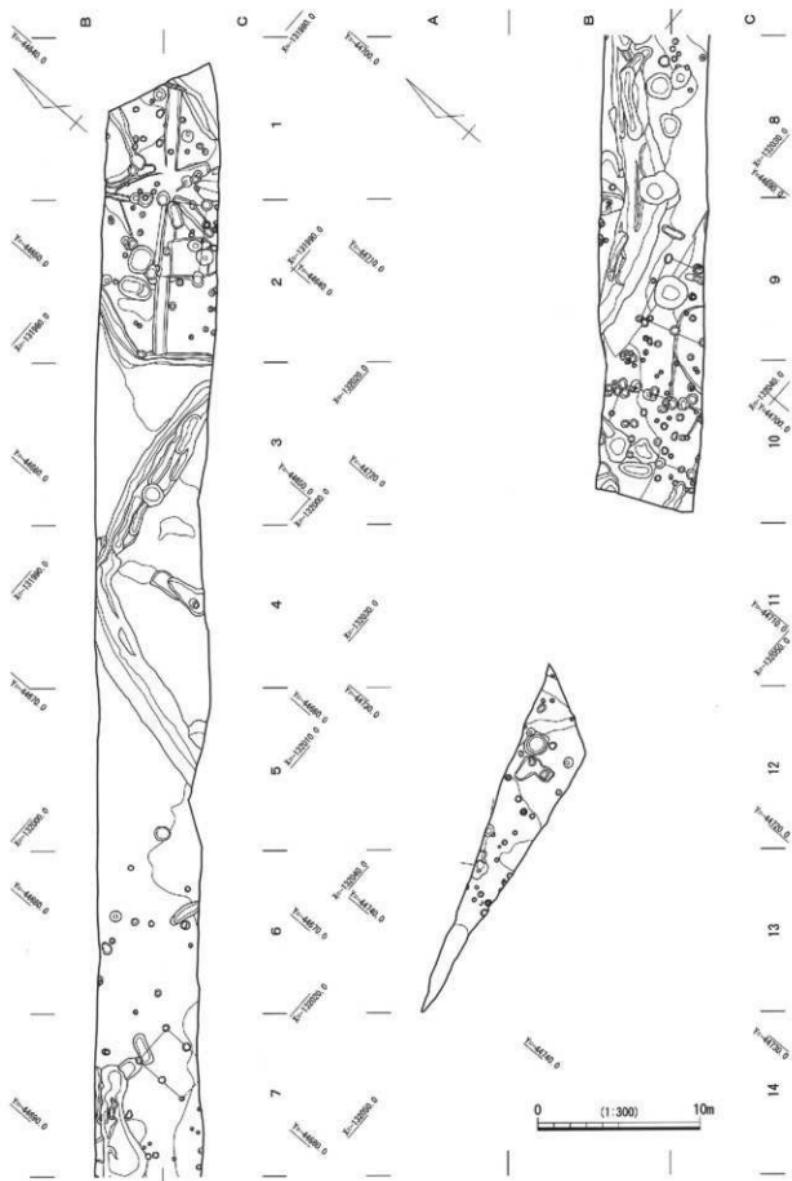
		平成15年						平成16年							
		7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
現地調査	1区														
	2区														
	3区														
整理作業															



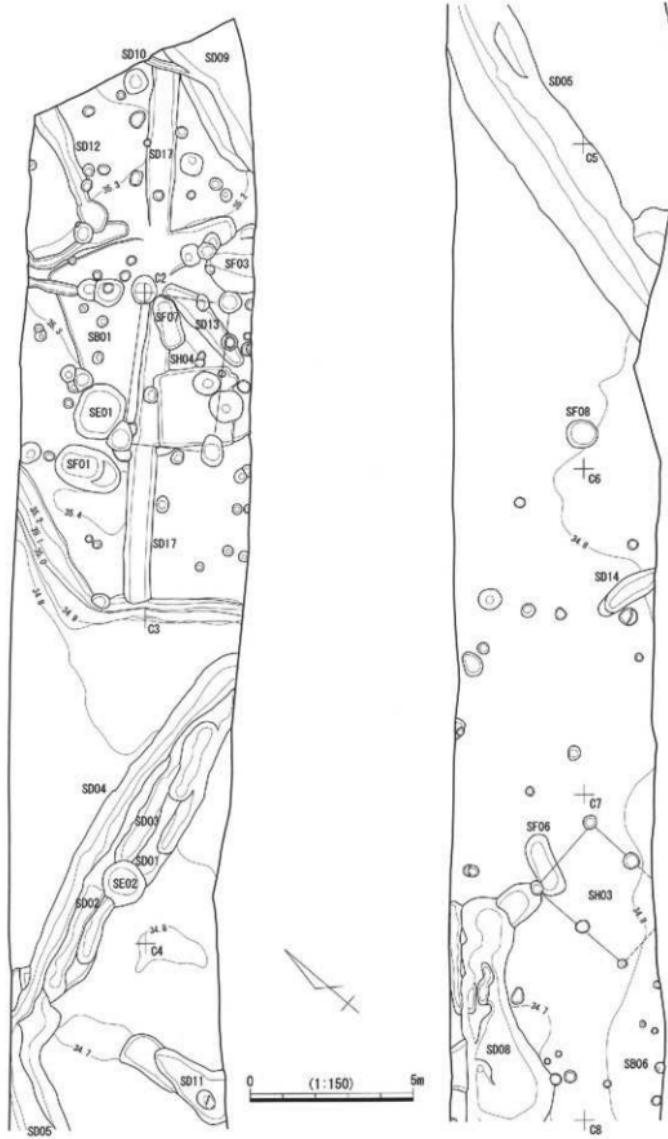
写真1 作業風景



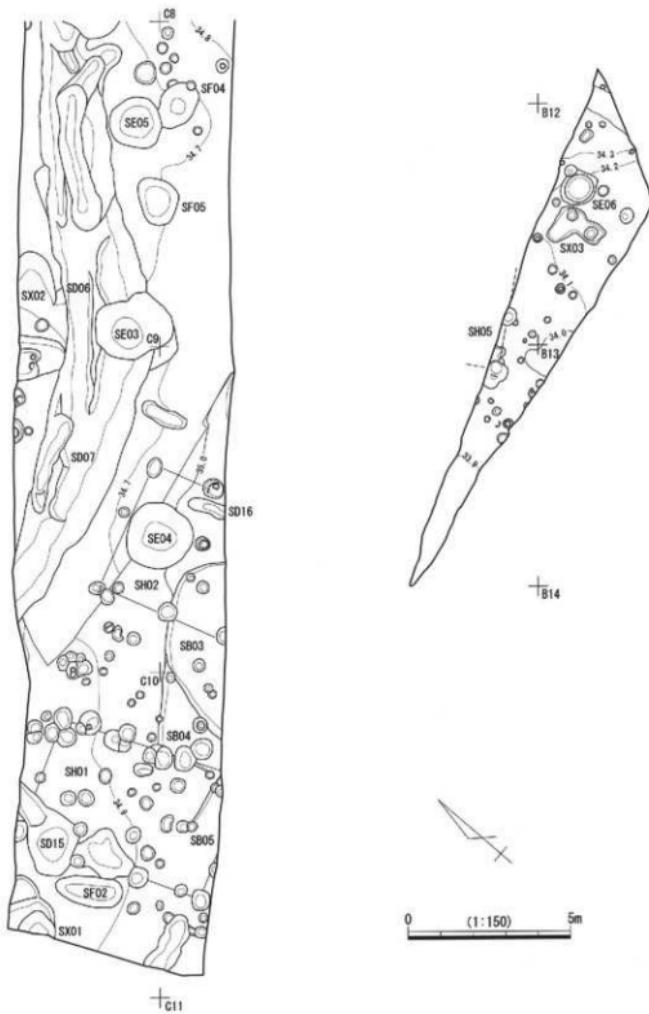
写真2 現地説明会



第5図 調査区全体図



第6図 遺構配置図(1)



第7図 遺構配置図(2)

## 第IV章 調査の成果

今回の調査で検出された遺構は竪穴住居跡、掘立柱建物跡、環濠、溝状遺構、土坑、中世墓、井戸状遺構などである。また、これらの遺構からは多数の遺物が出土した。本章では遺構や遺物を弥生時代～古墳時代、中・近世の2時期に分けて記述することとする。

### 第1節 弥生～古墳時代の遺構と遺物

弥生～古墳時代の遺構は、調査区のはば全域から検出されている。検出された遺構は、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、環濠、溝状遺構、土坑である。出土した遺物は、弥生土器、須恵器、土師器などである。

なお、弥生土器については、壺、甕、高环、台付鉢、鉢があり、菊川様式に属するものが多い。菊川様式の編年については、古・中・新段階に区分する中嶋郁夫氏（中嶋1988、1991、1993）の編年に対応させて検討するものとする。

#### 1. 竪穴住居跡

##### S B01 (第8・27図)

1区、B・C-1・2グリッドから検出された竪穴住居跡である。南側は調査区外のため、規模は推定であるが、長軸6.6m、短軸6.0m、検出面からの深さは0.26m、平面形は方形である。

この住居跡周辺には複数の住居跡の痕跡（床構築土）が残っていたため、検出時は平面形が不明瞭であった。埋土と思われる層には径1～2cmの小礫が多量に含まれていたため、それを目安として掘り下げながら平面形を確定した。埋土は一部しか残っておらず、南西側は検出段階で床構築土のみであった。床面まで掘り下げると、壁溝の一部とP1～P3を検出した。これらは、S B01の主柱穴と考えられる。床構築土は住居全体で検出でき、比較的しりのある暗褐色砂質土であった。炉跡は検出できなかった。

掘方まで掘り下げると多くの小穴と南壁付近で炉跡（焼土）を検出した。P1・P2は複数の小穴と重複しており、建て替えの可能性がある。建て替え前の主柱穴の候補としては、P4～P7が考えられる。炉跡については掘方の底面で検出されたことや主柱穴と近づきすぎることなどから、後述するS B02に属すると考えている。

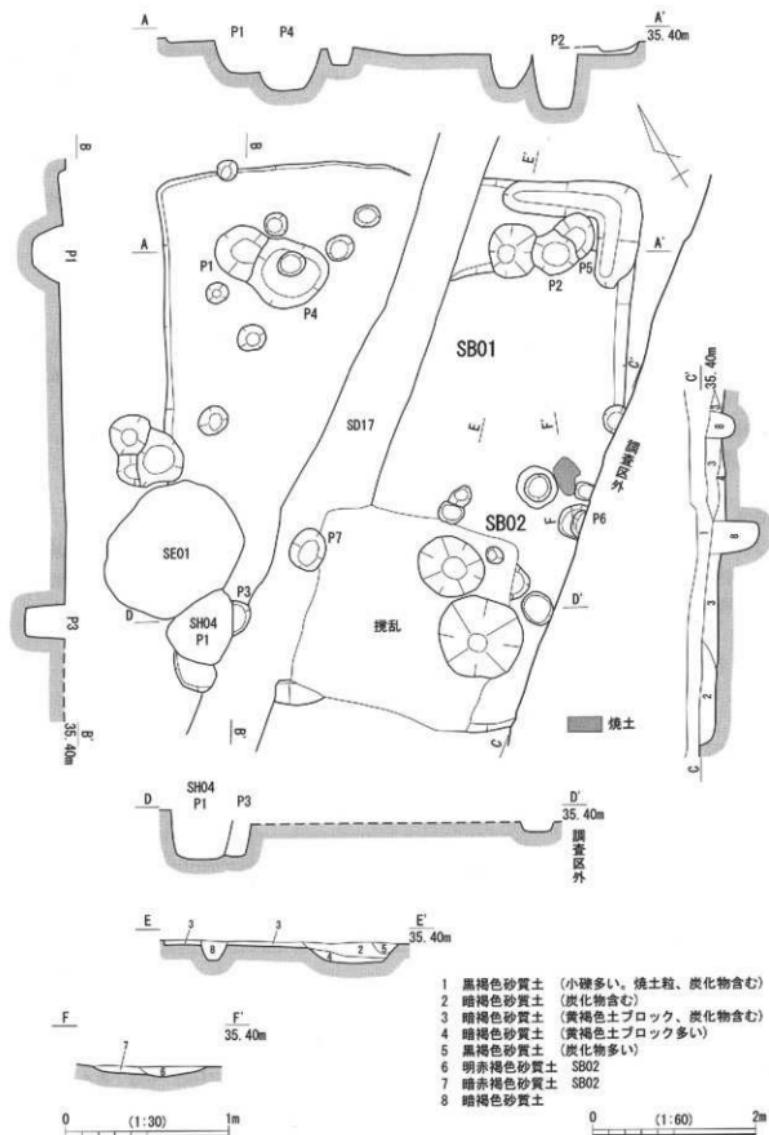
この遺構の周辺には貼床の痕跡など住居跡が存在した可能性が指摘できるが、床面の範囲が明確ではないことや、柱穴の組合せが不明であることから、住居跡の認定はしていない。

団化した土器は壁溝から出土した2点のみであり、1は台付甕の台部、2は高环の脚部で接合部に三角突帯を有する。これらの土器は菊川様式古段階に属するが、S B01の時期は平面形や規模などから弥生後期～古墳前期と幅をもたせて考えておきたい。

##### S B02 (第8図)

S B01と重複している竪穴住居跡である。炉跡と小穴のみの検出のため、住居規模などの詳細は不明である。炉跡がS B01の掘方の底面で検出されたことから、S B01よりも古い時期の住居跡である。S B01の掘方は東側で深く、南側で浅いため、炉跡が残っていたと考えられる。

この遺構からは遺物が出土しなかったため詳しい時期は不明だが、S B01と同様に弥生後期～古墳前期に属すると考えている。



第8図 SB01・02

#### S B03 (第9・27・53図)

2区、C-9・10グリッドから検出された竪穴住居跡である。遺構の南側が調査区外のため規模、形状は推定するほかないが、長軸約5.5m、平面形は橢円形である。検出当初は平面での検討が難しく、S B03・04は一軒の住居跡であると考えていたが、土層断面によってS B03が焼失住居であるS B04を切っている住居跡であることが判明した。

なお、床面や埋土から被熱した弥生土器片や砥石が出土しているが、これはS B04からの流れ込みによるものであろう。ただし、砥石についてはS B04で使用したものとS B03で再利用した可能性を考慮する必要がある。

この遺構の時期は、出土遺物や周囲の遺構との切り合い関係から弥生時代後期と考えられる。

#### S B04 (第9図)

2区、C-9・10グリッドから検出された竪穴住居跡である。遺構の半分以上をS B03に切られているため住居規模などの詳細は不明であるが、おそらく平面形は隅丸方形であろう。残存状況は良くないが、多くの焼土粒や炭化物が確認でき、床面や壁面が焼けていることから焼失住居と判断した。S B03、S H01に切られている。図化できる遺物は出土しなかった。周囲の遺構との切り合い関係から、この遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。

#### S B05 (第9図)

2区、C-10グリッドから検出された住居跡であるが、炉跡と複数の小穴のみの検出で、規模、平面形など詳細は不明である。炉跡の下部には貼床とは異なる、硬くしまった黄褐色砂質土が貼られていた。また、周囲に複数の小穴が存在するが、住居の柱穴と考えられるのはP 1のみであった。

#### S B06 (第9図)

2区、C-7グリッドより炉跡のみ検出された住居跡である。規模や柱穴などは不明である。

表3 弥生時代竪穴住居跡一覧表

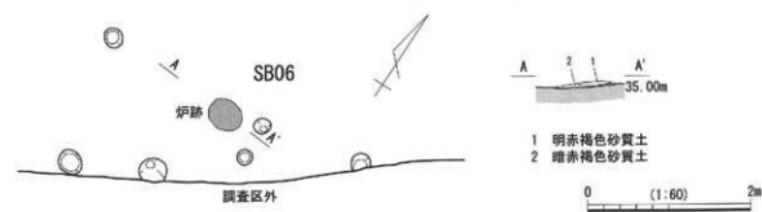
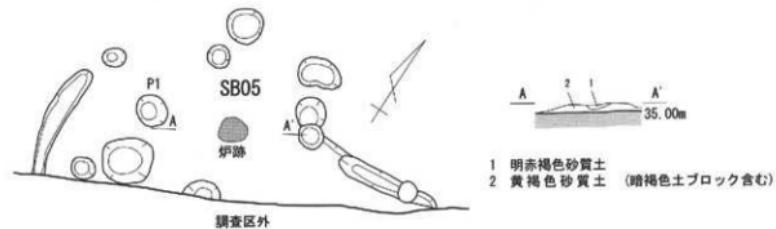
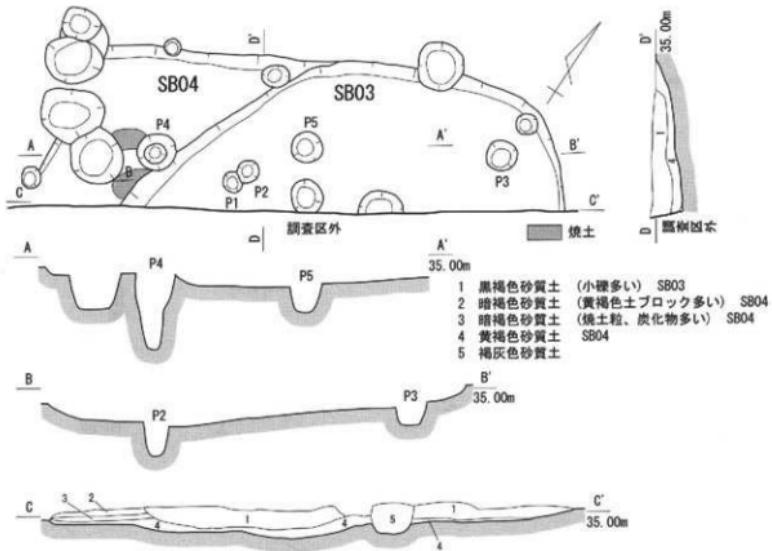
遺構名	グリッド	時期	平面形	長軸(m)	短軸(m)	備考
S B01	B・C-1・2	弥生後期～古墳前期	方形	6.6	6.0	建て替えあり
S B02	C-2	弥生後期～古墳前期	不明	—	—	炉跡、柱穴のみ検出
S B03	C-9・10	弥生後期	橢円形か	5.5	(1.9)	
S B04	C-9・10	弥生後期	不明	—	—	焼失住居か
S B05	C-10	弥生後期	不明	—	—	炉跡、柱穴のみ検出
S B06	C-7	弥生後期	不明	—	—	炉跡のみ検出

## 2. 掘立柱建物跡

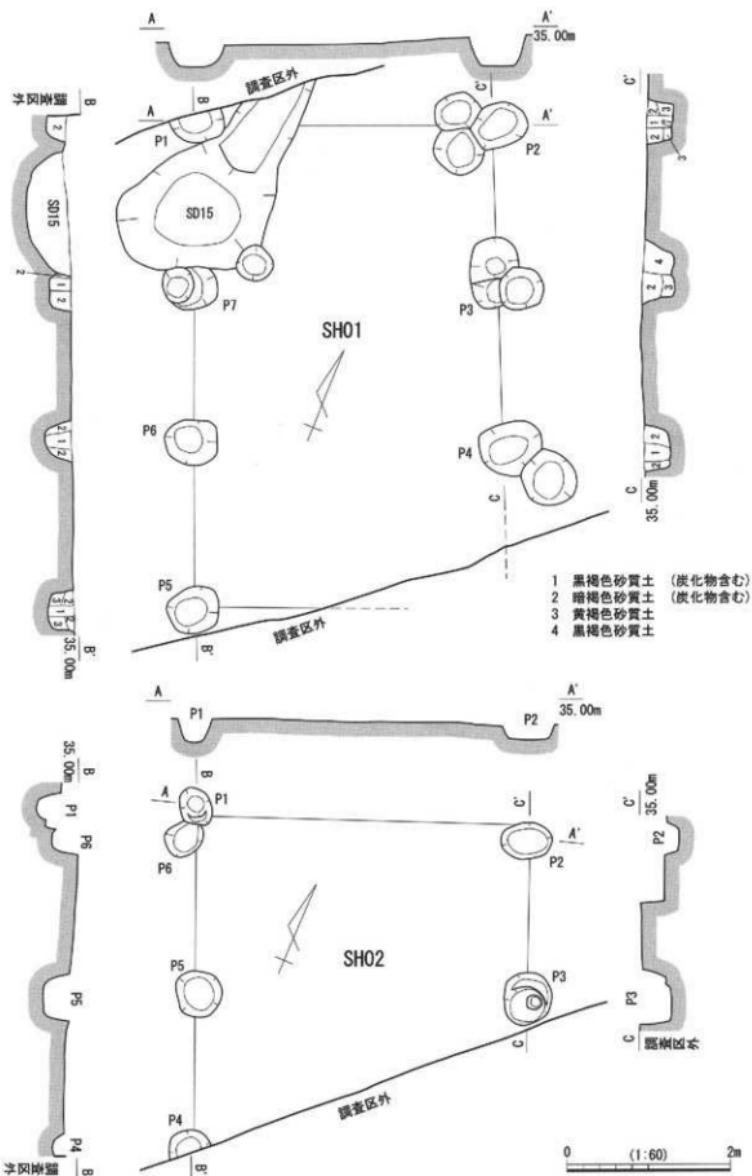
#### S H01 (第10図)

2区、B・C-10グリッドから検出された掘立柱建物跡である。南東部の一部は調査区外だが、建物は梁間1間×桁行3間のプランであり、その規模は、3.8m×6.0m、面積は約22.80m<sup>2</sup>である。主軸方位はN-20°-Wである。柱穴の直径は平均で約0.60m、検出面からの深さは0.24～0.40mほどである。その土層断面を観察すると柱の痕跡が確認できるものもあり、2～3層に分層できる。

埋土中からは弥生土器片が出土した。切り合い関係は、S B04を切り、後述するS D15に切られている。よって、この遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。



第9図 SB03~06



第10図 SH01・02

### S H02 (第10図)

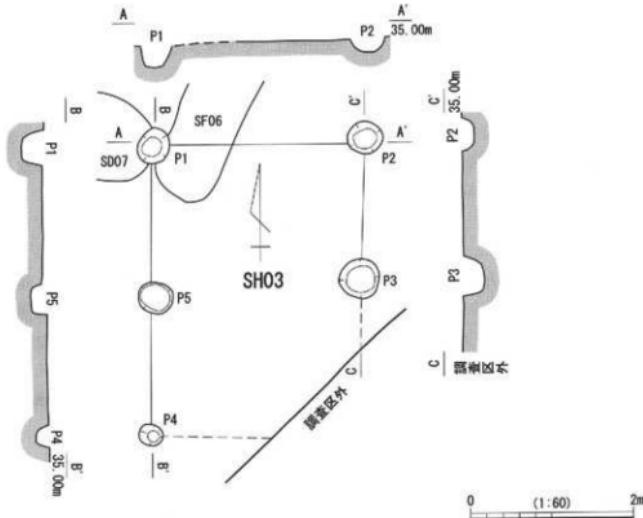
S H01の4m東側、B・C-9グリッドから検出された掘立柱建物跡である。主軸方位はN-15°-Wとなっており、S H01とほぼ同じ方位である。この遺構も南東部が調査区外のため、建物のプランは梁間1間×桁行2間しか確認できなかった。確認できる規模は4.1m×4.1m、面積は約16.81m<sup>2</sup>で、ピットの直径の平均は0.50m、検出面からの深さは0.18~0.40mである。ピットの埋土中からは弥生土器片や炭化物が出土した。土器は弥生時代後期のものであるため、この遺構の時期も弥生時代後期と考えられる。主軸方向が一致することから、S H01と同一時期の可能性もある。

### S H03 (第11図)

2区、B・C-7グリッドから検出された掘立柱建物跡である。主軸方位はほぼ北である。建物は南東側が一部調査区外ではあるが、P 4の南側に対応するピットがなかったため、梁間1間×桁行2間のプランと推定できる。規模は2.6m×3.6mで、面積は約9.36m<sup>2</sup>である。ピットの直径は平均0.40m、検出面からの深さは0.15~0.25mである。ピットからは遺物が出土しなかったため詳しい時期ははつきりしないが、規模などから弥生時代後期と考えておきたい。

表4 弥生時代掘立柱建物跡一覧表

遺構名	グリッド	時期	主軸方向	間数(梁間×桁行)	規模(m)	面積(m <sup>2</sup> )	備考
S H01	B・C-10	弥生後期	N-20°-W	1×3	3.8×6.0	22.80	
S H02	B・C-9	弥生後期	N-15°-W	(1×2)	4.1×(4.1)	(16.81)	
S H03	B・C-7	弥生後期	ほぼ北	1×2	2.6×3.6	9.36	



第11図 S H03

### 3. 環濠

弥生時代後期の溝状遺構のうち、立地、規模や断面の形状、遺物の出土量などから S D01～07を環濠と判断し、ここで扱う。そのうち、S D01～04、S D06・07が重複している。

#### S D01～04 (第12図)

1区、B・C-3・4グリッドから検出された環濠である。検出時は1条の環濠と判断したが、断面で確認したところ、4条の溝が重複していることが判明した。ほぼ直線状の溝で、主軸方位はN-80°-E、西端をS D05に切られており、東側は調査区外へ延びている。

4条の溝に共通していることは、底面に炭化物や有機物の堆積が認められることであり、不要になつた土器や生活ごみをこれらの溝に廃棄したと考えられる。また、S D02、04の埋土には人為的な埋め戻しの痕跡が観察でき、4条の溝が重複していることから判断して、土器などの廃棄や人為的な埋め戻し、再掘削を繰り返していたと考えられる。

出土した弥生時代後期の土器群には、壺、甕、高杯、鉢があり、特にS D01の埋土中から多く出土している。その土器は菊川様式古段階の特徴をもつ。

この環濠の掘削の順番は、土層断面を検討するとS D03→S D02→S D04→S D01であることがわかる。廃絶時期は底面から菊川様式古段階の土器が出土していることから弥生時代後期前葉と考えられる。最初にS D03を掘り、土器などの破棄、新たな溝の掘削という行為を繰り返し(S D02→S D04)、最後にS D01が掘られたのであろう。その後、S D01は徐々に自然埋没したと考えられる。

しかし、S D01上層で菊川様式新段階の土器が出土していることから、弥生時代後期後葉まで、ある程度くぼみとして残っていた可能性がある。以下で、S D01～04の個々の特徴を述べる。

#### S D01 (第12・27・28図)

検出長約12m、幅0.6～1.3m、検出面からの深さは0.3～0.7mである。4条の溝状遺構の一番南側に掘られていて、S D05、S E02に切られている。断面形は、V字及びU字形である。溝の深い部分ほどV字に掘られている。4条の溝の中では一番新しく掘られたものである。

埋土は最も深い部分で3層に分けられ、1層と3層の下部に炭化物や有機物の堆積が認められた。1層と2・3層で上、下層に区分でき、埋土中からは多数の弥生土器が出土している。特に、溝の東半分から遺物が集中して出土している。埋土には地山の土の混入は少ないため、徐々に自然埋没していったと考えられる。出土遺物は4～30である。12以外は菊川様式古段階に属する。

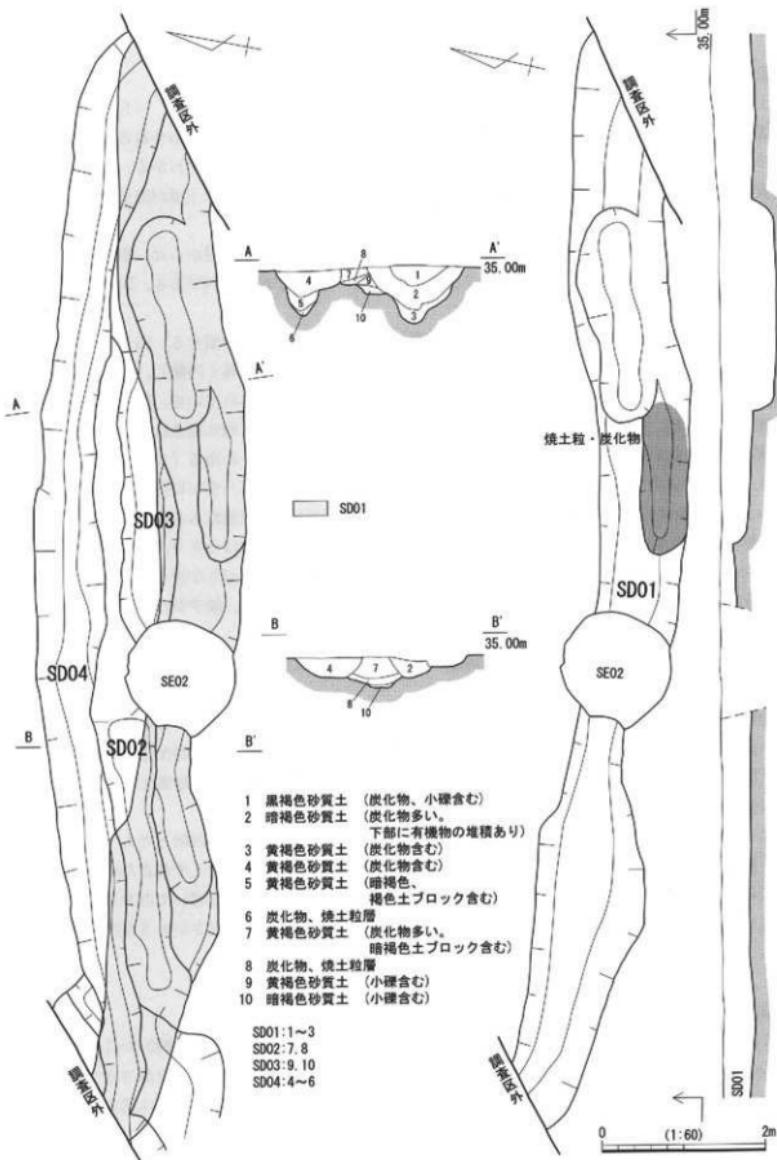
#### S D02・03 (第12・29図)

S D01、S D04と重複しており、ともに一部のみの検出であるため詳細は不明である。4条の中ではS D03が一番古く、次にS D02が掘られている。埋土の主体はともに黄褐色砂質土で、底部には炭化物、有機物が堆積している。S D03の底部には小礫の堆積が認められたが、埋土中から遺物は出土しなかつた。

S D02出土土器は31～40である。菊川様式古段階の中でもより古く、弥生時代後期初頭に比定される土器が出土している。

#### S D04 (第12・29図)

検出長約13m、幅約0.5～1.0m、検出面からの深さ0.3～0.5mである。断面形はV字及びU字形である。埋土は3層で、1・2層の主体は黄褐色砂質土である。底部には、炭化物や有機物・焼土粒の堆積



第12図 SD01～04

が認められた。埋土は識別が困難なほど地山と類似しており、埋め戻しが行われたと考えられる。

#### S D05 (第13・30~32図)

1区、B・C-4・5グリッドから検出された環濠である。主軸方位はN-15°-Eで、ほぼ直線状に掘られている。検出長約11m、幅2.3~2.5m、検出面からの深さは1.4~1.6mである。断面形はV字形である。この遺構の北側でSD01を切っており、SD01よりも新しいことがわかる。北側、南側とも調査区外に延びている。埋土は3つのグループに区分でき、それぞれの層で土器が出土した。層別に埋土の特徴と出土遺物を記述する。

上層（1層）は、土器片や炭化物を多く含む黒褐色砂質土である。この層からは、多量の土器器や須恵器が第13図に見られるようにまとまって出土しており、一括性が高い資料である。50~53の弥生土器、54~60の須恵器、61~79の土器器が出土した。

54は須恵器环蓋で、天井部と口縁部の境に明瞭な稜をもち、口縁部は内傾する。55・56は环身で、55は器高が大きく口縁の立ち上がりは内傾する。56は口縁の立ち上がりが短く内傾し、端部は丸く仕上げられ、受け部は平らであり、底部は回転ヘラ削りによって平らに調整されている。57は短頸壺で口縁部に波状文、胴部に櫛刺突文が施文され、刺突文の上部に細い刻みが部分的に施されている。58も短頸壺で胴部に櫛刺突文が施文され、全体的に厚く重量感がある。59は盤でいわゆる「コップ形須恵器」であろう。底部から緩やかに湾曲し、胸部上半に一条の突帯を有し、口縁はわずかに内傾しながら直線的に立ち上がる。全体的に回転ナデによって成形されている。「把手付」の可能性もあるが残存部分が少ないので即断はできない。60は提瓶で胴部は一部欠損している。胴部外面にはカキメが施され、内面には同心円状の当て具痕が残っている。63~65は須恵器を模倣した环で立ち上がりが短く内傾するものや直線的に立ち上がるものが見られる。75~78は長胴甕で口縁部が厚く作られ、緩やかに外反するものや頭部がくの字状に屈曲しながら外反するものが見られる。

これらの土器は遼江編年囗期前葉（陶邑編年T K10併行期）に属するものが中心であり、SD05の上層の埋没時期はこの頃であったと考えられる。

中層（2・3・5層）は、黄褐色土、炭化物を多く含む暗褐色砂質土である。この層からは、45のパレス壺や48・49の透かしの入った高环の脚部など弥生後期末～古墳前期の土器が出土している。

下層（4・6・7層）は、黄褐色土や炭化物を含む褐灰色粘質土及び黄褐色砂質土である。この層からは遺物がほとんど出土せず、図化できたのは42・43の壺の破片のみである。

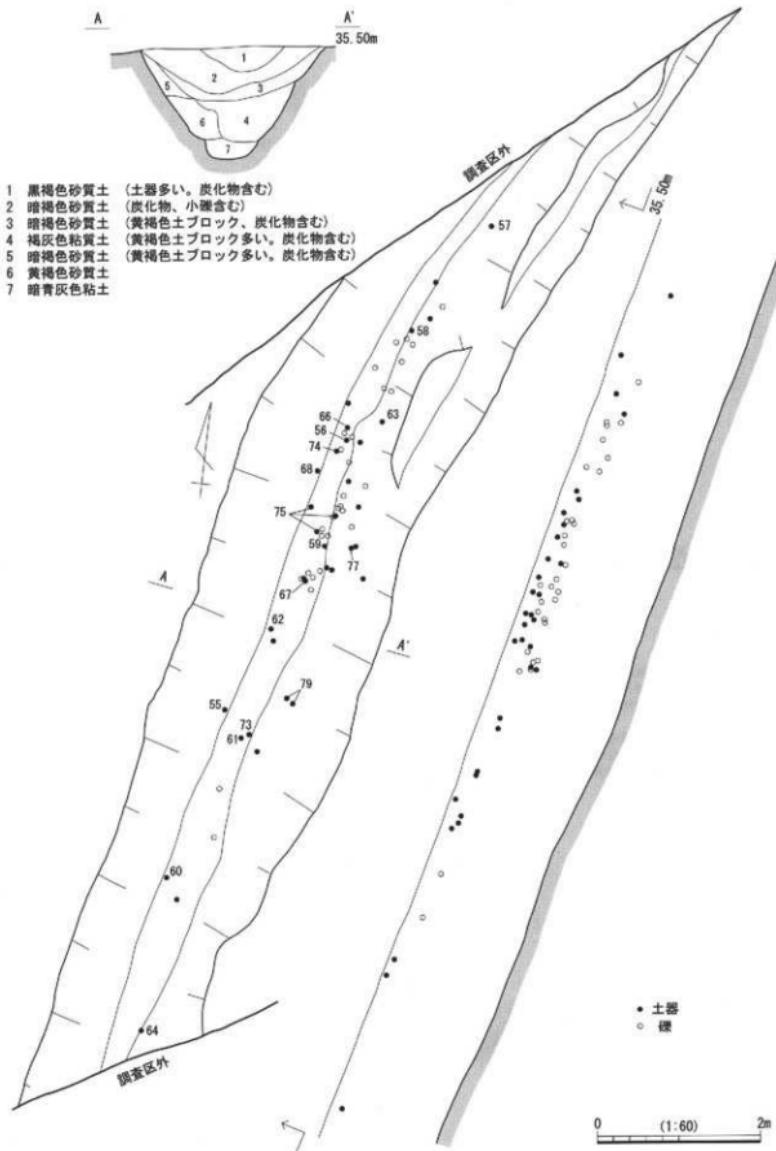
よって、時期を決める資料としては弱いが、下層の2点が菊川様式中～新段階と考えられることや中層の遺物と照らし合わせて判断して、SD05の廃絶時期を弥生後期後半と考えておきたい。

このように下層から遺物がほとんど出土しないことは他の環濠との大きな違いである。また、土層を観察しても人為的な埋め戻しや再掘削の痕跡は認められないことや底面の高さがある程度一定であることもこの環濠の特徴である。

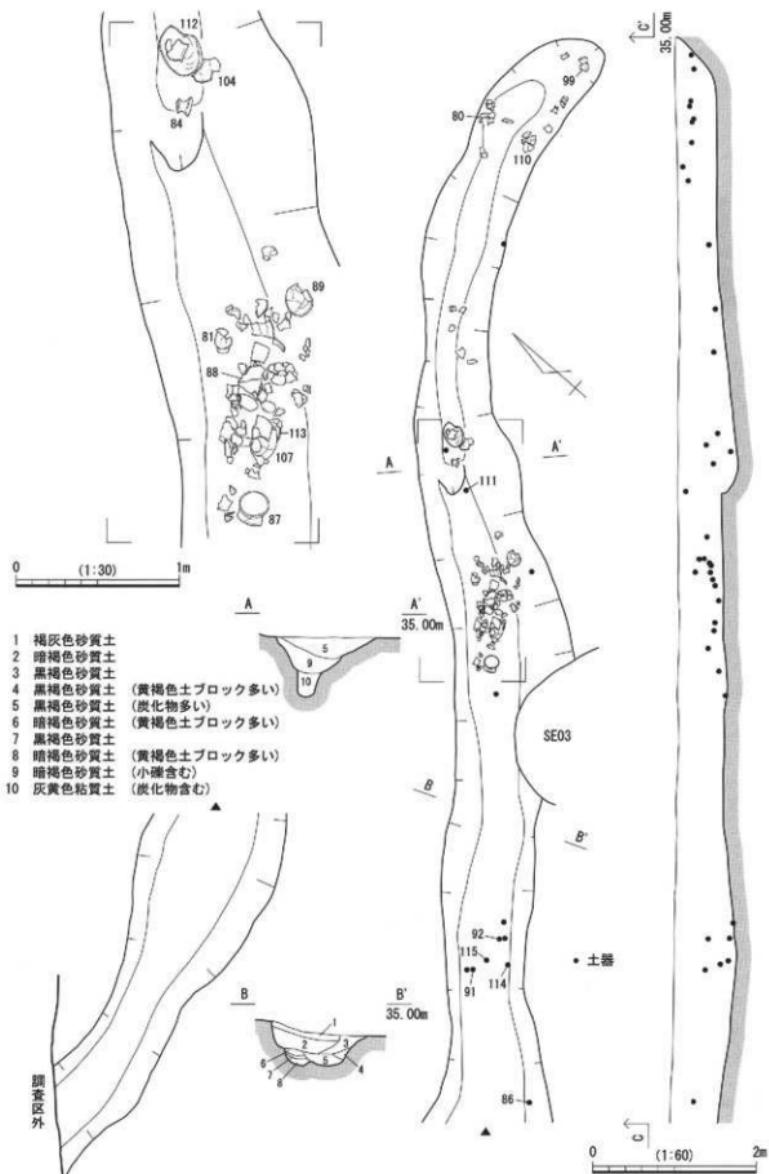
#### S D06 (第14・33~35図)

2区、B-8・9グリッドにかけて検出された環濠である。検出長約20.8m、幅0.8~1.5m、検出面からの深さ0.5~0.7mである。溝の断面形はほとんどの場所でU字形であるが、東端付近では急激に深くなりV字形となる。調査区の北端沿いをゆるやかなS字状に掘られており、西側は調査区外へ延びている。東端は緩やかに立ち上がり収束している。

埋土は黒褐色砂質土で、人為的に埋め戻された痕跡は認められなかった。出土した土器群（80~116）には壺、甕、高环等があり、その文様、形態は菊川様式古段階の特徴をもつ。特に溝中央付近ではまと



第13図 SD05



第14図 S D06

まって出土しているが、これらは一括廃棄された可能性がある。

#### S D07 (第15・16・36~44図)

2区、B-7~9グリッドにかけて検出された環濠である。検出長約23m、幅1.4~2.0m、検出面からの深さは0.5~1.2mである。前述したS D06の南側を、ゆるやかなS字状に掘られており、西側は調査区外へと延びている。東端は急激に立ち上がり収束している。

検出時はS D06~08を1条の環濠と考えていたが、精査するうちに平面的に数条の溝の存在がみられ、断面でも全ての場所で複数の溝の切り合いが確認できたので、同じ環濠の再掘削によるものと判断した。第16図でわかるように、埋土は暗褐色砂質土と灰黄色砂質土が互層になって堆積しており、部分的ではあるが炭化物や焼土粒の堆積層も認められる。

特にB B' と E E' 付近は溝の底面の凹凸が激しく、埋土も地山に類似した灰黄色砂質土であるため、再掘削や埋め戻しが頻繁に行われた可能性がある。溝の平面形や土層断面から検討すると全体か部分のかは判断できないが、S D06も含めて少なくとも3回は掘り直されていると考えられる。

S D01同様、この環濠も底面が一定しておらず、急激に深くなり断面形もV字形になる箇所が存在する。ただし、S D07の西側は底面に硬い礫層が現れており、A A' 付近から礫層は急激に落ち込んでいる。環濠の掘削もこの礫層の影響を受けたと考えられ、A A' から西側は硬い礫層のため、それ以上掘れず、柔らかい部分のみ掘削したと推定できる。そのため、本来は全体的に深いV字形にしたかったのかもしれない。

また、F F' の東側で長さ1.5m程の急に浅くなる部分がある。このような例として袋井市鶴松遺跡(袋井 1988b)の環濠があり、陸橋部の可能性がある。

この環濠の東端は前述したように、急激に立ち上がって収束している。このように明瞭に環濠が途切れる事例は静岡県ではあまり例がないが、愛知県阿弥陀寺遺跡の環濠の例から判断すると環濠の開口部の可能性が考えられる。このように推定すると、この環濠の続きは溝の形状や出土土器からS D01~04が相当すると考えられるが、この点については第V章で詳しく触ることとする。

出土土器(II7~214)には壺、甕、高杯等があり、遺構全体から出土している。特に環濠の東端では、同一層内から集中して出土しているため、一括廃棄された可能性も考えられる。土器の文様、形態は菊川様式古段階の特徴をもち、古段階の中でも古い要素をもつ土器も出土している。よって、この環濠は弥生時代後期初頭に掘削され、後期前葉に廃絶したと考えられる。

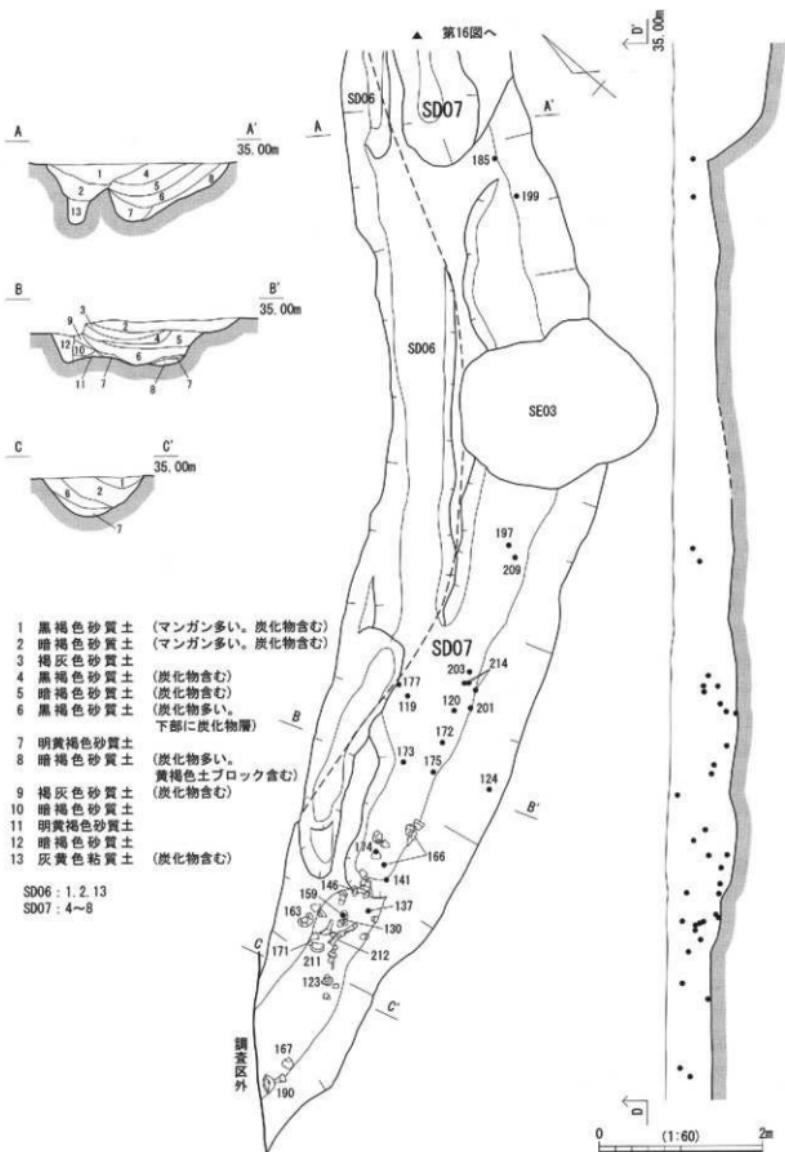
#### 4. 溝状遺構

##### S D08 (第16・45・46図)

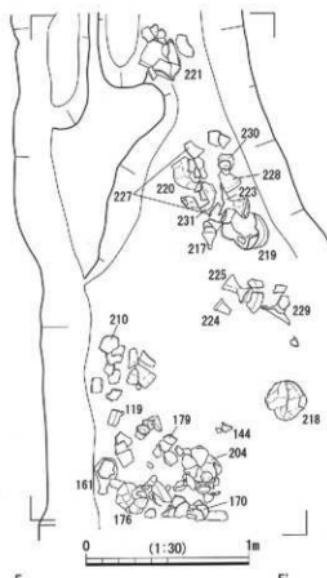
2区、B-7グリッドから検出された溝状遺構である。主軸方位はN-25°-E、全長、幅などは、S D07に切られているため不明である。検出面からの深さは1.0~1.2mで、断面形はU字形である。埋土は地山に類似した灰黄色砂質土が中心で、この層から土器がまとまって出土した。この灰黄色砂質土は自然に埋没した土ではなく、人為的に埋め戻された土と考えられる。さらに、この層から出土した土器には残存率が高い土器が多いことなどから、溝を埋め戻した際に一括廃棄された可能性がある。

この溝の性格については、溝の全体的な形状が不明であるため、慎重な判断が必要であるが、出土土器がS D07の土器とほぼ同時期である点や溝が途切れている点、溝が非常に深いことなどからS D06・07と同様に断続的な環濠の一部である可能性を指摘しておきたい。

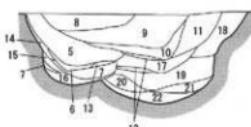
出土した土器群(215~231)には、壺、甕、高杯、台付鉢などがあり、その文様、形態は菊川様式古段階の特徴をもつ。



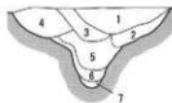
第15図 SD07



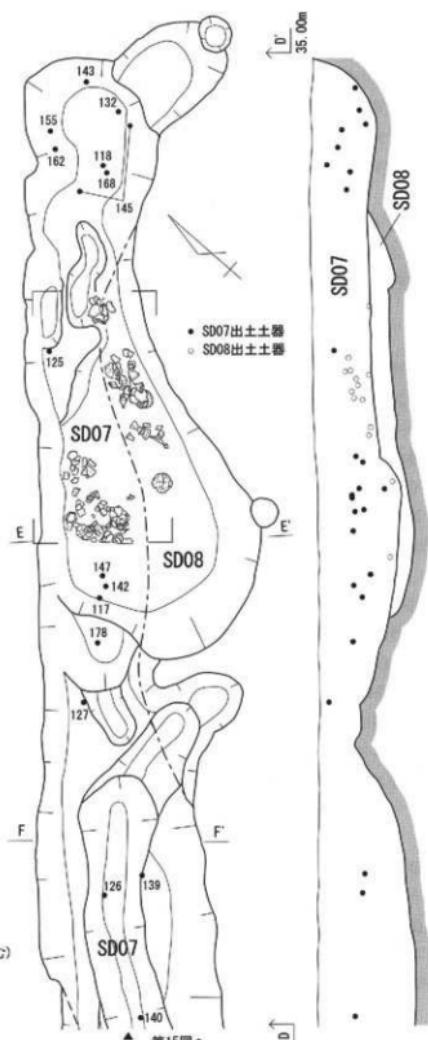
E E' 35.00m



F F' 35.00m



- 1 黒褐色砂質土 (小砾含む)
- 2 線褐色砂質土 (炭化物含む)
- 3 暗褐色砂質土 (小砾含む)
- 4 暗褐色砂質土 (黄褐色土ブロック含む)
- 5 灰黄色砂質土 (炭化物多い。灰色土ブロック含む)
- 6 黑褐色砂質土 (炭化物多い)
- 7 灰色粘質土 (炭化物含む)
- 8 暗灰色砂質土 (炭化物含む)
- 9 黑褐色砂質土 (炭化物多い)
- 10 暗褐色砂質土 (炭化物多い)
- 11 灰黄色砂質土 (炭化物多い)
- 12 黑褐色砂質土 (炭化物多い)
- 13 灰黄色砂質土 (黄褐色土ブロック、炭化物含む)
- 14 暗褐色砂質土 (黄褐色土ブロック、炭化物含む)
- 15 黑褐色砂質土 (炭化物多い)
- 16 灰色粘質土 (暗褐色土ブロック、炭化物含む)
- 17 灰黄色砂質土 (暗褐色土ブロック含む)



SD06 : 1, 2  
SD07 : 3~10, 12~16  
SD08 : 11, 17~22

18 黄褐色砂質土  
19 灰黄色砂質土  
20 灰色砂質土  
21 明黃褐色砂質土  
22 暗褐色粘質土

0 (1:60) 2m

第16図 SD07・08

#### S D09 (第17・47図)

1区、C-1グリッドから検出された溝状遺構である。主軸方位はN-10°-E、検出長約3m、検出面からの深さは0.6~0.7mである。1区の東端から検出されたため、一部は調査区外にかかっており正確な規模は不明である。埋土は小礫、炭化物、焼土粒を含む黒褐色砂質土で、底面近くから弥生土器、ガラス小玉が出土した。出土遺物は232~238であり、菊川様式古段階に属する。この溝は、位置関係からS D01~04とつながっている可能性もあるが即断はできない。

#### S D10 (第17図)

1区、C-1グリッドから検出された短い溝状遺構である。検出長1.8m、幅0.3m、検出面からの深さは約0.2mで、主軸方位はN-25°-Wである。切り合い関係はS D09を切っていてS D17に切られている。この遺構から遺物は出土していない。

#### S D11 (第17・47~49図)

1区、C-4グリッドから検出された溝状遺構である。主軸方位はN-5°-W、検出長約3.4m、幅1.0~1.6m、検出面からの深さは0.4mである。溝の北側は一段浅くなっているが、南側は調査区外に延びている。断面は皿状を呈しており、埋土は黒褐色砂質土、暗褐色砂質土とともに炭化物を含んでいる。埋土中からは多数の弥生土器が出土した。

遺物は溝の上層からまとまって出土している。241の口唇部は平らに面取りされ縄文が施文される。口縁部内面には波状文と扇形文が施文された後に円形浮文が貼付され、胴部には櫛刺突羽状文が施文されている。242は口縁部が湾曲した壺で折返し部は肥厚し、丁寧なナデ調整が施されている。口縁部内面と胴部に羽状縄文が施文される。245は太頸の小型壺で胴部には櫛刺突羽状文が施文される。250・251は壺部外面に稜を持つ高杯である。壺部の形態は屈曲し稜をもつ点で伊場様式の要素を有しており、脚部は透かしがなく、裾部にわずかな段が見られる点で菊川様式に含まれる。この土器は伊場様式と菊川様式の折衷土器であろう。252は胴部が欠損した鉢である。外面に櫛刺突羽状文が施文されている。欠損している胴部は、頸部の屈曲状態から球胴形と推定できる。

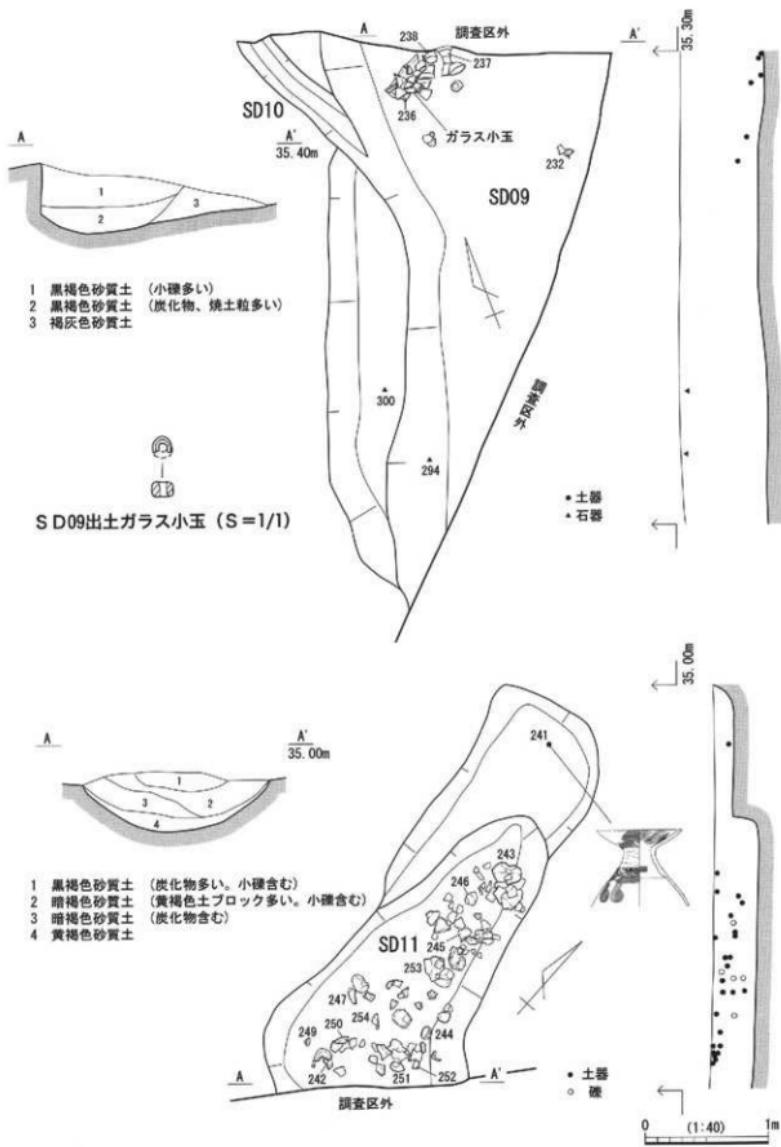
これらの土器の時期については壺、小型壺の文様や器形から菊川様式中段階に比定される。ただし、上述のように伊場様式の影響を受けた特徴的な文様や器形の土器が多く、この遺構の特殊性を示している。

#### S D12 (第18・49図)

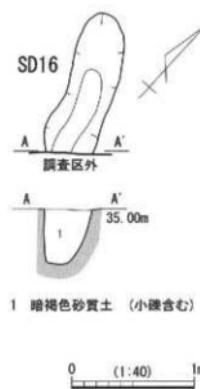
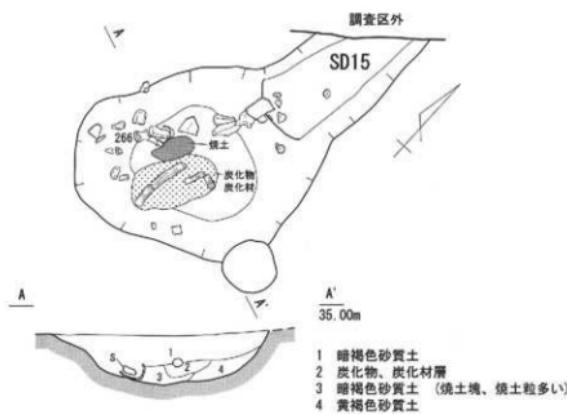
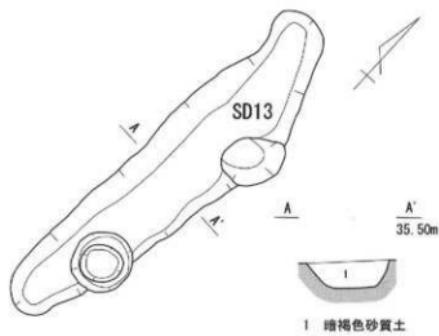
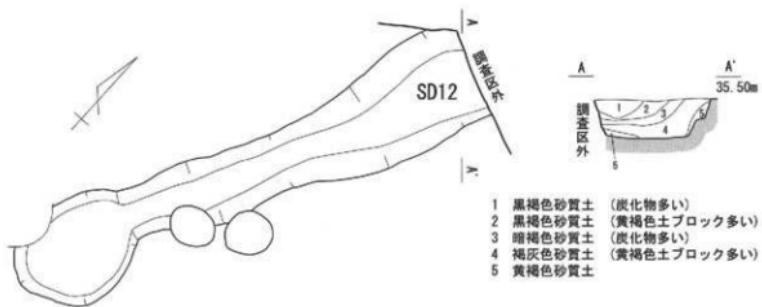
1区、B-1グリッドから検出された溝状遺構である。ほぼ直線状で、主軸方位はN-25°-E、検出長約4.1m、幅0.4~0.9m、検出面からの深さは0.2~0.3mである。北側は調査区外に延びていると考えられる。断面は逆台形を呈しており、埋土は黒褐色砂質土、暗褐色砂質土、褐灰色砂質土である。溝の上層からは炭化物、下層からは菊川様式古段階に属する土器が出土している。

#### S D13 (第18・50図)

1区、C-2グリッドから検出された溝状遺構である。ほぼ直線状の溝で、主軸方位はN-5°-E、検出長約3.3m、幅0.5~0.8m、検出面からの深さは0.2mである。S B01・02の貼床除去後に検出した。断面は逆台形を呈し、埋土は暗褐色砂質土である。埋土中からは菊川様式古段階の土器が出土している。



第17図 SD09~11



第18図 SD12~16

#### SD14 (第18・49図)

2区、C-6グリッドから検出された溝状遺構である。検出長約1.8mであるが、南側は調査区外に延びていると考えられる。主軸方位はN-75°-W、幅0.6~0.7m、検出面からの深さは0.2mである。断面は皿状を呈し、埋土は暗褐色砂質土である。出土した土器は259~262で菊川様式古段階の特徴をもつ。

#### SD15 (第18・50図)

2区、B-10グリッドから検出された溝状遺構である。主軸方位はN-20°-E、検出長約2.8m、幅0.8~1.6m、検出面からの深さは0.20~0.35mである。北側は調査区外に延びている。断面は幅広の皿状を呈し、埋土の主体は暗褐色砂質土である。埋土中からは炭化材や焼土塊とともに菊川様式古段階の土器が出土している。

#### SD16 (第18・50図)

2区、C-9グリッドから検出された溝状遺構である。主軸方位はN-25°-W、検出長約1.2m、幅0.4m、検出面からの深さは0.5mである。南側は調査区外に延びている。断面はU字形を呈しており、埋土は小砾を含む暗褐色砂質土である。埋土中からは菊川様式古段階の土器が出土している。

表5 弥生時代環濠・溝状遺構一覧表

遺構名	時期	主軸方向	検出長(m)	幅(m)	深さ(m)	断面形	備考
SD01	弥生後期前葉	N-80°-E	12.0	0.6~1.3	0.3~0.7	U/V字形	環濠
SD02	弥生後期前葉		8.4	0.3~0.7	0.2~0.4	U字形	環濠
SD03	弥生後期前葉		4.2	0.5~0.7	0.3	U字形	環濠
SD04	弥生後期前葉		13.0	0.5~1.0	0.3~0.5	U/V字形	環濠
SD05	弥生後期後半	N-15°-E	11.0	2.3~2.5	1.4~1.6	V字形	環濠
SD06	弥生後期前葉		20.8	0.8~1.5	0.5~0.7	U/V字形	環濠
SD07	弥生後期前葉		23.0	1.4~2.0	0.5~1.2	U/V字形	環濠
SD08	弥生後期前葉	N-25°-E	-	-	1.0~1.2	U字形	環濠の可能性あり
SD09	弥生後期前葉	N-10°-E	3.0	-	0.6~0.7	U字形	ガラス小玉出土
SD10	弥生後期	N-25°-W	1.8	0.3	0.2	皿状	
SD11	弥生後期中葉	N-5°-W	3.4	1.0~1.6	0.4	皿状	伊場様式の模倣土器
SD12	弥生後期	N-25°-E	4.1	0.4~0.9	0.2~0.3	逆台形	
SD13	弥生後期前葉	N-5°-E	3.3	0.5~0.8	0.2	逆台形	
SD14	弥生後期前葉	N-75°-W	1.8	0.6~0.7	0.2	皿状	
SD15	弥生後期前葉	N-20°-E	2.8	0.8~1.6	0.2~0.4	皿状	炭化材、焼土塊
SD16	弥生後期	N-25°-W	1.2	0.4	0.5	U字形	

## 5. 土坑

### S F01 (第19・51図)

1区、B-2グリッドから検出された土坑である。平面形は梢円形で、規模は長径2.10m、短径1.30m、検出面からの深さは0.35m、断面の形状は逆台形、底面の南側は狭い平坦部があり、2段になっている。埋土は暗褐色砂質土、焼土粒・炭化物層、黄褐色砂質土の3層に分層できる。最上層の暗褐色砂質土からは弥生時代後期の土器片が多数出土した。その内、図化できたものは272~274であり、これらは菊川様式中段階に属する。

### S F02 (第19・51図)

2区、B-10グリッドから検出された土坑である。平面形は梢円形で、規模は長径2.10m、短径0.90m、検出面からの深さは0.44m、断面の形状は皿状である。埋土は焼土粒や炭化物を多く含む黒褐色砂質土、淡黄色土ブロックや炭化物を含む黄褐色砂質土の2層で、上層の黒褐色砂質土からは弥生時代後期の土器片が多数出土した。その内、図化できたものは275・276の2個体で、これらは菊川様式古段階に属する。

### S F03 (第19・51・52図)

1区、C-1グリッドから検出された不整形の土坑である。一部は調査区外にかかっており、詳細は不明である。検出面からの深さは0.45m、断面は皿状を呈し、埋土は暗褐色砂質土、黒褐色砂質土、黄褐色砂質土からなる。最下層の暗褐色砂質土からは大量の炭化物、焼土粒、焼土塊に伴って弥生土器が出土した。出土土器は277~280で、菊川様式古段階に属する。

### S F04 (第19・52図)

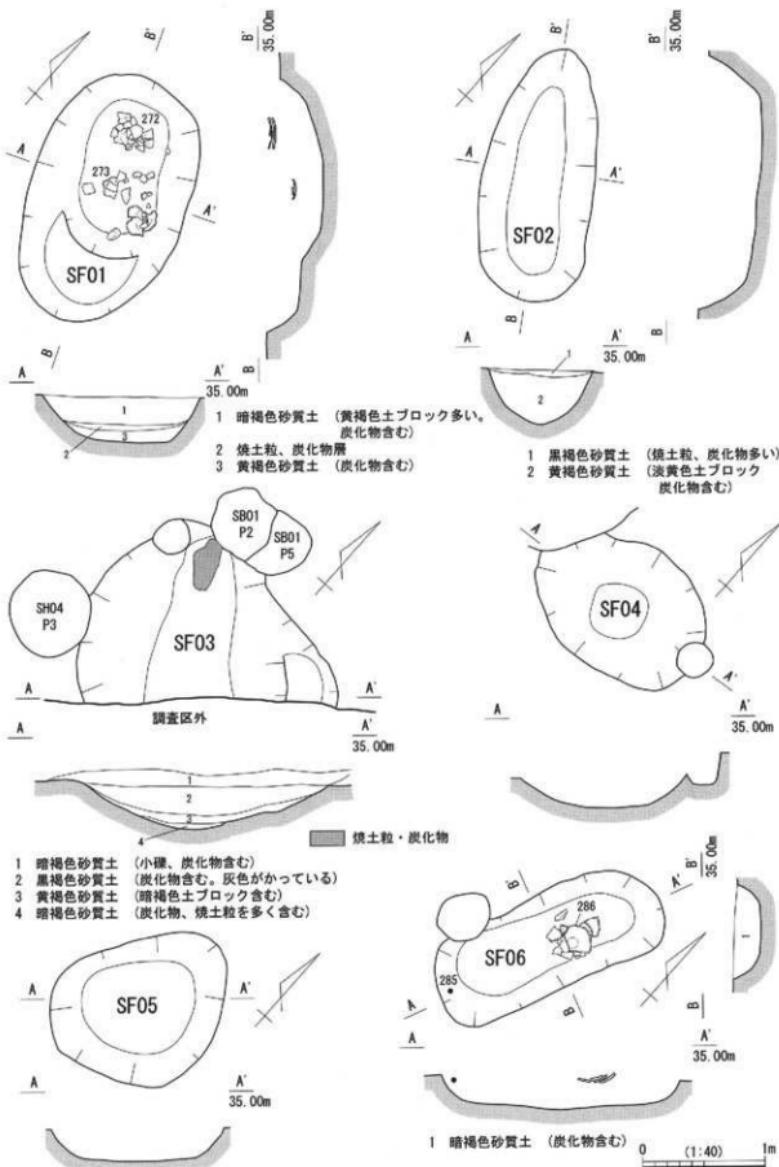
2区、B・C-8グリッドから検出された土坑である。西側をS E05によって一部切られている。平面形はほぼ梢円形で、規模は長径1.53m、短径1.10m、検出面からの深さは0.45mである。断面の形状は皿状を呈し、埋土は暗褐色砂質土である。菊川様式古段階の土器が出土している。

### S F05 (第19・52図)

2区、B・C-8グリッドから検出された土坑である。平面形は不整形で、規模は長径1.55m、短径1.20m、検出面からの深さは0.27mである。断面の形状は皿状を呈し、埋土は暗褐色砂質土である。弥生時代後期の土器が出土している。

### S F06 (第19・52図)

2区、B-7グリッドから検出された土坑である。平面形は隅丸長方形で、規模は長径1.95m、短径0.80m、検出面からの深さは0.20~0.30mである。断面形は皿状を呈する。埋土の主体は暗褐色砂質土で、炭化物、黄褐色土ブロックをわずかに含んでいる。遺構の中央付近で弥生時代後期の土器片がまとまって出土した。図化できた土器は284~286で、285は菊川様式には珍しい台付小型壺である。



第19図 SF01~06

表6 弥生時代土坑一覧表

造構名	グリッド	時期	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備考
S F01	B - 2	弥生後期中葉	梢円形	2.10	1.30	0.35	焼土・炭化物
S F02	B - 10	弥生後期前葉	梢円形	2.10	0.90	0.44	焼土・炭化物
S F03	C - 1	弥生後期前葉	不整形	2.10	1.45	0.45	焼土・炭化物
S F04	B・C - 8	弥生後期前葉	梢円形	1.53	1.10	0.45	
S F05	B・C - 8	弥生後期前葉	不整形	1.55	1.20	0.27	
S F06	B - 7	弥生後期前葉	扁丸長方形	1.95	0.80	0.30	台付小型壺

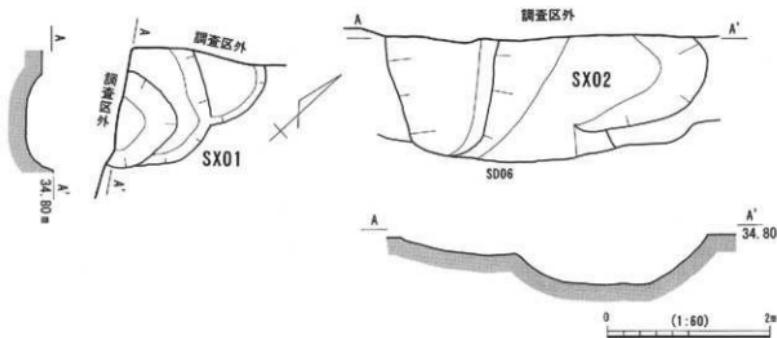
## 6. 不明遺構

## S X01 (第20・52図)

2区、B-10グリッド、調査区西端から検出された土坑状の遺構である。一部は調査区外のため詳細は不明だが、平面形は梢円形が3つ重なるようになっている。埋土からは、菊川様式古段階の土器が出士している。

## S X02 (第20・52図)

2区、B-8グリッドから検出された土坑状の遺構である。一部は調査区外のため詳細は不明だが、埋土中からは、弥生時代後期の土器片が出土した。その内、図化、掲載できたものは6個体である。これらはすべて菊川様式古段階に属する。



第20図 S X01・02

## 第2節 弥生時代後期の出土遺物

今回の調査では弥生時代の遺物が多量に出土した。ここでは、比較的まとまった量の土器が出土した遺構に絞って弥生土器の検討を行い、また、数は少ないが特徴的である弥生時代の石器についても述べておく。なお、古墳時代と中・近世の遺物については第1、3節のそれぞれの遺構とともに記載しているので参照して頂きたい。

### 1. 後期弥生土器の様相

弥生土器はほとんどの遺構から出土しているが、ここでは特にまとまった量が出土している環濠、溝状遺構、土坑出土土器253点を対象にしてその様相を述べる。遺構の編年的位置付けについては第1節で述べているので詳しく触れないが、中嶋郁夫氏の論考（中嶋 1988、1991、1993）の編年と照合すると出土土器は菊川様式古・中段階に比定されるものが多い。特に菊川様式古段階の土器群については一括性が高く、残存状況も良いため出土事例が少ない当概期の基準資料となりえる。そこで出土土器を器種別、口縁部形態別に分類し、土器の形状や文様構成、法量、胎土などを検討して、それぞれの特徴について述べることにする。

#### (1) 土器の形態分類とその特徴

まず弥生土器を大・中型壺、小型壺、甕、高杯、台付鉢、鉢に分類し、さらに最も特徴が表れている口縁部の形態によって細分した。分類基準は以下の通りである（第21図）。

##### 大・中型壺

様々な大きさの壺が認められるが、大きく2つのグループに分けることができる。出土土器を観察すると器高と口縁部径はあまり関係しないが、器高と底部径には相関関係があると考えられる。そこで器高15cm、底部径5cmを大・中型と小型の分類基準とした。さらに大・中型壺は口縁部形態によって4つに細分できる。

壺A：単純口縁を有する壺

- 1類：直線的な頸部からやや外反して立ち上がる。
- 2類：頸部から緩やかに外反する。
- 3類：頸部から屈曲して直線的に外に開き、逆ハの字状を呈する。
- 4類：内湾しながら外に開く。
- 5類：強く外反し、朝顔状に大きく開く。

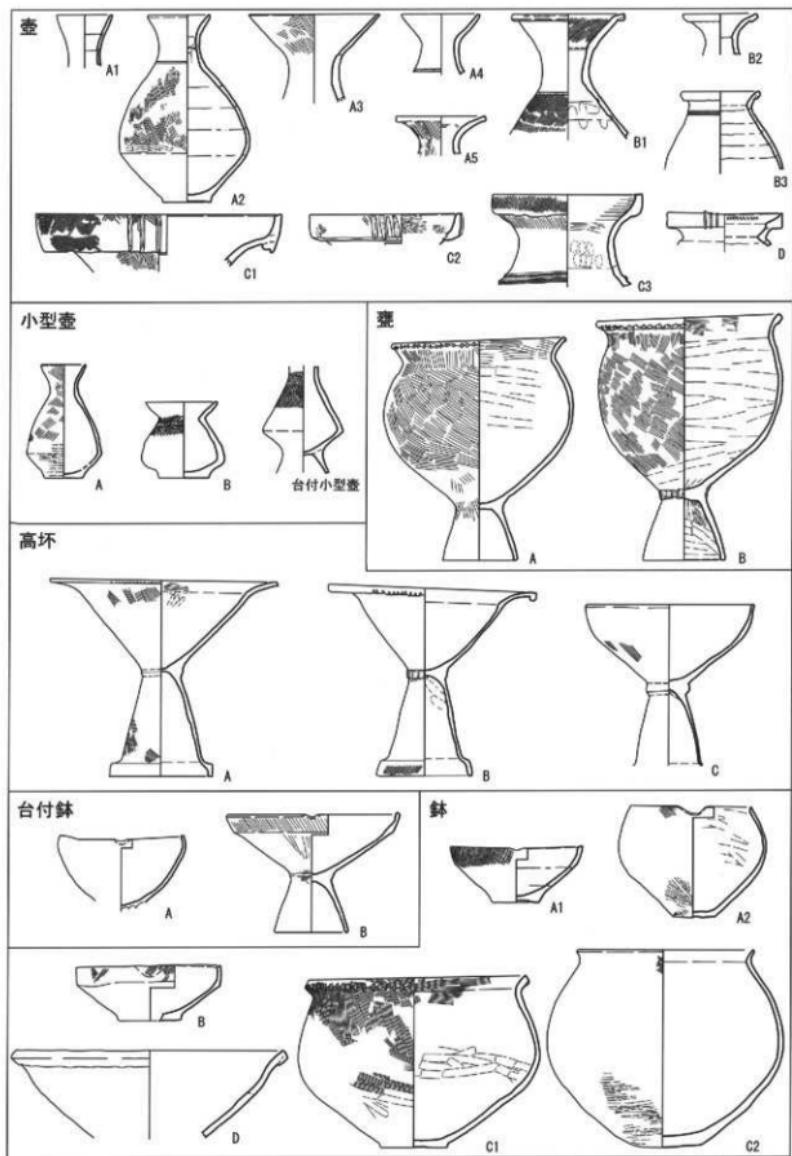
壺B：折返口縁を有する壺。口縁部内面には繩文が施文されることが多い。

- 1類：折返部分が肥厚している。断面は四角形のものが多い。
- 2類：折返部分が薄手である。
- 3類：太頸で口縁部はあまり外反せず短い。肩は張らず、胴部は緩やかな丸みをもつ。

壺C：複合口縁を有する壺

- 1類：折返口縁の内面に粘土紐を直立的に貼って、複合部を作り出している。
- 2類：口縁部を内湾させてその外面に粘土を貼り付け、複合部を作り出している。頸部は細く、口縁部外面には棒状浮文が施文される。
- 3類：口縁部を内湾させてその外面に粘土を貼り付け、複合部を作り出している。頸部は太く、口縁部外面には繩文、棒状浮文、刻みが施される。

壺D：「パレススタイル」壺。口縁部は肥厚し、断面は三角形となる。口縁部内面に稜をもち、その



第21図 後期弥生土器器種分類図

上下は軽く内湾する。頸部は強く屈曲し、明瞭な段を有する。

### 小型壺

壺の中で器高15cm、底部径5cm以下のものを小型壺とした。頸部形態、台部の有無によって3つに細分できる。

小型壺A：細頸の小型壺

小型壺B：太頸の小型壺

台付小型壺

### 甕

全て台付甕と考えられる。ただし、胴部から下が欠損している場合が多いため、台部のみの土器も含めてここでは甕として記述する。

甕A：単純口縁で口唇部が面取りされ、刻みが施される。

甕B：折返口縁を有し、刻みが施される。

### 高坏

据部が段を有する細長い脚部をもつ。坏部が鉗状を呈するものと鉢形のものの2種類があり、さらに鉗状口縁の形態により、細分できる。

高坏A：単純口縁を有する高坏

高坏B：折返口縁を有する高坏

高坏C：坏部が鉢形の高坏

### 台付鉢

台付甕の台部と鉢を組み合わせた形状を呈する。台部が欠損していて高坏Cと区別できないものもここに含めた。

台付鉢A：口縁部が緩やかに内湾しながら立ち上がる鉢部をもつ。

台付鉢B：胴部外面に稜をもち、口縁部が急に立ち上がる形状の鉢部を有する。全て片口口縁である。

### 鉢

口縁部の形状により細分でき、A、B類で片口口縁が存在する。

鉢A：口縁が内湾しながら立ち上がる鉢

1類：立ち上がりは緩やかで最大径が口縁部となる。

2類：口縁部は内湾し形状は甕の胴部下半に類似する。最大径は口縁部やや下になる。

鉢B：胴部外面に稜をもち、口縁部が急に立ち上がる鉢

鉢C：くの字に屈曲する頸部をもち、口縁は外反しながら外に短く開き、胴部は丸みをもつ。口縁部の形態によって2つに細分できる。

1類：口縁部に刻みをもち口唇部は面取りされ、外面はハケ調整が施される。

2類：口縁部に刻みをもたず、口唇部は丸みをもつか、面取りされる。

鉢D：折返口縁の鉢

以上の分類基準を基にして器種・器形分類を行い、それぞれの器種で以下の様な特徴を捉えることができた。

### 大・中型壺

壺は他の器種と比べて変遷が明確に把握できることから、部位ごとになるべく多く図化するようにした。全体の31%を占める。壺全体の傾向としては中型壺が主体であり、確實に大型壺と言えるのは330の1点のみである。胴部最大径は57.5cmであり、胴部上半にはハケ調整が施されている。

## 壺A類

A類は壺の中でも主体的な器形であり、器形分類できる壺の半数を占める（第23図）。ほとんどが中型壺であり、頸部は細く、中には232のような細長いものもみられる。胴部は肩が張らず、最大径が胴部下半になり丸みをもつ無花果形が主体的である。文様は肩部に櫛押圧横線文や胴部に繩文を施したものが多い。

A1類は117・233のみであり、胴部以下の形状は不明であるが、頸部は細長く直線的であると推定できる。白岩様式の要素が残る後期初頭に比定される土器である。

A2類は頸部が細いものが多く、例外的に82・259のように太頸のものが出土している。A類の中では最も一般的な器形であり、約半数を占める（第23図）。肩は張らず、胴部はわずかに丸みをもつ。口唇部は外側に向けて面取りされているものが多く、丸く成形されているものもわずかに認められる。口縁部外面はハケ調整が施され、肩部には櫛押圧横線文や円形浮文、胴部には最大径付近まで繩文やハケ調整が施される場合が多い。胴部最大径部分の少し上からミガキが施される。123は口縁部内面に櫛描直線文が施される伊場様式の特徴をもつ土器である。

A3類も細長頸が多いが胴部まで残存している資料はなく、頸部から下の形態は不明である。口縁部外面にハケ調整が施され、口唇部は外側に向けて面取りされている。

A4類はA3類とそれほど変わらないが、わずかに内湾する口縁部と細い頸部をもつ。口縁部外面に繩文が施される134やミガキが施される277などがある。277は肩が張らず、竹管刺突文が施され、胴部全体にミガキが施される。この土器は形状や全体が磨かれていることなどから白岩様式の要素をもち、中期末～後期初頭に比定されよう。他に口縁部内面に波状文や扇形文が施され、胴部には櫛刺突羽状文が施される特徴的な241がある。この土器は文様、器形などから菊川様式中段階に位置づけられる。

A5類は33のように内外面をハケ調整しているものと138のように口唇部を外側に向けて棒状浮文を貼付するものの2つに細分できる。

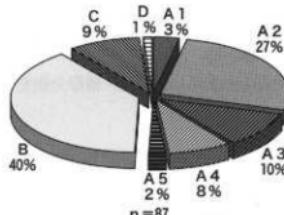
## 壺B類

B類もA類と同様に出土量が多く、器形分類できる壺の4割を占める。中型土器が多く、215のような小型土器は少ない。

B1類はB類の中で主体的であり、8割を占める。ほとんどの土器の口縁部が朝顔状に大きく開き、内面には繩文、円形浮文などを施すものが多い。折返部外面には棒状浮文や繩文の押圧、ハケ調整などが施され、下端に刻みを施すものも多く認められる。摩滅しているものが多いため、はっきりと識別できるものは少ないが、折返部の断面は四角形のものが多い。頸部は細頸または細長頸が多く、縦位のハケ調整、ミガキが施される。口縁部から底部まで残存している土器は少ないので、頸部以下の形態については残存している資料から述べておく。86は比較的太頸で頸部から胴部にかけては段をもたず、胴部



第22図 弥生土器器種組成比率



第23図 壺形土器器形構成比率

は緩やかな丸みをもつ。胸部最大径まで羽状縄文が施文されている。10・146・275は細長い頸部で肩は張らず、胸部には縄文が施文される。261は細く短い頸部をもち、肩が張らず胸部下半で屈曲する下膨れの形状を呈する。B1類はほとんどの土器が菊川様式古段階に属するが、12・240・242は太頸であることや、文様などから中～新段階に比定される。

B2類はB1類に比べて折返部が薄くわずかに粘土を貼付している壺で34・152などが相当する。折返しというよりは粘土の余った部分を外側に伸ばしているだけなのかもしれない。器形は細頸で朝顔状に開くA5類に類似している。B3類は148・149・155のみであり、菊川様式にはあまりみられない器形である。太頸で胸部は丸みをもち、155の頸部には櫛押圧横線文が施文されている。

#### 壺C類

C類は壺の中では数が少なく、図化できたのは8点のみである。C1とC2・3類は頸部の太さの他は外見上大差ないが、製作技法として粘土貼り付けによって屈曲、垂下部分を作り出しているC1類と屈曲させた口縁部外面に粘土を貼り付けて垂下させ、複合部を作出しているC2・3類とで明確な違いが認められる。

156・157はC1類で折返口縁の内面に直立的に粘土紐を貼って、複合部を作り出している。口縁部外面の羽状縄文は確認できるだけでも施文方向が3回変化している。棒状浮文は狭い間隔で6本と広い間隔で3本のものが施文されているが、胎土が類似しているため156・157は同一個体の可能性もある。

C2類には頸部が細く口縁部外面に棒状浮文が施文される158・274が相当する。87・159・160はC3類であり、太頸でハケ調整が施され口縁部は短く直立的に立ち上がっている。159は3本5単位の棒状浮文が貼付され、頸部と胸部のつなぎ目に3箇所、補修のためと考えられる穿孔が施されている。87は肩部に突帯を貼り付け、刻みを施している。

#### 壺D類

D類は45の1点のみで伊勢湾沿岸に広く分布するパレス壺である。折返部は肥厚していくその断面は三角形であり、外面には棒状浮文が貼付されている。頸部で強く屈曲し、肩部に明瞭な段をもつ。口唇部はわずかな部分ではあるが平らに面取りされ、口縁部内面には棱がありその上下は軽く内湾している。土器表面が剥落しているので判別が難しいが、口縁部内面には櫛刺突羽状文が施文され、口縁部外面には擬凹線文が施文されていた痕跡が確認できる。遠江地方でのパレス壺の出土例は浜松市中平遺跡、浜松市大平遺跡、菊川町三沢西原遺跡などで認められるが数は少ない。この土器は伊勢湾沿岸、三河地域のパレス壺と形態、文様を比較すると欠山様式併行期（弥生後期後半）に属すると考えられる。

#### 小型壺

小型壺は口縁部が残存しているものが少ないと、頸部、胸部の形状と文様から細分しておく。A類には頸部が細長く、外面全体にミガキが施される170、頸部は細く胸部下半で強く屈曲し、縄文、結節縄文が施される18・99・171・217などがあり、前者は白岩様式の影響が残っていると考えられる。B類である245は太頸で胸部上半に櫛刺突羽状文が施され、菊川様式中段階に比定される資料である。285は台付小型壺であり、この器種は遠江では他に出土事例がないが、胸部に櫛刺突羽状文が施されていることや胸部の形態などから、菊川様式に含まれる。頸部は細く胸部下半で強く屈曲し、直線的な台部へとつながっている。この土器は壺の部分の形態や文様から菊川様式古段階に属すると考えておきたい。

#### 甕

本土器群で最も算定個体数が多かったのが甕であり、全体の42%を占める。ほとんどが台付甕と考えられ、確実に平底甕に分類できる資料は出土していない。台付甕の口唇部は面取りされ、刻み目が施されるものが多い。口縁部外面には縦方向、胸部、台部には斜め方向の幅が狭いハケ調整、口縁部内面には横方向のハケ調整が施される。胸部内面は丁寧なヘラナデが施され、底部付近にハケ調整が残るもの

も認められる。個体数を算定した接合部をみても、ほとんどが二次焼成を受けており、胴部内外面に煤が付着しているものも多い。

口縁部形態では圧倒的にA類が多く、B類は2点(221・236)出土しているにすぎない。A類は調整などではそれほど差はないが、口縁部から胴部の形態、法量で幾つかの違いが指摘できる。形態については、ほとんどの土器は口縁部から緩やかに屈曲しながら、胴部上半に最大径部分をもつ球胴形であるが、172のように胴部下半に明確な稜をもつものも存在する。また、236のように頸部が直線的なものや、174・175・177のように胴部が継長な堀も認められる。胴部形態の違いは古段階の中での時期差を反映しており、胴部が張らない継長の堀は白岩様式の要素を残していると考えられる。台部は直線的にハの字状に開くものが多い。法量については口径と胴部高の大きさによって4つに細分できる(第24図)。これによると口径及び胴部高が15cm以上の大・中型品が主体であり、15cm未満の小型品は数が少ない。小型の堀については胎土が大・中型の張と異なっており、二次焼成を受けていない。製作工程や用途に違いがあるのかもしれない。その他の特徴として接合部に粘土帶を貼り付けている堀が192点中3点認められる。また、102は堀の接合部の4箇所に棒状の粘土を貼り付けている。

#### 高環

全体の20%を占める。環部の形状によって鉢状口縁高环と鉢形高环に分類できる。鉢状口縁の中では、A類が多く、B類は5点のみである。脚部は細長く裾部に高さのある段をもつもの(197)、開く角度が大きく短いもの(225)の2つに分けることができる。237のように環部の立ち上がりが急で、口縁部の外反が大きいと考えられる高環もみられる。接合部には197・198のように三角突帯をもつものや、195・200のように櫛押压横線文を多条に施すもの、292のように櫛刺突羽状文を施すものが認められる。

A類は接合部から口縁部にかけて緩やかに外反し、外面にハケやミガキ、内面にミガキが施される。脚部は直線的ではなく、わずかに外にふくらむものが多く、裾部に高い段をもち繩文、ハケ調整が施される。高环では環部と脚部の高さの比率が重要な特徴となるが、完形品をみても環部の方がわずかに大きい。ほぼ同じものが多い。

B類では107・194・225などがあり、107は器形としてはA類とさほど変わらないが、接合部に粘土帶を貼付し、押圧している。225も器形はA類と類似しているが、裾部は段をわずかに残しハの字に開いている点で古段階の中でも新しい要素をもっている。

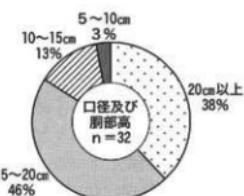
C類は226・227の2点のみで、鉢A1類と高环脚部を組み合わせた形状である。接合部には突帯が貼付されている。袋井市鶴松遺跡、菊川町耳川遺跡に類似した資料がみられる。

#### 台付鉢

台付鉢は破損していると鉢や台付堀との区別が難しいが鉢部の形状や台部の調整によってある程度の判別は可能である。ここでは確実に台付鉢に分類できる土器のみ抽出した。A類は110・257・270のみであり、口縁部は内湾しながら立ち上がり、片口部を有する。鉢部を上からみると楕円形であり、片口部は長軸の先端に作り出されている。B類は口縁部に繩文やハケ調整が施され、胴部の稜から下にはミガキが施される。台付堀の台部と異なり、台部の調整はハケではなくミガキである。焼成が良い土器が多く、台付堀の台部と比べても硬質である。台付堀との違いについては台部にヘラミガキを施していることなどがあげられており(柴田他 1997)、当遺跡の土器も同一の特徴を示している。

#### 鉢

鉢は全体の5%程度の出土量であり、客体的な器種である。鉢には様々な形態があり、中には壺や壺



第24図 壺形土器法量比率

に類似した形態をもつものも認められるが、鉢の特徴として器高より器径の方が大きいことがあげられる。これを鉢の分類基準とすると口縁部の形態などから4つに細分できる。

A類は壺の胴部下半と形状が類似しており、文様や調整の方法もほぼ同一である。口縁部付近には縄文やハケ調整が施され、それより下にはミガキが施される。また、わずかではあるが片口縁も認められる。A2類は特に壺と形状、調整等が類似しており、II4は外面の縄文が途中で切れていることから、壺として製作したものを作らかの理由で壺上部を切り取り鉢として再利用したものと考えられる。206・231は外面にハケ調整が施され、内面には丁寧なナデやミガキが施されている。この点が壺との大きな違いである。206はさらに底部裏面にも丁寧なミガキが施されている。

B類は胴部に明確な稜をもつ以外はA1類と類似している。

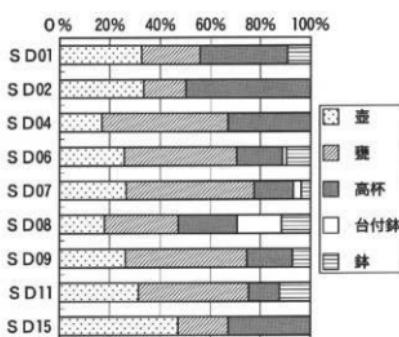
C類は口縁部の刻みの有無によって2つに細分できるが、C1類は212の大型鉢のみである。面取りした口唇部に刻みを施し、頸部から胴部上半にかけてハケ調整を施す点は壺と共通しているが、胴部下半にミガキが施されることや、器高よりも器径の方が大きい点など鉢としての特徴をもっている。二次焼成を受けていない点も壺との大きな違いである。C2類は213のように比較的長い口縁部に櫛刺突羽状文が施文されるものと、214のように短い口縁部にハケ調整が施される大型の鉢が存在する。

以上の特徴の把握とともに弥生土器の器種比率を検討するため、全遺構から出土した土器の個体数の算定を行った。従来の算定方法に従って、壺は底部1/2以上、甕、高环は接合部1/2以上残存しているものを一つと数え、小型壺は壺に含め、台付鉢は確実に判別できるもの、鉢は完形品のみ算定した。第22図が全出土土器の器種比率である。甕が約4割と最も多く、次いで壺、高环の順になる。菊川式土器の器種比率は從来から述べられているように新段階の土器で壺：甕：高环=55：30：15となる場合が多く（中嶋 1991）、甕が最も多い遺跡は他に見当たらない。同じ菊川様式古段階の掛川市女高I遺跡、磐田市二之宮貝塚とも異なる比率を示している。このような他遺跡との違いについては、集落の極一部分を調査したため断定はできないが、場所によって集落で廃棄された土器に偏りがでたためと考えておきたい。ただし、新段階の土器に比べて、古段階の土器は出土事例が少なく、器種比率もあまり報告されていない。よって菊川様式古段階と新段階で器種比率に若干の違いがある可能性も捨てきれない。

器種比率を遺構ごとに比較したのが第25図である。個体数の多いSD06・07が当遺跡全体の器種比率に近いが、SD01・08はこれとは異なる傾向を示している。SD01は壺と高环の比率が高く、SD08はそれぞれの器種がほぼ同じ比率となっている。SD08については前節で述べたように土器が一括廃棄されており、この組成比が当時の生活様式における土器の器種比率に近いのではないだろうか。

表7 弥生土器遺構別個体数一覧表

遺構名	壺	甕	高环	台付鉢	鉢	計
SD01	14	10	15		4	43
SD02	2	1	3			6
SD03	2					2
SD04	1	3	2			6
SD05	3	3				6
SD06	18	32	13	1	7	71
SD07	52	101	31	6	8	198
SD08	3	5	4	3	2	17
SD09	7	13	5		2	27
SD11	5	7	2		2	16
SD15	7	3	5			15
その他(SB)	4	1	2			7
その他(SD)	6	1	1			8
その他(SF/SX)	15	12	6			33
合計	139	192	89	10	25	455



第25図 遺構別器種組成比率

## (2) 土器の胎土分類と組成

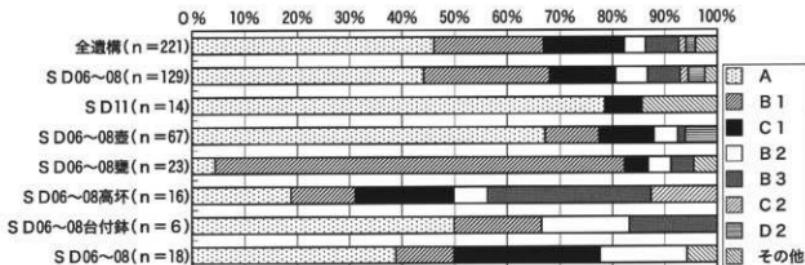
今回の調査で出土した土器を観察すると、土器表面が摩滅、剥落しているものが多い。それにより、文様や調整については得られる情報が少ないが、土器の胎土や含有物、色調については情報を引き出しがやすい。そこで、一人の観察者による肉眼観察ではあるが、図化した全ての土器の胎土、含有物、色調を観察し、形態や文様とは別の視点での分類を試みた。分類基準は以下の通りである。

- A 径1～5mmの砂礫（砂岩片）を多く含み、白色小礫、長石、白色粒子が含まれるきめの粗い胎土。褐色粒子が含まれることもある。焼成は不良で土器表面が剥落しているものが多い。色調は灰白色、灰色、橙色が多い。
  - B 径2～5mmの円形や梢円形の小礫を多く含むきめの粗い胎土。小礫の形状や色調などでさらに4つに分類できる。
    - 1類 円形や梢円形の灰黄色・白色・褐色小礫を含む。他に白色粒子を含むこともある。色調は黄褐色や灰白色が多い。焼成は良くない。
    - 2類 円形の黒褐色・青灰色・灰色小礫を含む。長石を含む。色調は橙色か灰白色である。1類に比べて焼成は良い。
    - 3類 灰色・灰白色・茶色小礫や赤褐色小礫を多く含む。白色粒子を含む。色調は浅黄橙色、灰白色が多い。
    - 4類 灰色・暗褐色小礫や白色粒子を多く含む。色調は灰白色が多い。
  - C 径1～2mmの粗砂を多く含むきめの細かい胎土。含有物、色調などから4つに分類できる。
    - 1類 粗砂、白色粒子を多く含む。色調は暗褐色が多い。焼成は比較的良い。
    - 2類 粗砂、小礫を含む。色調は灰色が多い。焼成は良い。
    - 3類 黒褐色の粗砂を多く含む。焼成は良い。
    - 4類 粗砂、褐色粒子を多く含む。色調は浅黄橙色。焼成は良くない。
  - D その他の胎土
    - 1類 色調は灰色か褐灰色で白色小礫を含む。焼成は良い。
    - 2類 細砂が主体で褐色小礫、雲母を含むことがある。色調は灰白色か黄褐色である。焼成はあまり良くない。
      - 3類 白色粒子を多く含む。色調は灰色で焼成は良い。
      - 4類 小礫をわずかに含むだけで粘土主体のきめの細かい胎土。色調は灰白色。焼成は良い。

ここに分類した胎土は比較的容易に観察できるものであり、全ての土器がここに当てはまる訳ではなく、分類できたのは図化した弥生土器262点中221点である。第26図で分かるように、石畑I遺跡で主体となる胎土はA・B1・C1類であり、胎土分類できた土器の82%に相当する。従来から指摘されている様に（中嶋 1985）、太田川・原野谷川流域では土器の胎土に砂岩や頁岩が含まれており、最も数が多いA類は砂岩片を多く含むものとして、本土器群の主要な胎土であると考えられる。

A類の土器は表面が剥落しているものが多く、焼成は良くない。色調は灰白色・黄褐色系が多く、まれに灰色の硬質な土器も見られる。土器としては脆いものが多く、表面はほとんど剥落している。時期や造構の違いによる胎土の差はないが、器種別では明確な傾向が窺える。第26図によるとA類は壺と鉢でよく使用されている。特に壺は6割がA類であり、ほとんどA類がみられない壺との差は明瞭である。

B類は頁岩などの小礫を多く含む胎土であり、A類に次いで多い。B1類は白色・灰黄色小礫を多く含む胎土であり、在地の胎土であろう。B2類は円形の小礫を多量に含む胎土で非常に特徴的であるため、区別しやすい。B3類は特徴的な赤褐色小礫を多く含む胎土である。この赤褐色小礫は「クサレ礫」（中嶋 1993）と呼ばれる小礫であり、これを含む土器は天竜川流域の遺跡に多く認められる。この胎



第26図 胎土の違いによる組成比率

土は焼成も比較的良好く、土器の残りも良い。数が多くないため器種ごとの傾向は明確ではないが、高坏に比較的多く認められる。B類は特に壺に多く、9割近くの壺に使用されている。この点については後で土器の機能とともに検討してみたい。

C類は粗砂を多く含む胎土であり、A・B類と比べて焼成が良い土器が多い。器種別にみると高坏、鉢には比較的多いが、壺、台付鉢にはほとんど見られない。B類同様に器種によって使い分けをしている可能性がある。C 3・4類は単品であり、搬入土器であろう。

D類はこれら以外の胎土であり、後述する搬入土器との関係で明確なもののみ抽出した。特にD 2類は細砂主体で明らかに他の胎土とは異なっており搬入土器と考えられる。

以上のように石畠Ⅰ遺跡では土器に様々な胎土が使われているが、確実に搬入土器と考えられる胎土の個体数は少ない。出土土器の全体の傾向として色調は灰白色・灰色系統が多く、硬質な土器が目立つ。また、器種によって胎土を使い分けている可能性が指摘できる。では、この器種による胎土の使い分けにはどのような意味があるのだろうか。ここで土器の機能と照合しながら、器種と胎土の関係を検討しておこう。

壺は最も多い種類の在地以外の胎土で構成されており、搬入土器が他の器種より多い。これは従来から指摘されているように土器だけではなくその内容物の移動という点で壺が最も適した器種であるためであろう。壺に対し甕は在地の胎土が多く搬入土器の比率は低いと考えられる。そして甕の胎土で小礫を多く含むB類が主体的であることは甕を頑丈に作ろうとする意図が窺える。砂礫を含むA類は胎土としてはもちろん、土器表面が剥落するなど破損率が高いがB類は焼成も比較的良好く、文様や調整が残っている土器が多い。甕は煮沸用土器であり他の器種に比べて最も破損する頻度が高く、それだけ壊れにくくする必要がある。そのため製作時に混和材を入れて、より破損しにくくしていると考えられ、この製作方法は他の遺跡でも報告されている(坪井 1958、辰巳 1982)。高坏はB・C類が主体で焼成の良い土器が多い。これは台付鉢にも言えることであり、高坏、台付鉢は供献用土器としてきめの細かい胎土を使い、丁寧に仕上げていると考えられる。

このように石畠Ⅰ遺跡において器種と胎土には相関関係があり、器種ごとの用途に応じて胎土が使い分けられている可能性が指摘できる。ただし、これは当遺跡の菊川様式古段階の土器に見られる現象であり、これがSD11の菊川様式中段階の土器になると胎土に統一性がみられるようになる。

### (3) 土器の搬入と模倣

ここまで後期弥生土器を形態と胎土によって分類してきたが、ここでその成果を基にして石畠Ⅰ遺跡における土器の搬入と模倣について検討しておきたい。土器の移動や模倣については今までの研究成果

表8 弥生土器の搬入・模倣パターン

類型	文様・調整	器形	胎土	胎土類型	該当土器番号
a	外来	外来	外来	C 4	213
b 1	外来・在地	在地	外来	B 3	107, 109, 197, 223, 225, 229, 236, 261など
b 2	在地	在地	外来	B 2	23, 116, 166, 209, 220, 227, 230など
b 3	外来・在地	在地	外来	D 2	88, 123, 151, 154
b 4	在地	在地	外来	B 4, D 1, D 4	42, 111, 184, 242
c	外来	外来	在地	A, B 1, C 1	45, 252
d	外来・在地	外来・在地	在地	A, B 1, C 1	139, 167, 241, 250, 251
e	在地	在地	在地	A, B 1, C 1	

から幾つかのパターンが提示されている（森岡 1993、中嶋 1993）。ここでは中嶋氏の菊川様式の模倣パターン（中嶋 1993）を基にして、石畳I遺跡における土器の搬入・模倣パターンを抽出してみた（表8）。胎土については肉眼観察のみのため、在地（胎土A・B 1・C 1類）か、それ以外としか区別できない。表8のように搬入・模倣パターンをa～eに類型化でき、aは他の様式圏からの搬入と解釈できる。aに該当するのは213のみで、文様や形態から伊場様式の鉢形土器と考えられる。bも在地の胎土ではないことから集落外より搬入された可能性が高いが、文様・調整、器形の全てもしくは一部に菊川様式の要素が残っていることから、菊川様式圏内の集落からの搬入土器もしくは在地の胎土に他地域の混和材を混入させたものと判断できる。b 1とした土器は褐色小礫が多く含むことから天竜川流域の胎土に類似する。また、107・236は接合部に西遠江特有の粘土帯を巻く技法が使われているが、器形や文様は菊川様式である。よって、これらの土器は西遠江の影響を受けやすい天竜川流域から搬入されたと考えておきたい。ただし、壺が最も搬入される可能性が高いと考えられることに矛盾して、高杯や壺などが多く認められる点には搬入品として検討の余地を残す。b 2は壺や鉢が多く、小礫を多く含む特徴的な胎土で区別しやすい。文様や器形は菊川様式に含まれることから、菊川様式圏内からの搬入土器と考えられる。b 3は壺のみで器形は菊川様式に相当する。ただし、123は口縁部内面に櫛描直線文、151には扇形文が施文されており、どちらも伊場様式の要素を含んでいる。123・151・154には共通して1段の櫛刺突文が施文されており、特徴的な胎土から考えても西遠江に近い菊川様式圏内からの搬入土器と考えられる。cは胎土のみ在地の土器であり、45のようにパレス壺を模倣したものや、252のように伊場様式の装飾鉢を模倣したと考えられる土器が相当する。dは一部に在地以外の要素が含まれる折衷土器である。250・251は坏部の外面に明確な稜をもつ伊場様式の要素を含む高坏であるが、折返口縁である点や脚部に段をもつことなどの菊川様式の要素も認められる。241の波状文と扇形文、267の櫛描直線文、139・167の扇形文、249の粘土帯の貼り付けなどにも西遠江地域の特徴が認められる。この他に152・159のように頸部に繩文を施文したり、薄い折返口縁を有する（壺B 2類）土器が認められる。これらは駿河地域の登呂・飯田様式の模倣土器である可能性が高い。

このように伊場様式の特徴をもつ土器が出土している点は東遠江における他の遺跡の状況と一致しているが、西遠江からの搬入土器といえるのは1点のみであり、他は菊川様式圏内から搬入された土器の可能性が高い。b類の中には伊場様式を模倣している土器を菊川様式圏内から搬入するといった複雑な現象も認められた。搬入・模倣土器は全体のうち5%程度と割合は高くないが、他の地域や集落との交流関係を示す証拠となり得るであろう。時期的にみると石畳I遺跡の搬入・模倣土器は菊川様式古段階では少なく、中段階になってその数は多くなる。ただし、中段階の土器のほとんどがSDIIから出土しており、この遺構の模倣土器の割合が高いことがその原因と考えられる。SDII出土土器は圓化した弥生土器16点中5点に西遠江の影響が窺えた。これは他の遺構と比べても大きな違いであり、遺構の極一部分の調査ではあるが、この遺構の特殊性を示している。

## 2. 弥生時代の石器（第53図）

遺構や包含層から出土した特徴的な石器のみ図化した。ここでは器種ごとにその特徴を述べることにする。

294～296は石鉋の破損品である。3点とも礫の両側縁に連続的に加工が施され、側縁部は直線的に整えられている。表面にはなめらかな自然面が残っており、わずかに縱方向の研磨痕が認められる。石材は共通して粗粒・中粒砂岩であり、加工しやすい石材を使用している。完形品がないため全体の形状は不明だが、側縁部が直線的であることを考えると短円形になる可能性が高い。ただし、296は調整によって肩部を作り出しているように見える。破損しているため断定はできないが橢形の石鉋である可能性がある。

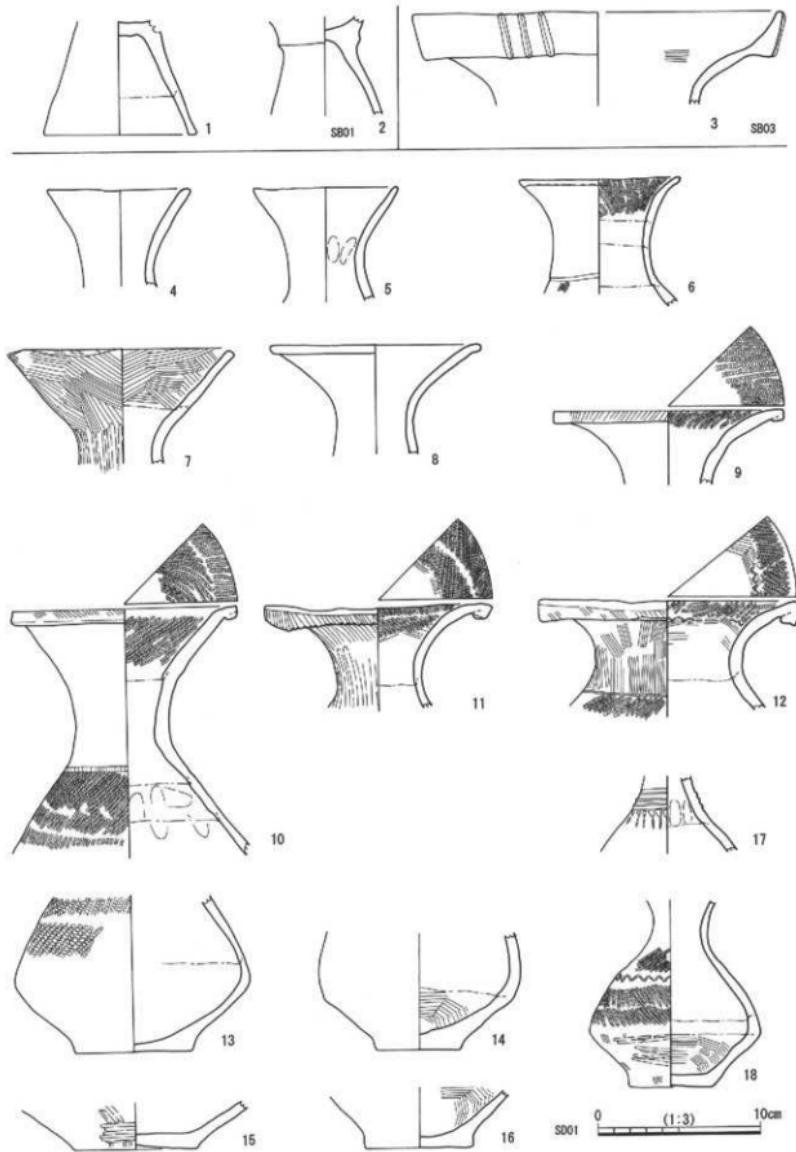
297は珪質凝灰岩製の打製刃器である。大型剥片の一側縁を両面ともに連続的に加工している。刃潰しのための加工であり、刃部は反対側の側縁部と考えられる。肉眼観察のみのため、使用痕や光沢は確認できなかった。

298～301は砥石である。石材は全て砂岩を使用している。298は5面の研磨面が確認でき、研磨痕の方角はそれぞれ異なっている。研磨によって研磨面は大きく湾曲しており、石器などの研磨に使用された可能性が高い。299～301には断面がU字やV字形の線状痕が複数認められる。

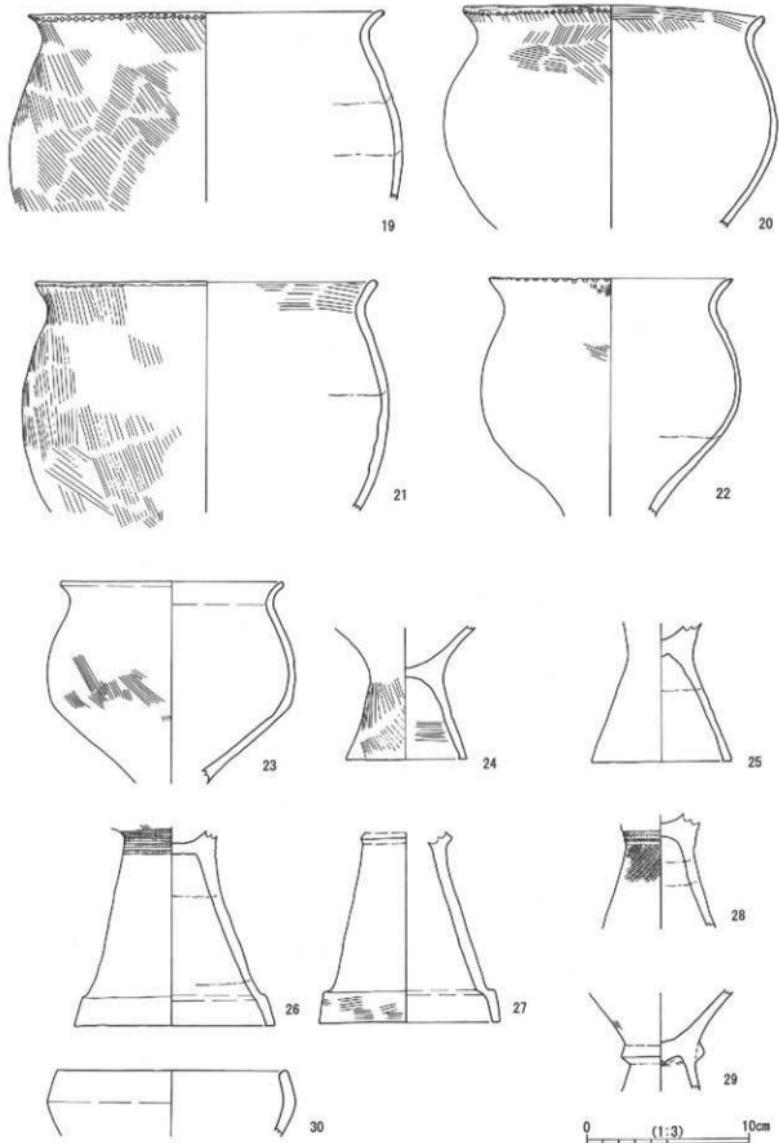
以上の石器は出土した遺構から考えて全て弥生時代後期に属する。弥生時代の石器は後期になると出土数が減り、從来言われているように鉄器に移行していくと考えられている。ただし、石斧、石鉋、石錘、砥石等は機能を変化させつつもその特性上役割をもち、後期まで存続している（平野 1986）。今回出土した石鉋や砥石もこの存続していた器種と考えられ、石鉋はその形態、厚さ、重量などから環濠などを掘削する道具としての用途が考えられる。砥石の用途については磨製石器や鉄製品、玉類の研磨が考えられるが、弥生時代後期になると鉄製品が増加していくことや、砥石の研磨痕の形状から考えると鉄製品の研磨に使用されたものが多いと考えられる。

表9 弥生時代時期別遺構一覧表

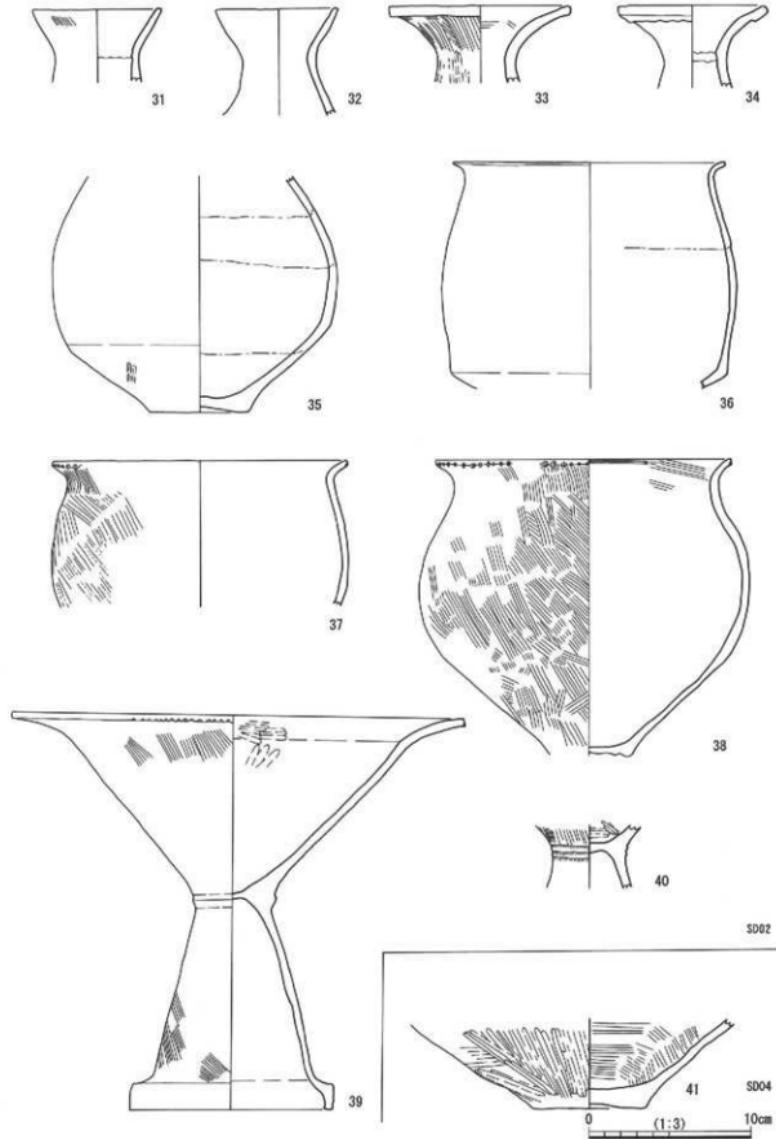
様式 (新段階)	遺構名	併行関係にある遺跡遺構名	石畠 I 遺跡時期名
白岩		広野北4号方形周溝墓	
	S D07の一部 S D09	女高I S D02 鶴松9次004	弥生 I a 期
菊川	古段階	鶴松1次 鶴松2次S D 7 鶴田II 2号住居跡 堀越ジョウヤマ2号住居跡 十二所6区溝3・5、道路分溝6	弥生 I b 期
	中段階	S D11 S F01	堀越ジョウヤマ溝1 土橋SK3・SD45 領家SD1723
			弥生 II 期



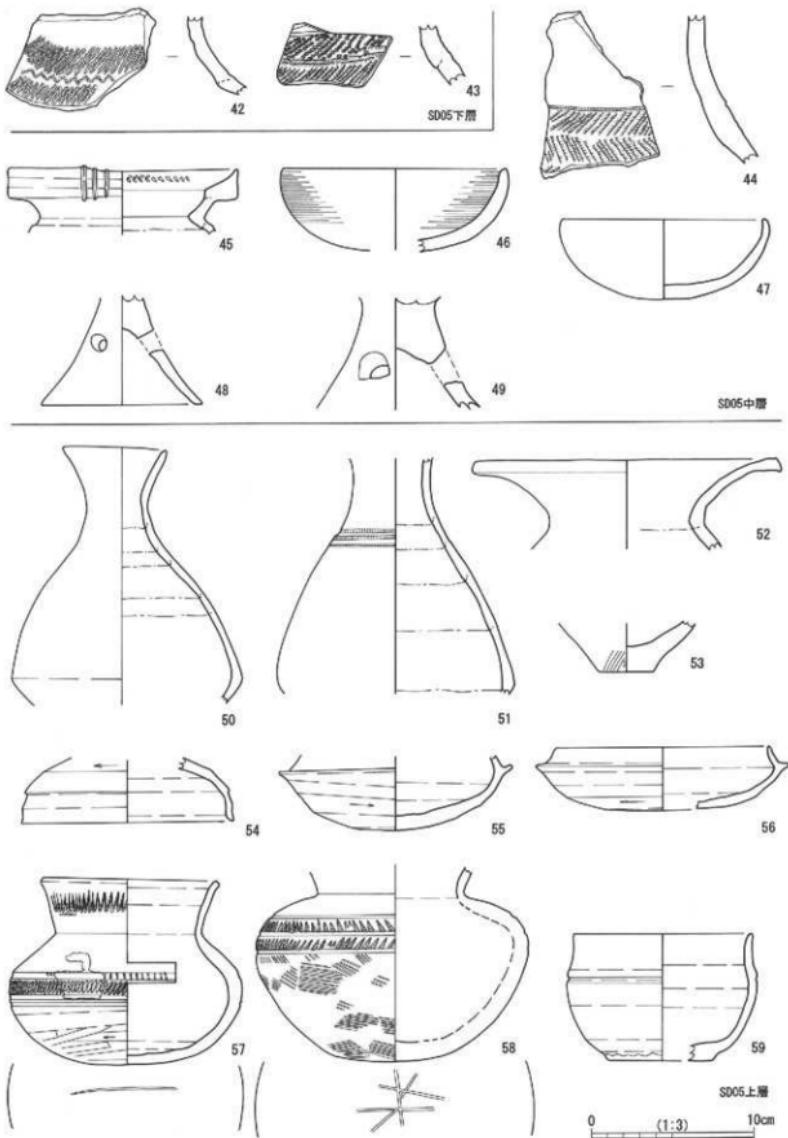
第27図 SB01・03、SD01出土土器



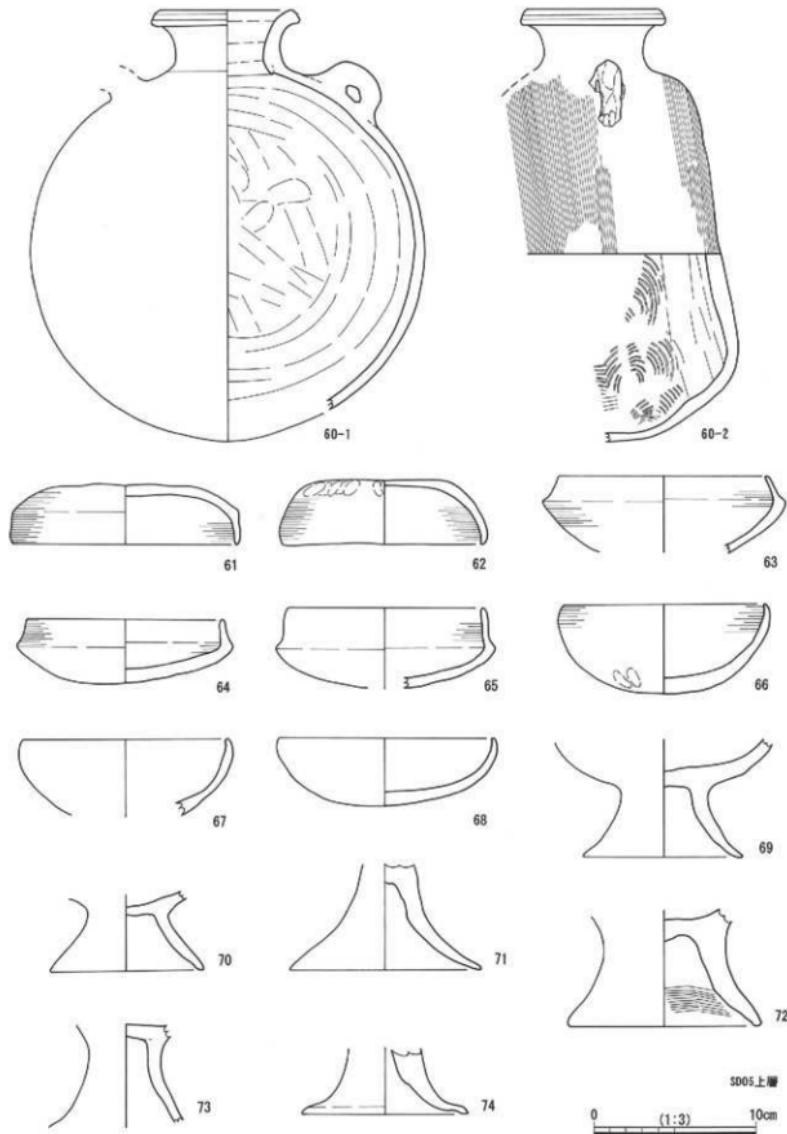
第28図 S D01出土土器



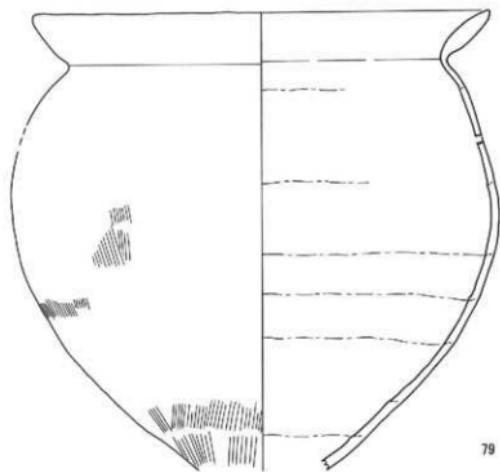
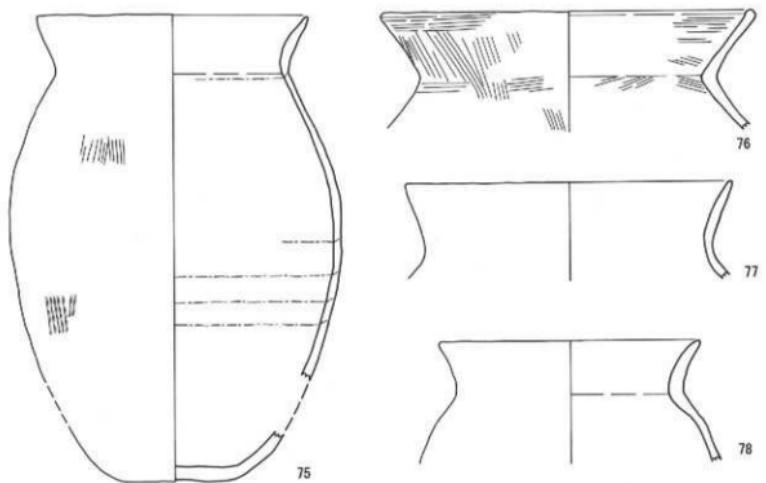
第29図 S D02・04出土土器



第30図 SD05出土土器(1)



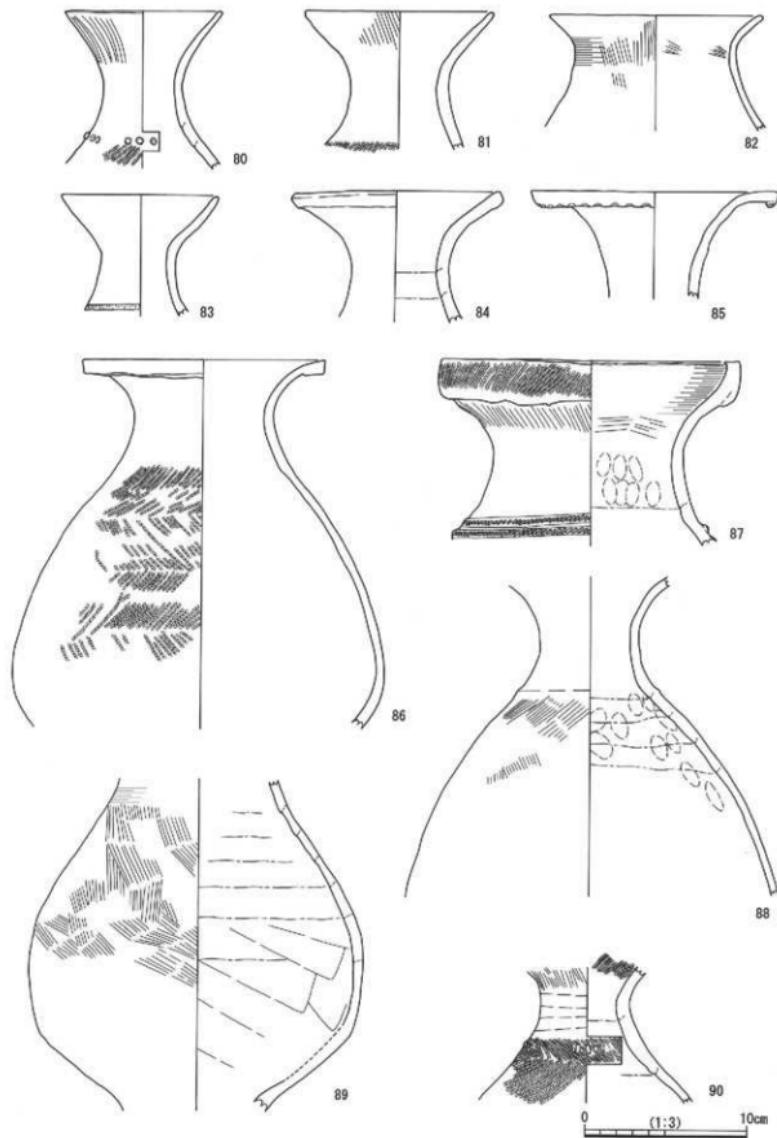
第31図 SD05出土土器(2)



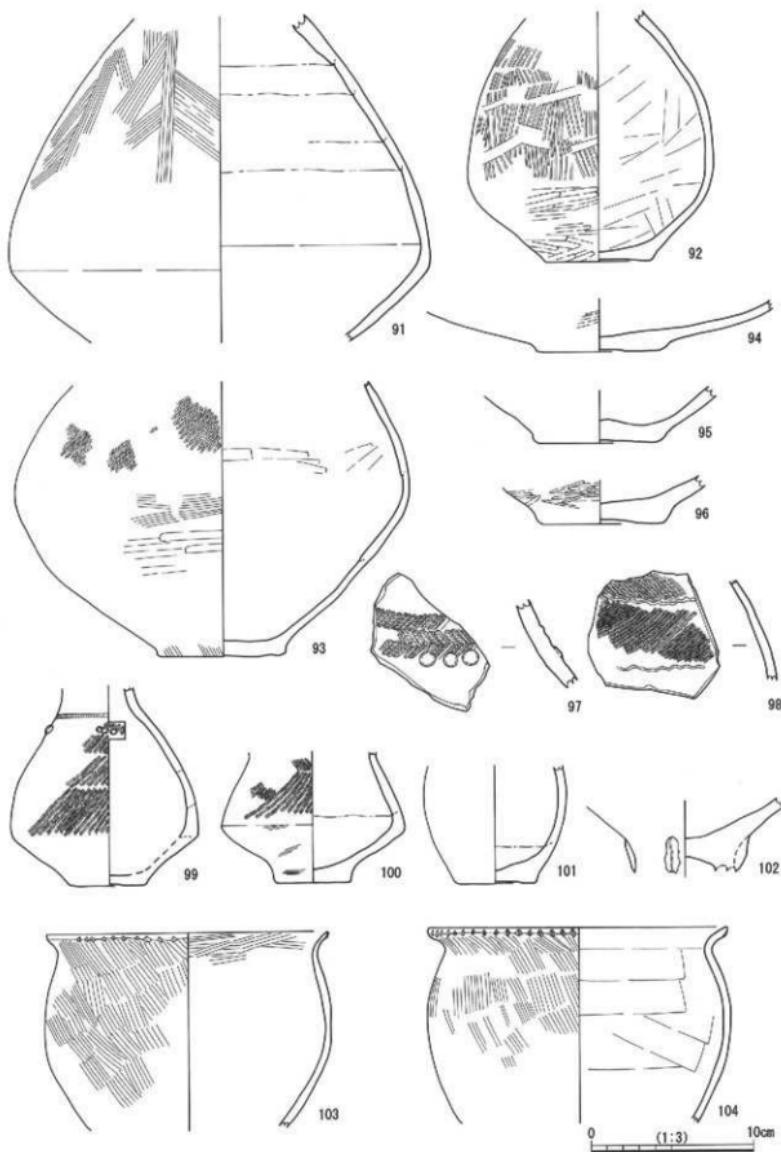
S D05上層

0 (1:3) 10cm

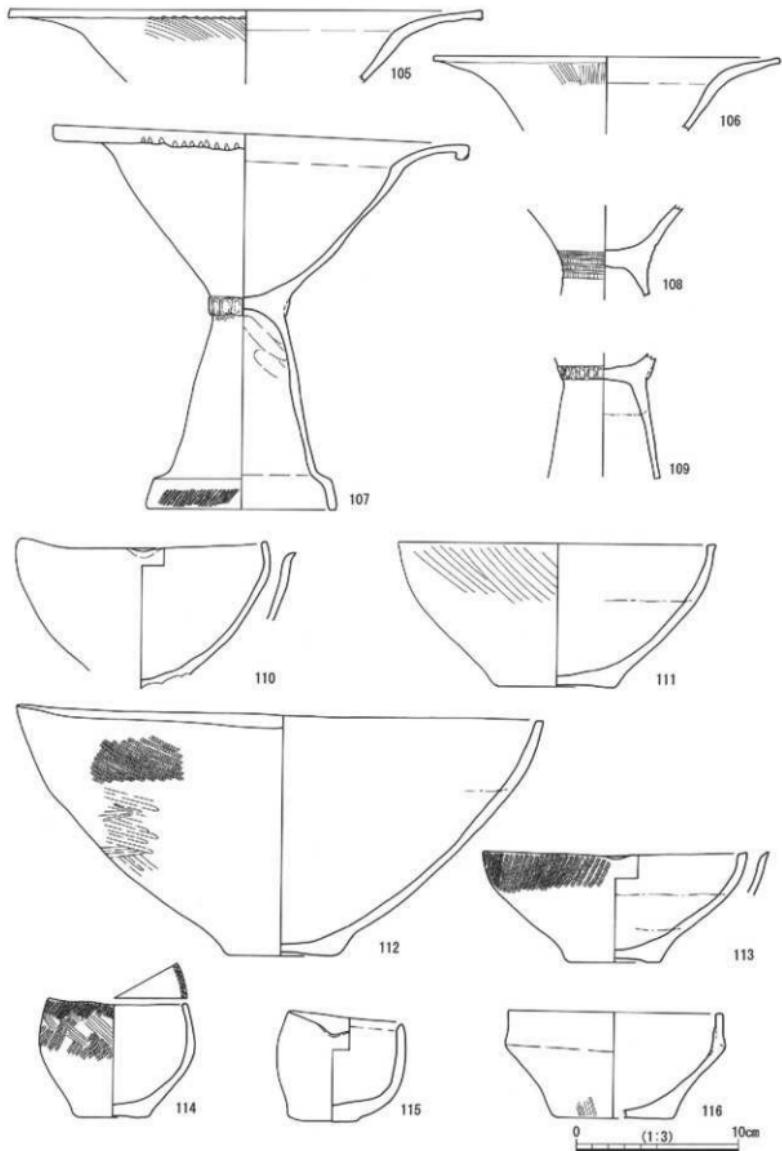
第32図 S D05出土土器(3)



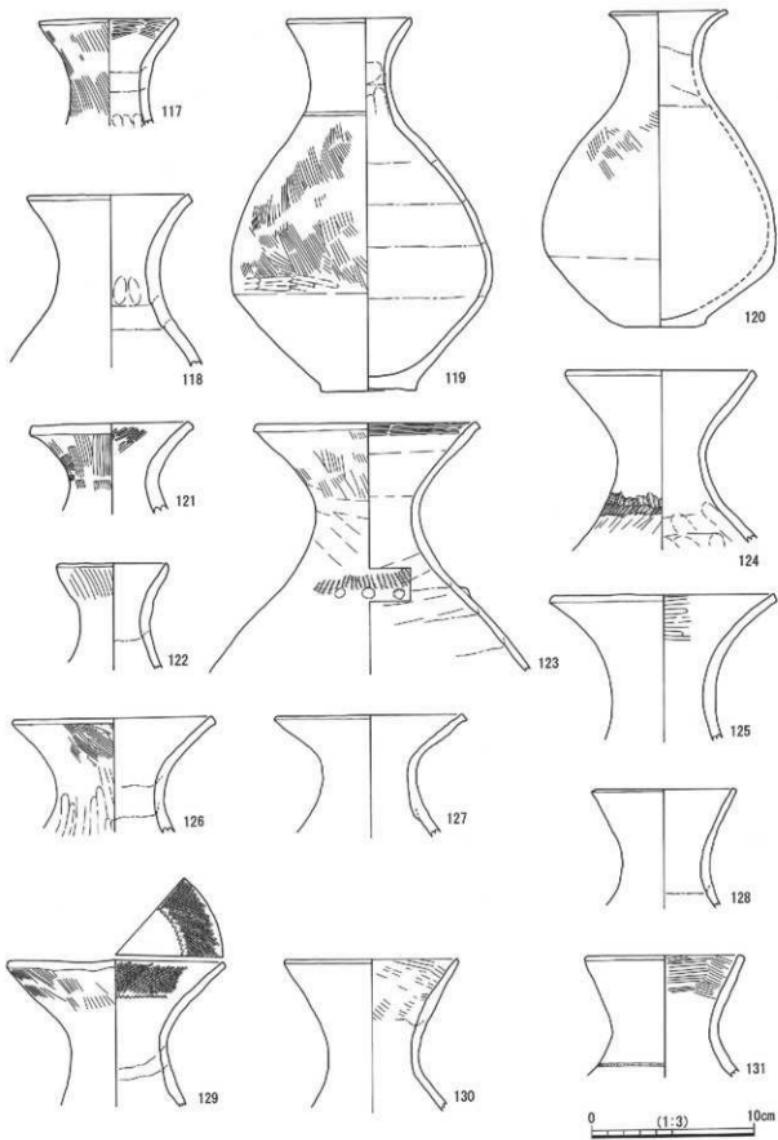
第33図 S D06出土土器(1)



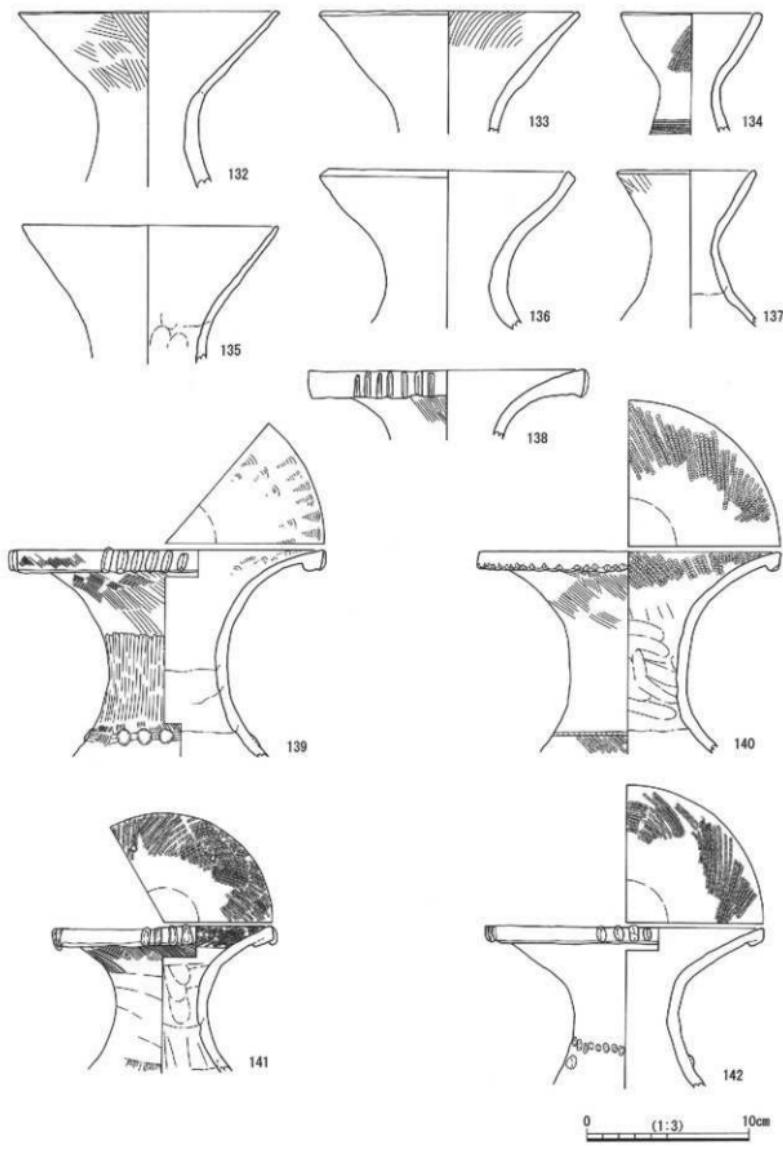
第34図 S D06出土土器(2)



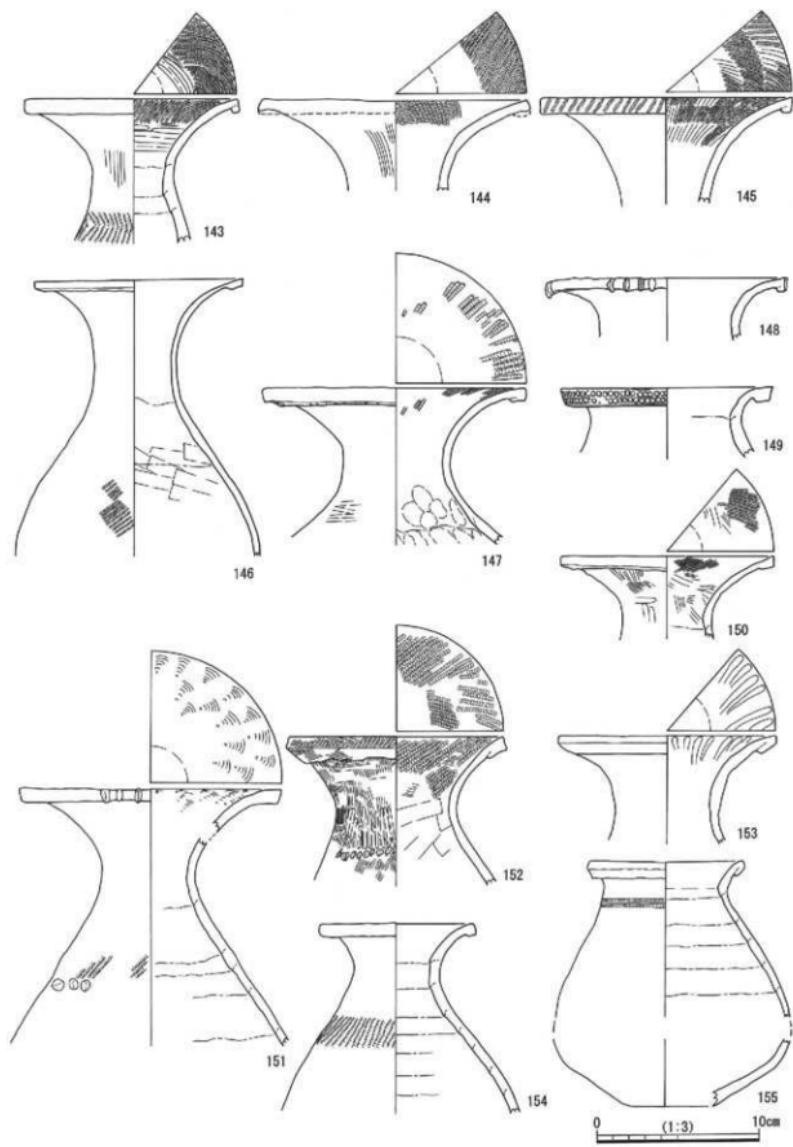
第35図 S D06出土土器(3)



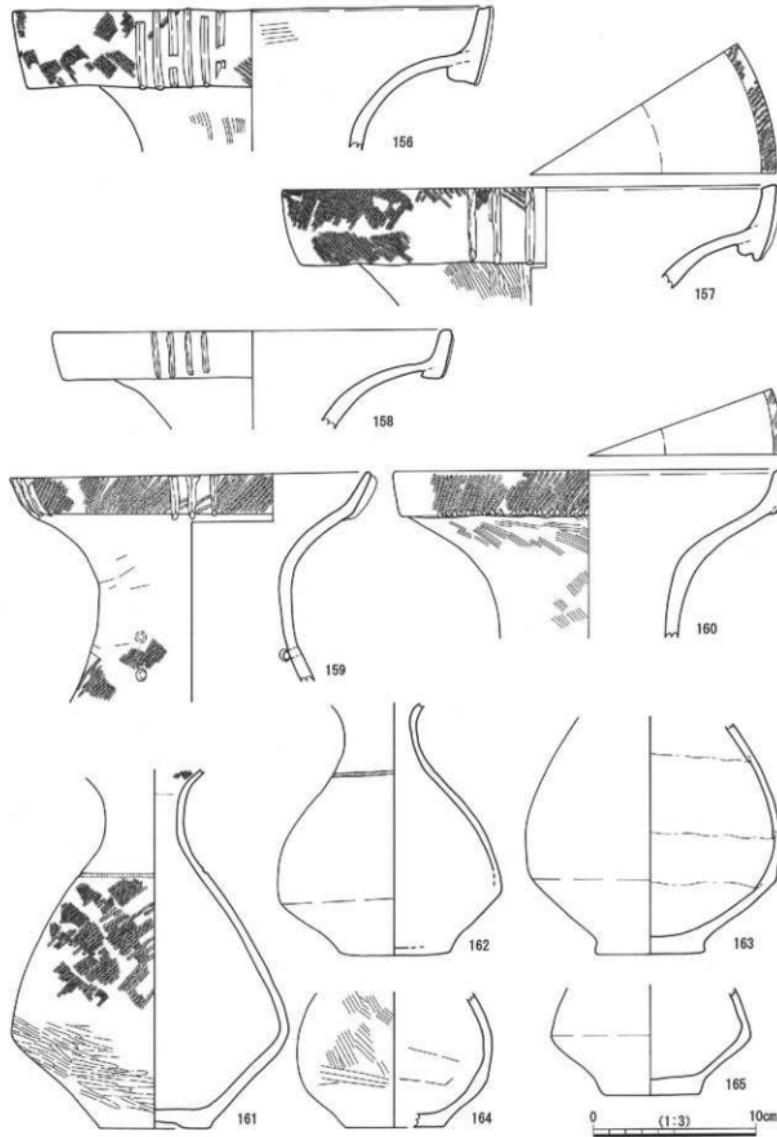
第36図 S D07出土土器(1)



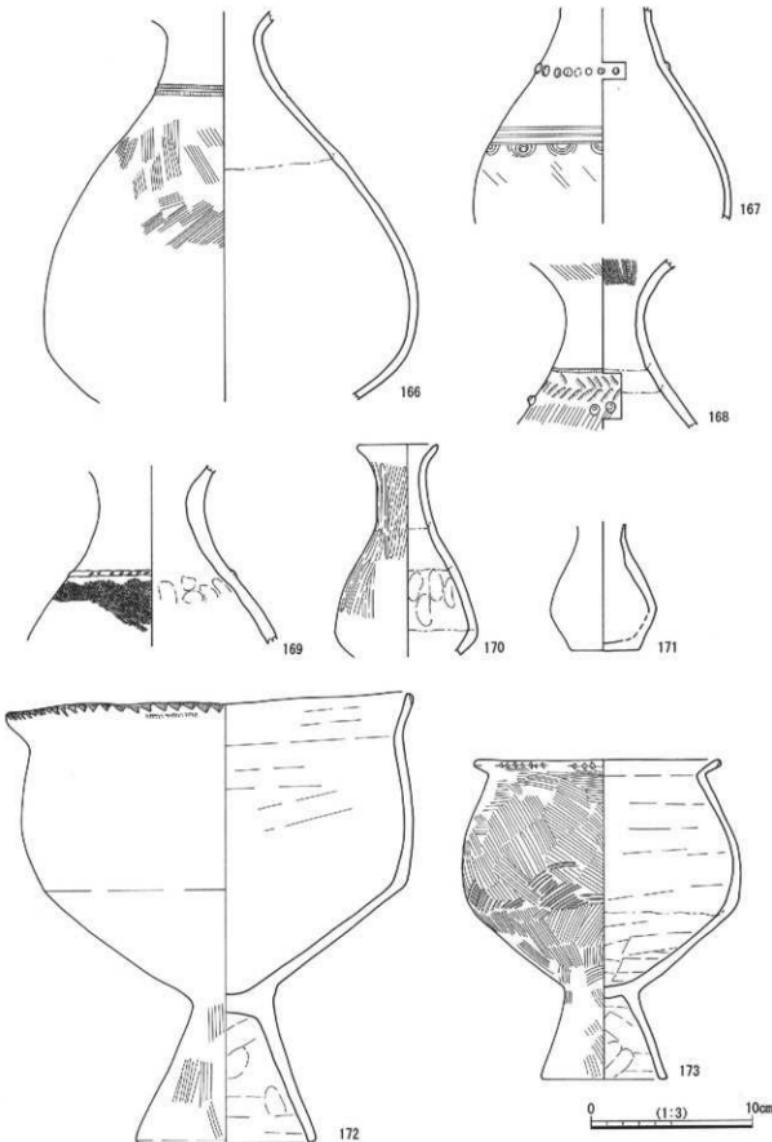
第37図 S D07出土土器(2)



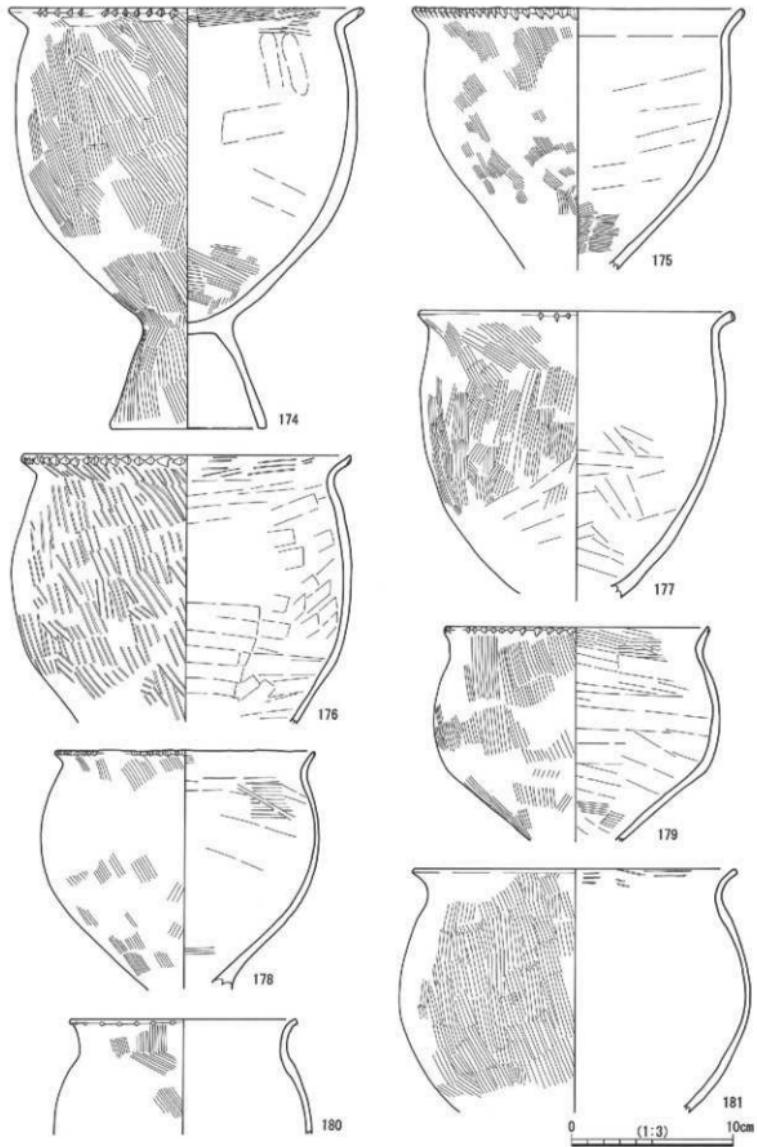
第38図 S D07出土土器(3)



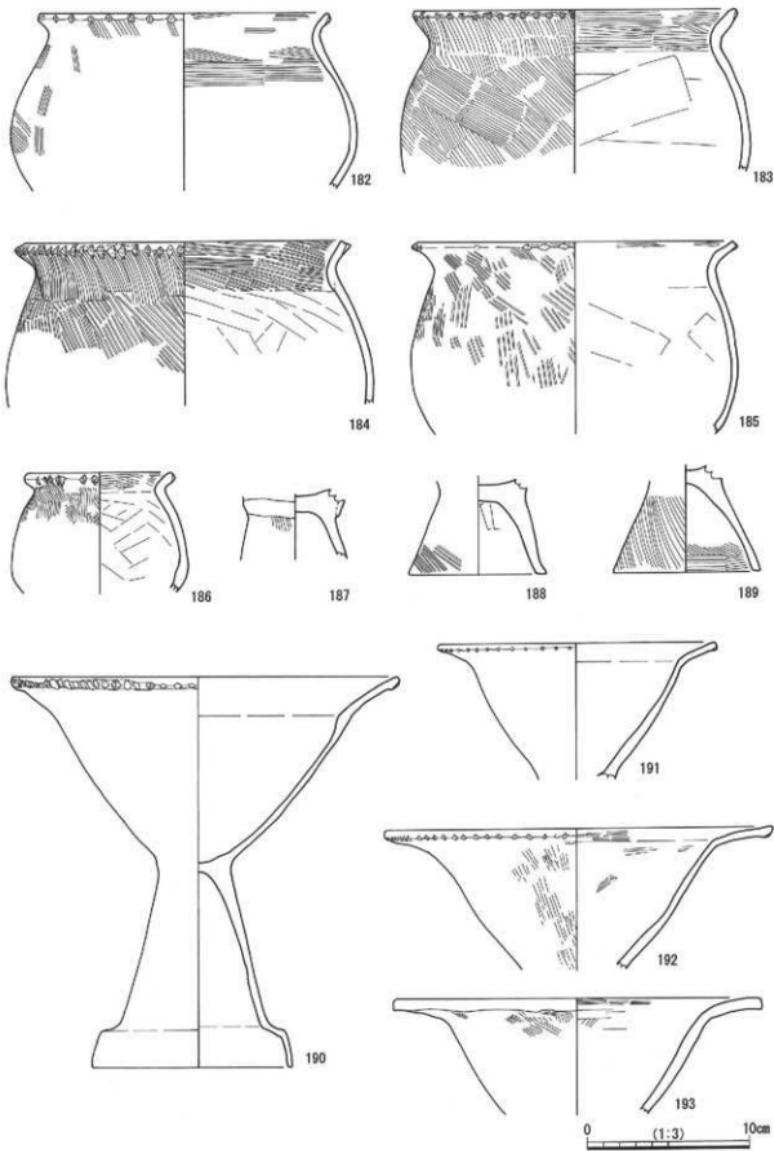
第39図 S D07出土土器(4)



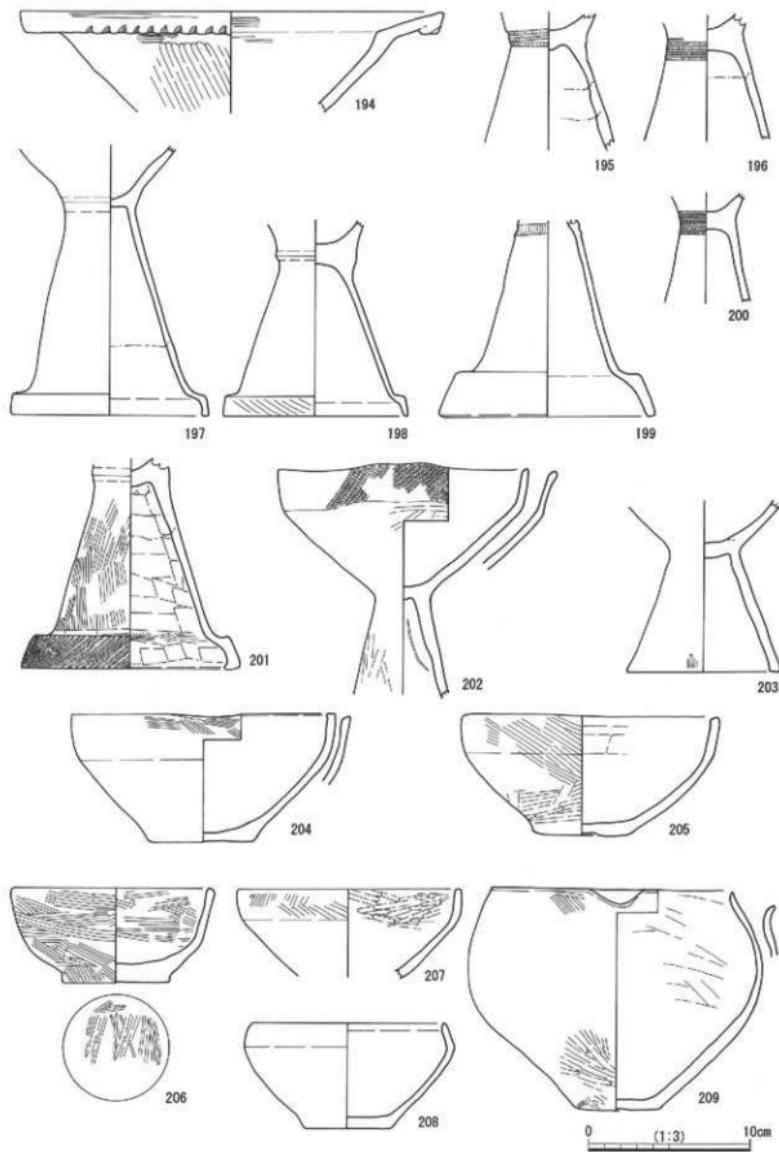
第40図 S D07出土土器(5)



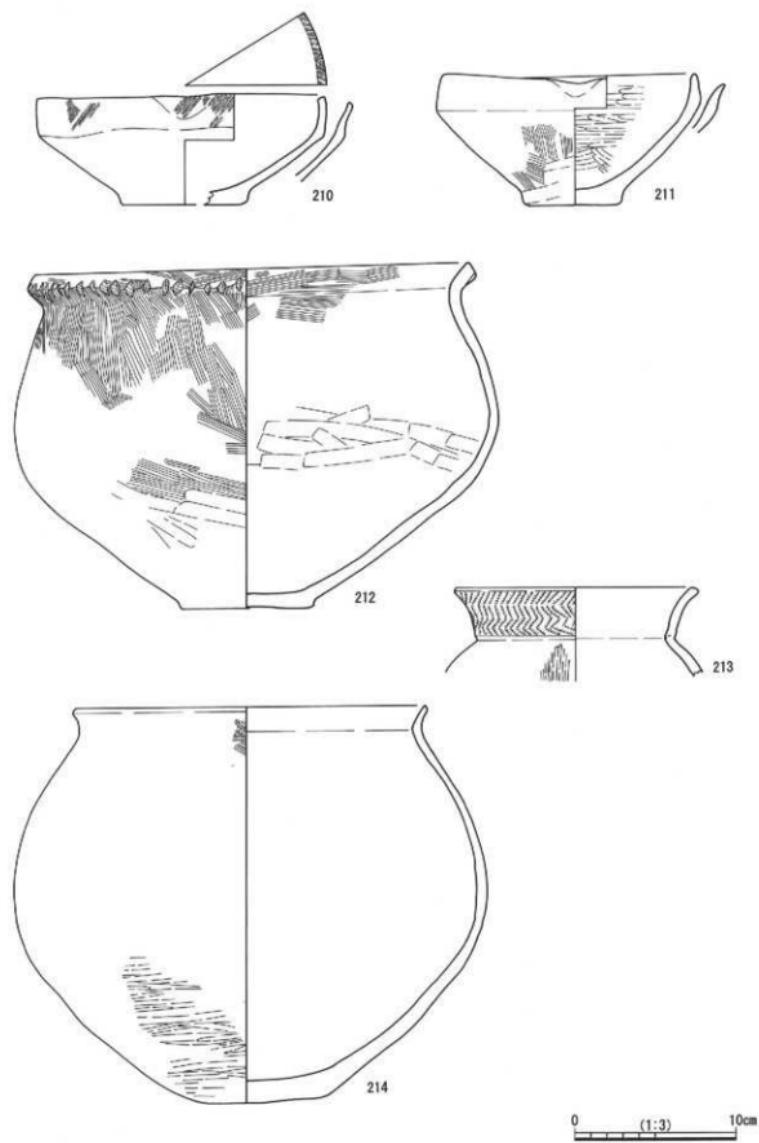
第41図 S D07出土土器(6)



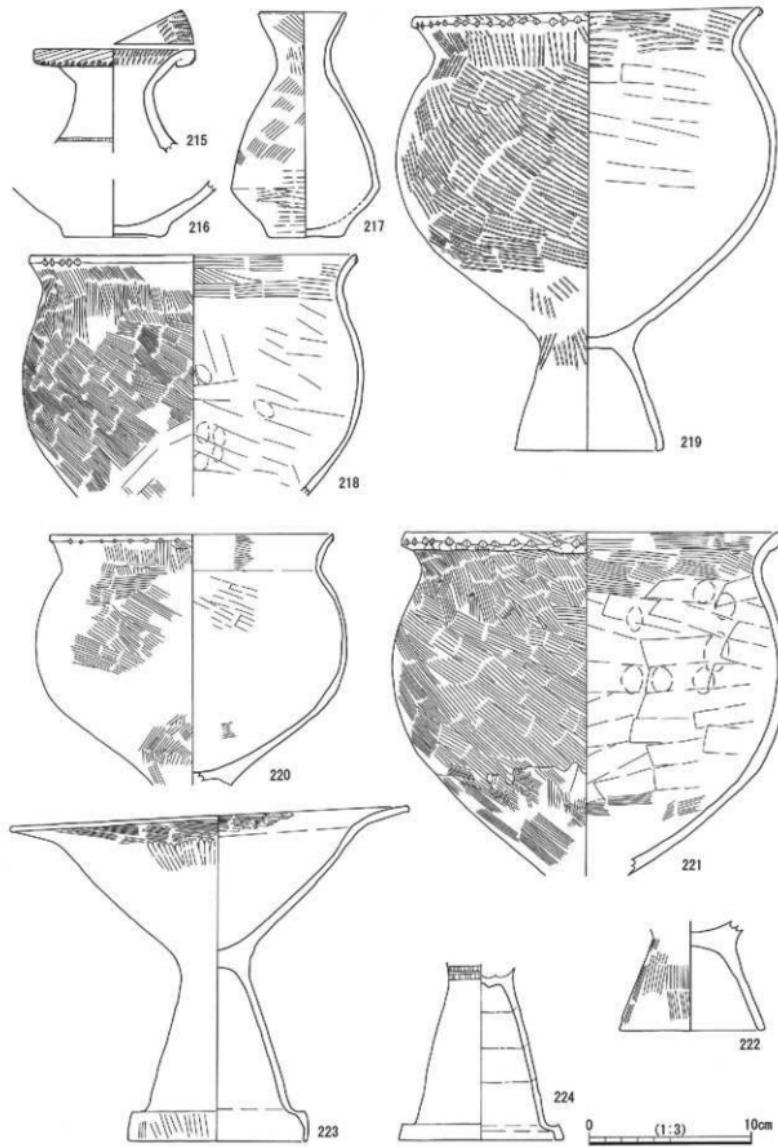
第42図 SD07出土土器(7)



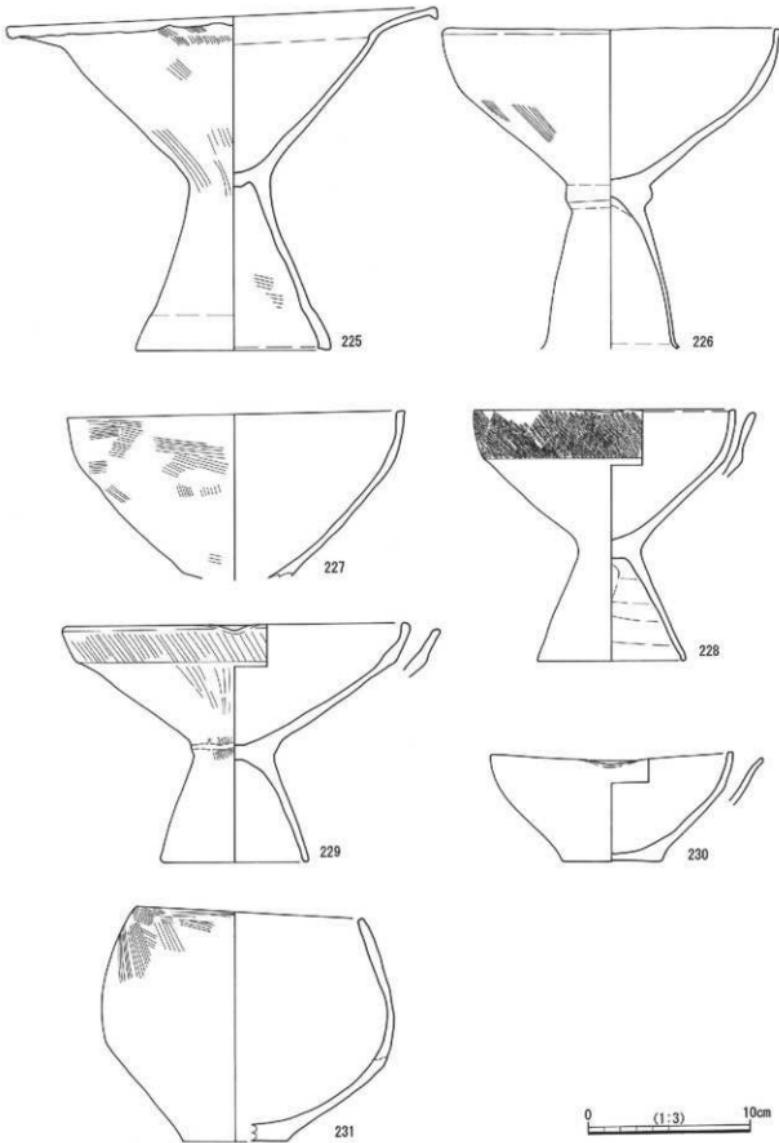
第43図 S D07出土土器(8)



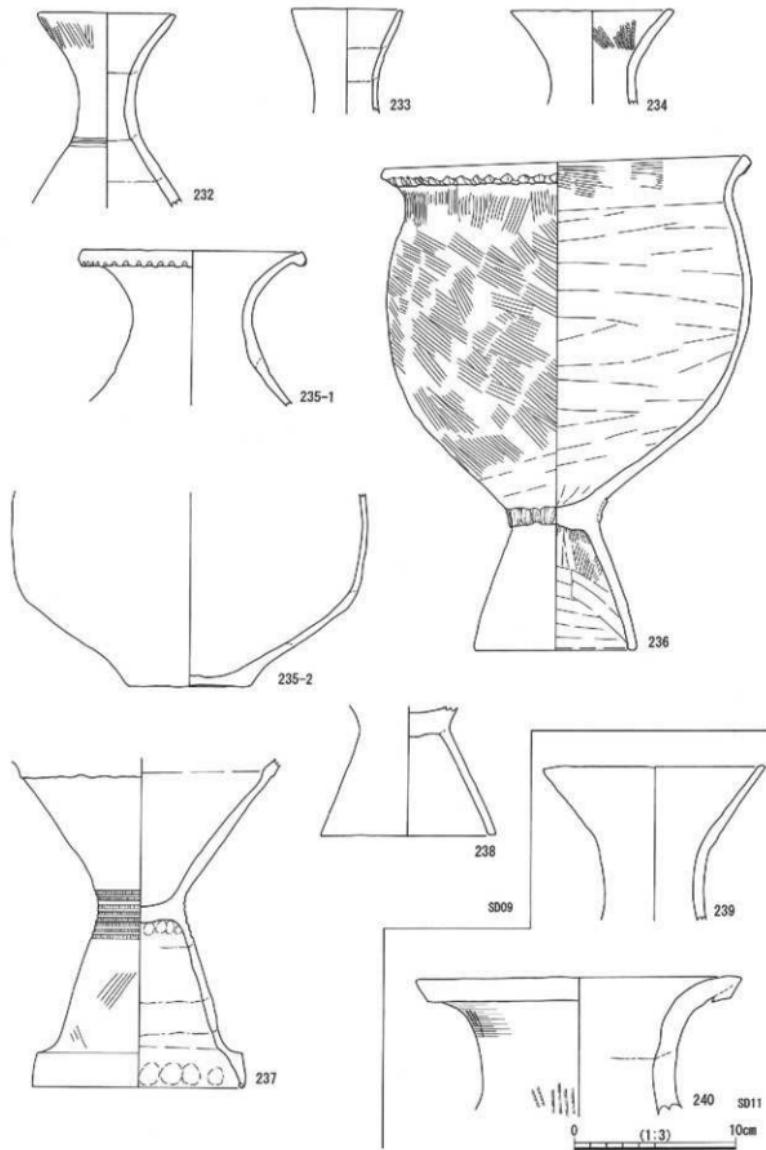
第44図 SD07出土土器(9)



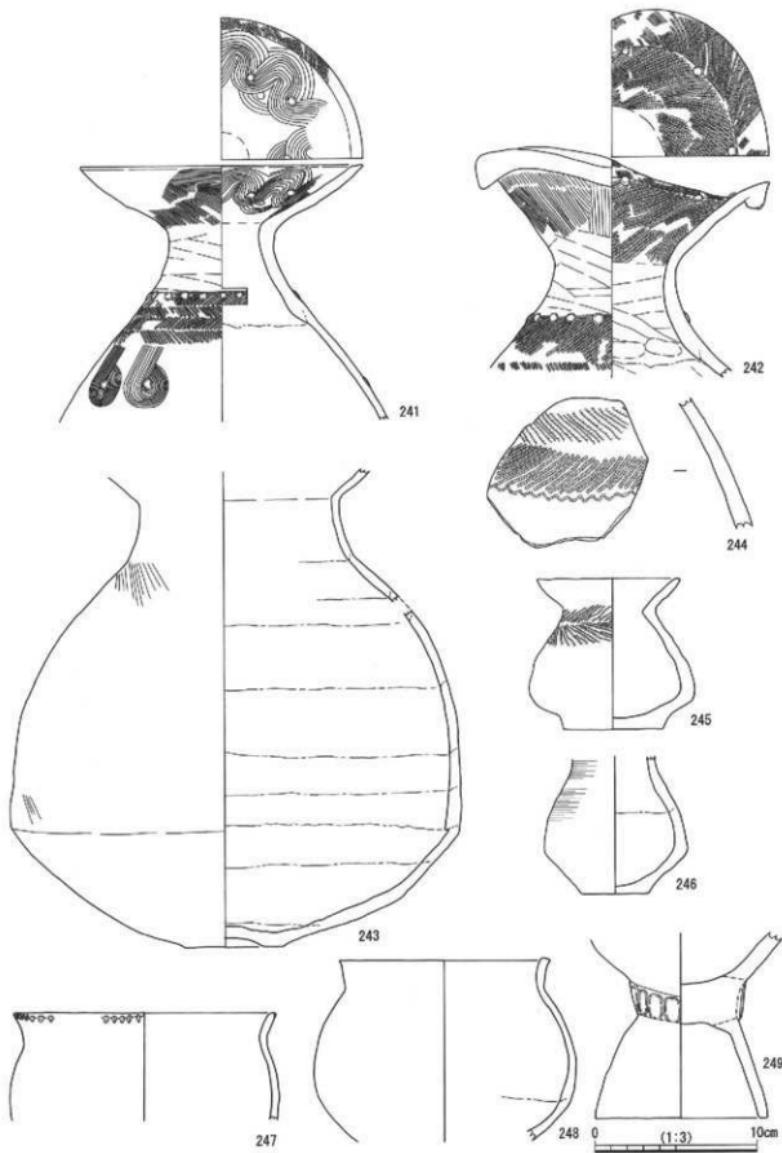
第45図 S D08出土土器(1)



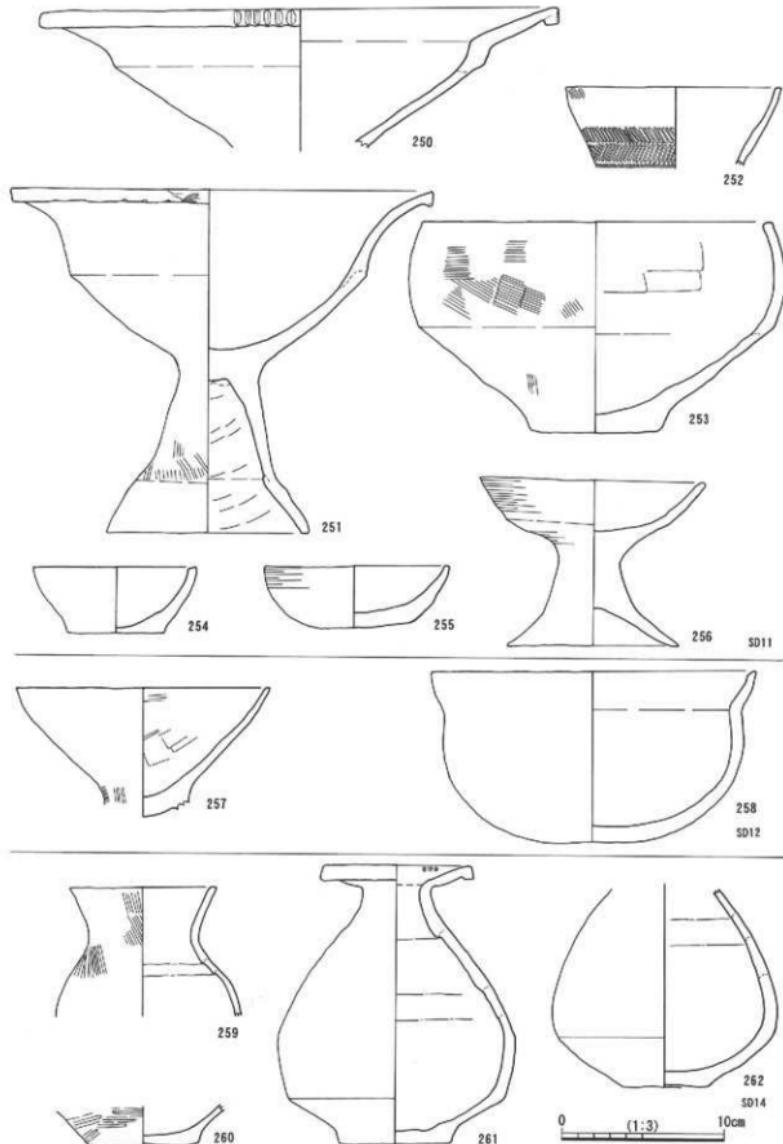
第46図 S D08出土土器(2)



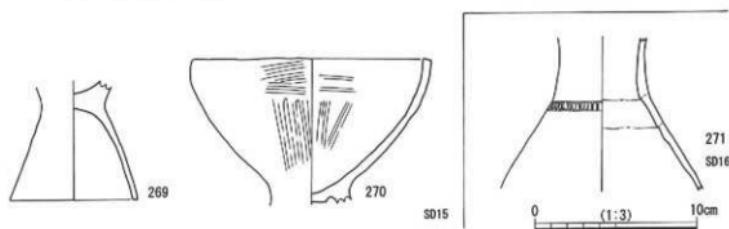
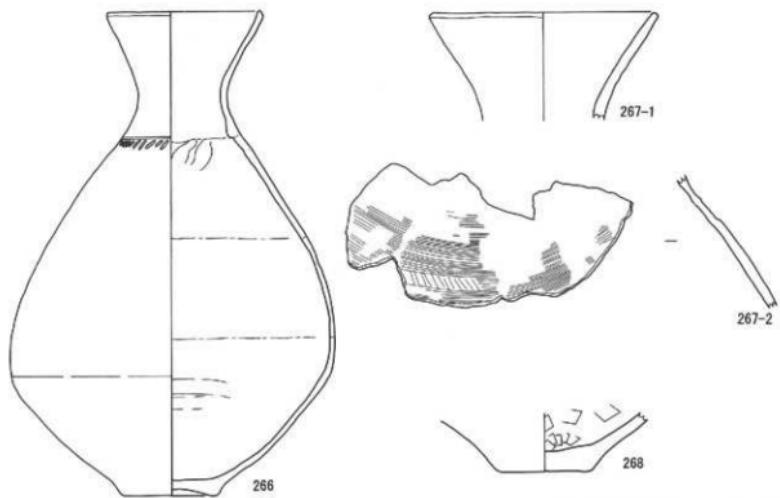
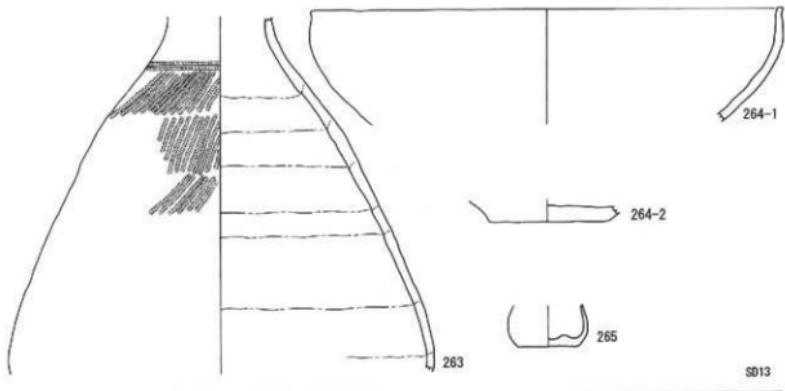
第47図 SD09・11出土土器



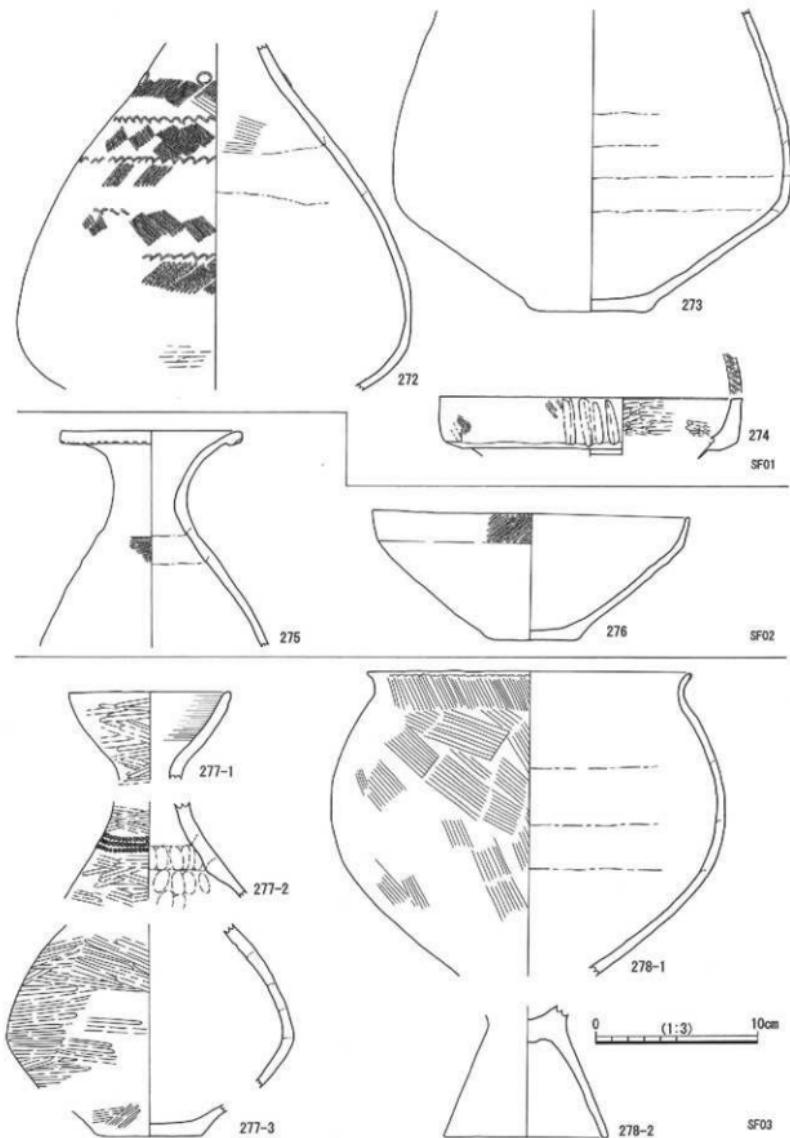
第48図 S D11出土土器



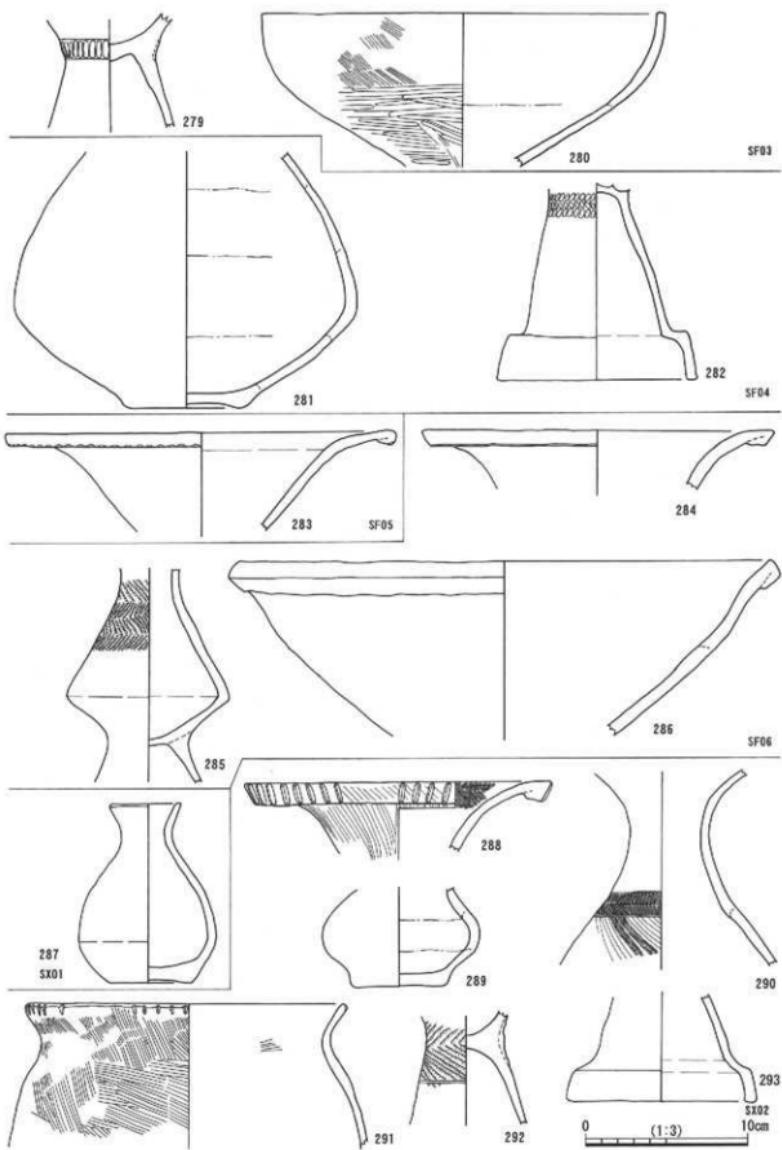
第49図 S D11・12・14出土土器



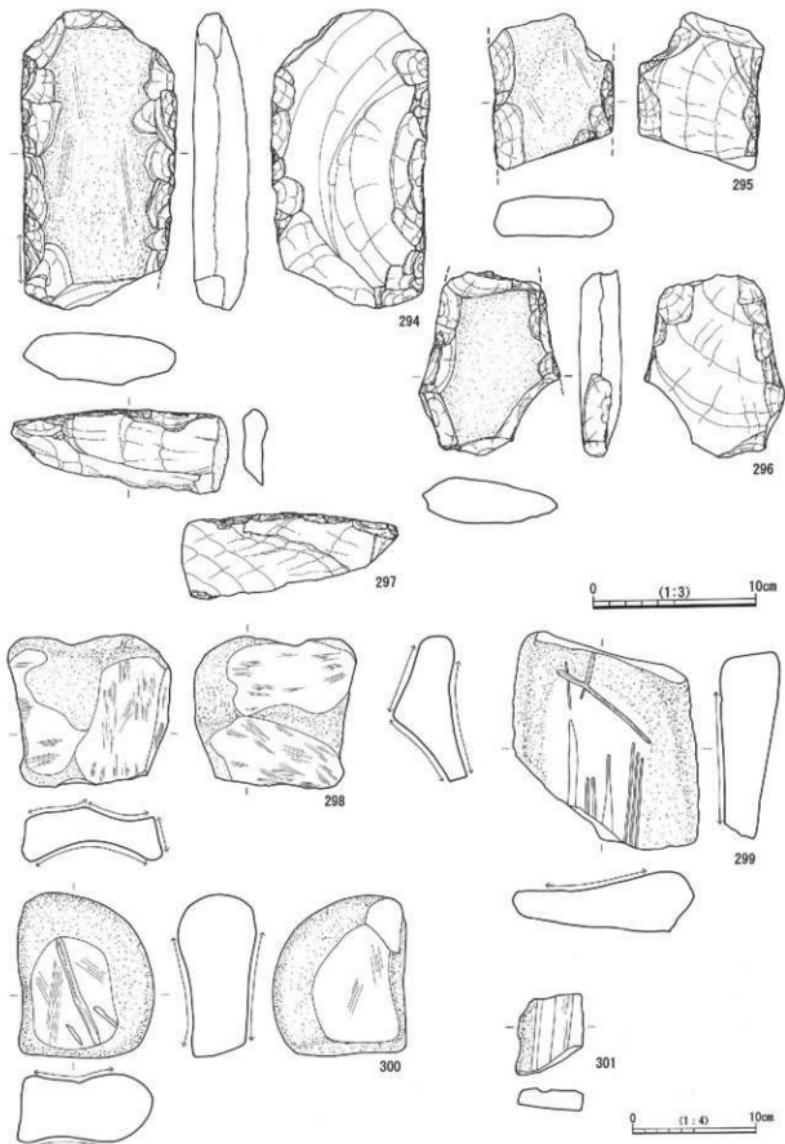
第50図 SD13・15・16出土土器



第51図 SF01~03出土土器



第52図 S F03~06、S X01·02出土土器



第53図 石器実測図

表10 遺物観察表（弥生土器・土師器・須恵器）

番号	部品 部品番号	写真 図版番号	遺物 部位	種類・ 形態	残存部位 (残存率%)	文様・調整		胎土 製法	色調	法量(cm)			備考		
						外縁				口径	周部 最大径	底径・ 脚部厚	高さ		
						外縁	内面								
1 27	S D01	弥生土器	瓶	台座	100	B 1	灰白色								
2 27	S D01	弥生土器	瓶	脚部(20)	脚部(100)	A	灰白色								
3 27	S D03	弥生土器	瓶	C 2	口縁部(20)	複合面に三角尖唇 口縁部に棒状浮文3	ハケ		灰白色	(23.0)					
4 27	S D01	弥生土器	瓶	A 2	口縁・底部(100)	ナデ?			A	灰白色	9.0				
5 27	S D01	弥生土器	瓶	A 2	口縁・底部(100)				A	灰白色	9.0				
6 27	S D01	弥生土器	瓶	A 2	口縁部(90)	口縁部のみ、LR面文か?	R L 面文	B 1	灰白色	10.0					
7 27	S D01	弥生土器	瓶	A 3	口縁・底部(25)	ハケ、ミガキ	ハケ		灰白色	(14.0)				鉛灰丸	
8 27	S D01	弥生土器	瓶	A 3	口縁・底部(25)				褐色	(13.0)				内部に 有機物付	
9 27	S D01	弥生土器	瓶	B 1	口縁・底部(25)	ハケ	L R 面文	A	灰白色	(14.0)					
10 27 16	S D01	弥生土器	瓶	B 1	口縁・底部(25)	L H 面文	面文	C 2	灰白色	(13.0)					
11 27 16	S D01	弥生土器	瓶	B 1	口縁・底部(100)	口縁部のみ、ハケ、ミガキ	ハケ→逆腹文	D 3	褐色	14.0				焼成丸	
12 27 16	S D01	弥生土器	瓶	B 1	口縁・底部(50)	ハケ、輪帶に燒成文 L R 面文	ハケ→燒成文 L R 面文	A	灰白色	16.0				焼成丸	
13 27	S D01	弥生土器	瓶	底	底面・底部(90)	L R 面文?	A	灰白色	14.4	7.2					
14 27	S D01	弥生土器	瓶	底	底面・底部(70)	ミガキ	ハケ	B 1	にぼい黄褐色	12.4	5.2				
15 27	S D01	弥生土器	瓶	底	底部(100)	ハケ→ミガキ			褐色	7.4					
16 27	S D01	弥生土器	瓶	底	底部(100)		ハケ	C 1	灰白色	5.5					
17 27	S D01	弥生土器	小型器	瓶	口縁・底部(100)	輪帶に燒成文4、 泥割刻文		C 1	褐色						
18 27 16	S D01	弥生土器	小瓶	瓶	口縁部～底部(100)	輪帶文、L R 面文、 ハケ→ミガキ	病部付近ハケ	C 1	浅黄色	10.5	5.2				
19 28	S D01	弥生土器	瓶	口縁・底部(25)	口縁部のみ、ハケ			B 1	灰黃褐色	(22.0)				外面部付	
20 28	S D01	弥生土器	瓶	口縁・底部(100)	口縁部のみ、ハケ	I I 面ハケ	褐色	B 2	18.5	20.5					
21 28	S D01	弥生土器	瓶	口縁・底部(25)	口縁部のみ、ハケ	ハケ、ナデ	B 3	にぼい褐色	(21.0)	(22.0)				外面部付	
22 28	S D01	弥生土器	瓶	口縁・底部(50)	口縁部のみ、ハケ		A	明黄色	15.0	16.0					
23 28 16	S D01	弥生土器	瓶	口縁・底部(100)	ハケ		B 2	灰白色	(13.4)	(15.1)					
24 28	S D01	弥生土器	台形器	瓶	口縁・底部(100)	ハケ		C 1	黃褐色						
25 28	S D01	弥生土器	台形器	瓶	口縁・底部(100)				褐色						
26 28	S D01	弥生土器	高杯	脚部	脚部(100)	輪帶に燒成文5		C 1	褐色						
27 28	S D01	弥生土器	高杯	脚部	脚部(100)	脚部3内凹等、ハケ		A	褐色					II.1	
28 28	S D01	弥生土器	高杯	脚部	脚部(50)	輪帶に燒成文4、 泥割文?		C 1	褐色						
29 28	S D01	弥生土器	高杯	脚部	脚部～底部(100)	三角尖唇、ハケ、ナデ		A	灰白色						
30 28	S D01	弥生土器	鉢	B 2	口縁～底部(30)			C 1	灰白色	(14.0)	(15.2)				
31 29	S D02	弥生土器	鉢	A 3	口縁～底部(100)	ハケ、ヨコナデ?	ヨコナデ?		にぼい黃褐色	8.0					
32 29	S D02	弥生土器	鉢	A 4	口縁～底部(100)	ハケ		B 3	浅黃褐色	7.6					
33 29	S D02	弥生土器	鉢	A 5	口縁～底部(100)	ハケ、ミガキ	ハケ	B 1	褐色	11.0					
34 29	S D02	弥生土器	鉢	B 2	口縁～底部(100)			C 3	灰白色	9.0					
35 29	S D02	弥生土器	鉢	B 2	脚部(50)	ミガキ		A	灰白色	17.4	6.1			上げ底	
36 29	S D02	弥生土器	鉢	B 2	脚部(25)	脚部下平に皺あり		A	灰白色	(16.8)	(18.0)				
37 29	S D02	弥生土器	鉢	A 3	口縁～底部(50)	口縁部のみ、ハケ		B 1	灰白色	(18.0)	(18.1)				
38 29 17	S D02	弥生土器	鉢	B 2	口縁～底部(100)	口縁部のみ、ハケ		B 1	灰黃褐色	18.0	18.2			部付着	
39 29 17	S D02	弥生土器	高外A	口縁～底部(100)	ハケ、複合面三角尖唇	ミガキ		A	灰白色	27.7				34.0	
40 29	S D02	弥生土器	高外B	脚部	脚部(100)	輪帶に燒成文5		C 1	灰白色						
41 29	S D04	弥生土器	盃	脚部	脚部～底部(100)	ミガキ	ハケ	C 1	灰白色						
42 30	S D05	弥生土器	盃	脚部	脚部	輪帶文		D 4	にぼい黃褐色						
43 30 17	S D05	弥生土器	盃	脚部	脚部～底部(100)	輪帶文		D 3	灰白色						
44 30	S D05	弥生土器	盃	脚部					灰白色						
45 30 17	S D05	弥生土器	盃	脚部	脚部	輪帶に燒成文、 輪帶刻文状									
46 30	S D05	弥生土器	盃	脚部	脚部(50)	輪帶文、棒状浮文3	輪帶刻文状	A	灰白色	14.0				パレス スタイル	
47 30	S D05	弥生土器	盃	脚部	脚部(25)	ヨコナデ	ヨコナデ		褐色	(14.0)	(5.0)				
48 30	S D05	弥生土器	盃	脚部	脚部(50)	すかし4			黃褐色	(12.4)	(13.0)	4.9			
49 30	S D05	弥生土器	盃	脚部	脚部(100)	すかし3			褐色						
50 30 17	S D05	弥生土器	盃	脚部	脚部(70)	A			褐色	6.3	(14.1)				
51 30	S D05	弥生土器	盃	脚部	脚部～底部(100)	輪帶に燒成文3		B 3	浅黃褐色	(14.4)					
52 30	S D05	弥生土器	盃	B 1	口縁～底部(15)	ハケ?			灰白色	(19.0)				折高部分が 剥離	
53 30	S D05	弥生土器	盃	B 1	口縁～底部(100)	ハケ		A	灰色					3.4	
54 30	S D05	弥生土器	盃	B 1	口縁～底部(25)	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ		灰白色	(13.0)					
55 30 17	S D05	弥生土器	盃	B 1	口縁～底部(70)	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ		青褐色	14.4					
56 30 17	S D05	弥生土器	盃	B 1	口縁～底部(40)	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ		褐色	(13.0)	(15.5)	3.5			
57 30 18	S D05	弥生土器	盃	脚部	脚部	波状文、輪帶文、波状3 刻み、ヘラケズリ、ヨコナデ		ナデ	灰色	10.4	14.2	2.5	11.3		
58 30 18	S D05	弥生土器	盃	脚部	脚部	輪帶文、波状3 刻み、ヘラケズリ		ナデ	灰色	16.7	4.0			自然軸、 ヘラ記号	
59 30 18	S D05	弥生土器	盃	脚部	脚部(40)	ヨコナデ、沈線、 ヘラケズリ		ナデ	灰白色	(11.0)	(11.6)	(6.5)	7.8		
60 31 19	S D05	弥生土器	盃	脚部	脚部(60)	カキ目調整、ヨコナデ			灰白色	9.0	24.1			26.5	
61 31 18	S D05	弥生土器	盃	脚部	脚部(100)	ヨコナデ	ヨコナデ		明黄色	14.0				3.8	

番号	押出 番号	写真 番号	造形 部位	種別	種類 ・形態	残存部位 (残存率%)	文様・模様		耐土 限重	色調	法量(cm)			備考		
											口径	幅部 最大径	底径・ 脚部径	高さ		
							外側	内面								
82	31	18	S D05上層	土師器	壺	天井部～1脚部 (100)	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色	12.5			4.0			
83	31	18	S D05上層	土師器	壺	口縁～底部(45)	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色	(13.0)	(15.0)					
84	31	18	S D05上層	土師器	壺	口縁～底部(55)	ヨコナデ	ヨコナデ	にじむ褐色	12.6	13.2	4.0				
85	31	18	S D05上層	土師器	壺	口縁～底部(25)	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色	(12.0)	(13.4)	(4.9)				
86	31	18	S D05上層	土師器	壺	口縁～底部(55)	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色	12.4	13.0	5.5				
87	31	18	S D05上層	土師器	壺	口縁～底部(55)	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色	(12.6)						
88	31	18	S D05上層	土師器	壺	口縁～底部(80)	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色	13.0	13.5	4.2				
89	31	18	S D05上層	土師器	壺	口縁～底部(70)	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色			(8.8)				
70	31	18	S D05上層	土師器	壺	脚部(100)	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色			(8.4)				
71	31	18	S D05上層	土師器	壺	脚部(100)	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色			(11.8)				
72	31	18	S D05上層	土師器	台舟壺	台舟(100)	ヘラケズリ、 ハケ	ヘラケズリ、 ハケ	褐色			(11.8)				
73	31	18	S D05上層	土師器	高壺	脚部(100)			褐色							
74	31	18	S D05上層	土師器	高壺	脚部(50)			褐色			16.2				
75	32	18	S D05上層	土師器	壺	口縁～底部(60)	ハケ	ナデ	褐色	16.5	20.3	6.3	(28.8)	表面にて 復元		
76	32	18	S D05上層	土師器	壺	口縁～底部(20)	ハケ～喉口ヨコナデ	ハケ～喉口ヨコナデ	明赤褐色	(23.0)						
77	32	18	S D05上層	土師器	壺	口縁～底部(25)			褐色	(20.0)						
78	32	18	S D05上層	土師器	壺	口縁～底部(25)			褐色	(16.0)						
79	32	18	S D05上層	土師器	台舟壺	口縁～脚部(100)	ハケ		褐色	(28.0)	30.0			表面にて 復元		
80	33	18	S D05	生土器	壺A	口縁～脚部(100)	ハケ、L.R.墨文→ 門形文3.4が4単位	A	灰褐色	9.5						
81	33	18	S D05	生土器	壺A	口縁～脚部(70)	ハケ、L.R.墨文	A	黄褐色	11.5						
82	33	18	S D05	生土器	壺A	口縁～脚部(25)	ハケ～ヨコナデ	A	褐色	(13.0)						
83	33	18	S D05	生土器	壺A	口縁～脚部(100)	脚跡正規墨文	A	浅褐色	9.5						
84	33	18	S D05	生土器	壺B	口縁～脚部(100)		褐色?	A	灰褐色	13.0					
85	33	18	S D05	生土器	壺B	口縁～脚部(25)		A	灰褐色	(15.0)						
86	33	18	S D05	生土器	壺B	口縁～脚部(50)		褐色?	A	灰白色	(14.8)	22.8				
87	33	18	S D05	生土器	壺C	口縁～脚部(100)	L.R.墨文、ハケ、 実突にてみ2	ヨコナデ、ハケ	B I	にじむ褐色	18.4					
88	33	18	S D05	生土器	壺	口縁～脚部(70)	圓錐三角彌文、ハケ?	D 2	にじむ黃褐色							
89	33	18	S D05	生土器	壺	脚部(30)	ヨコナデ、ハケ	ヘラナデ	A	褐色	(20.4)					
90	33	18	S D05	生土器	壺	脚部～脚部(100)	ハケ、ナデ、羽状墨文→ 門形文3.4が4単位	L.R.墨文		浅黄色						
91	34	19	S D05	生土器	壺	脚部(30)	ハケ	B I	褐色	(25.8)						
92	34	19	S D05	生土器	壺	脚部～底部(80)	ハケ、ミガキ	C I	灰白色	15.0	6.6					
93	34	19	S D05	生土器	壺	脚部～底部(50)	L.R.墨文、ハケ、ミガキ	A	灰白色	24.2	7.9					
94	34	19	S D05	生土器	壺	底部(50)	ミガキ	A	青灰色		(7.4)					
95	34	19	S D05	生土器	壺	底部(100)		A	浅褐色	7.3						
96	34	19	S D05	生土器	壺	底部(100)	ミガキ	A	灰褐色	7.2				上げ革		
97	34	19	S D05	生土器	壺	脚部	網刺羽利墨文、円形浮文	A	灰白色							
98	34	19	S D05	生土器	壺	脚部	筋筋墨文	A	灰白色							
99	34	19	S D05	生土器	小壺A	脚部～底部(100)	網刺正規墨文、L.R.墨文→ 門形文3.4が4単位	C I	灰褐色	11.4	4.6					
100	34	19	S D05	生土器	小壺B	脚部(40)	L.R.墨文、ハケ	B 3	灰白色	(11.2)	5.0					
101	34	19	S D05	生土器	小壺B	脚部～底部(40)		C I	浅褐色		(5.0)					
102	34	19	S D05	生土器	壺	脚部～台舟(50)	複合面に神社突端	B I	浅褐色							
103	34	19	S D05	生土器	壺A	口縁～脚部(30)	口縁込み、ハケ	B I	灰褐色	(17.2)	(17.6)					
104	34	19	S D05	生土器	壺A	口縁～脚部(50)	口縁込み、ハケ	B I	褐色	(18.4)	(18.6)					
105	35	20	S D05	生土器	高壺A	口縁～底部(20)	ハケ	A	灰褐色	(29.0)						
106	35	20	S D05	生土器	高壺B	口縁～底部(20)	ハケ	A	灰褐色	(21.0)						
107	35	20	S D05	生土器	高壺B	口縁～脚部(60)	口縫刈込み、接合部脚部土壁 貼り付け→脚辻	B 3	淡褐色	(24.1)	(11.4)	23.0				
108	35	20	S D05	生土器	高壺	脚部～脚部(100)	網刺正規墨文	B I	黃褐色							
109	35	20	S D05	生土器	高壺	脚部(60)	網合面～粘土貼付→ 脚辻正規墨文	B 3	灰白色							
110	35	20	S D05	生土器	脚部A	片口～脚部	A	灰褐色	17.0	17.5						
111	35	20	S D05	生土器	脚部A	脚部～底部(10)	R.L.墨文	B 4	灰褐色	(9.4)	(7.4)	8.8				
112	35	20	S D05	生土器	脚部A	底部	ナデ?	A	浅黃褐色	32.3	6.7	15.3		上げ革		
113	35	20	S D05	生土器	脚部A	脚部～底部(70)	L.R.墨文、ミガキ、片口口縫	A	灰褐色	16.2	5.4	6.8		上げ革		
114	35	20	S D05	生土器	脚部A	脚部～脚部(100)	L.R.墨文～ハケ	ナデ?	C I	薄褐色	8.5	8.5	4.5	7.2		
115	35	20	S D05	生土器	脚部A	脚部～底部(100)	片口～脚部	B I	浅褐色	8.0	4.4	6.7				
116	35	20	S D05	生土器	脚部B	脚部～底部(25)	ハケ	B 2	灰白色	(13.0)	(13.4)	(7.0)	6.5			
117	36	20	S D07	生土器	壺A	口縁～脚部(50)	ハケ	ヨコハケ		灰褐色	(8.6)					
118	36	20	S D07	生土器	壺A	口縁～脚部(100)	ハケ	A	灰白色	10.0						
119	36	20	S D07	生土器	壺A	脚部～脚部(100)	網刺正規墨文、 ハケ、ミガキ	A	灰白色	7.4	16.0	5.8	22.9			
120	36	20	S D07	生土器	壺A	口縁～底部(100)	ハケ	B 2	灰褐色	(6.9)	14.2	4.3	19.4			
121	36	20	S D07	生土器	壺A	脚部～底部(100)	ハケ	A	にじむ黃褐色	9.7						
122	36	20	S D07	生土器	壺A	脚部～底部(100)	ハケ	A	灰褐色	7.0						
123	36	20	S D07	生土器	壺A	脚部～底部(100)	ハケ、網刺正規墨文、円形浮文	D 2	灰褐色	13.4						
124	36	20	S D07	生土器	壺A	脚部～底部(100)	網刺正規墨文	A	明黃褐色	11.3						
125	36	20	S D07	生土器	壺A	脚部～底部(50)	ミガキ	A	にじむ黃褐色	13.6						
126	36	20	S D07	生土器	壺A	脚部～底部(50)	ハケ、ミガキ	A	にじむ黃褐色	12.1						
127	36	20	S D07	生土器	壺A	脚部～底部(50)	ハケ	B I	にじむ黃褐色	11.3						
128	36	20	S D07	生土器	壺A	脚部～底部(70)	ハケ	C I	灰褐色	8.3						
129	36	20	S D07	生土器	壺A	脚部～底部(60)	ハケ	A	灰白色	12.9						

番号	押印 番号	可 観 面 番号	遺傳 部位 位置	種別 形態	残存部位 (残存率%)	文様・調査		出土 場所	色調	法度(cm)				備考		
						外面				口幅	脚部 最大径	底部 幅	脚高			
						外側	内面									
130 36	S D07	赤生土器	底 A 2	口縁～側部(100)		ハケ	灰白色	11.1								
131 36	S D07	赤生土器	底 A 2	口縁～側部(20)	柳井庄緑文	ハケ	褐色	(9.6)								
132 37	S D07	赤生土器	底 A 3	口縁～側部(40)		ハケ	A 灰白色	(16.0)								
133 37	S D07	赤生土器	底 A 3	口縁～側部(30)		鑿文?	A 灰白色	(16.0)								
134 37	S D07	赤生土器	底 A 4	口縁～側部(50)	L R 緑文、柳井庄緑文 4		褐色	8.7								
135 37	S D07	赤生土器	底 A 3	口縁～側部(40)			A に赤い褐色	(15.4)								
136 37	S D07	赤生土器	底 A 4	口縁～側部(20)			灰白色	(14.8)								
137 37	S D07	赤生土器	底 A 4	口縁～側部(100)		ハケ	B I 洗面褐色	8.6								
138 37	S D07	赤生土器	底 A 5	口縁～側部(30)	柳井庄緑文 2、ハケ		A に赤い褐色	(15.6)								
139 37 21	S D07	赤生土器	底 B 1	口縁～側部(100)	摩状浮文 6、ハケ、三ガキ、円形浮文	瘤形文	A 明黄色	19.2								
140 37 21	S D07	赤生土器	底 B 1	口縁～側部(100)	口縁浮文、ハケ、柳井庄緑文、圓文	R L 緑文	A 浅青褐色	18.5								
141 37 21	S D07	赤生土器	底 B 1	口縁～側部(100)	摩状浮文 4、ハケ、ナデ	L R 緑文→C I	灰色	13.2								
142 37	S D07	赤生土器	底 B 1	口縁～側部(100)	摩状浮文 4、劍突文、円形浮文	R L 緑文	A 褐色	(16.9)								
143 38	S D07	赤生土器	底 B 1	口縁～側部(100)	ミガキ、劍突契状文?	ハケ→L R 緑文→ミガキ	A 灰白色	13.0								
144 38	S D07	赤生土器	底 B 1	口縁～側部(70)	ハケ	R L 緑文	褐色	16.2								
145 38	S D07	赤生土器	底 B 1	口縁～側部(60)	圓文	ハケ→R L 緑文	B I 灰白色	15.5								
146 38 21	S D07	赤生土器	底 B 1	口縁～側部(100)	L R 緑文	ナデ	A 明黄色	12.6								
147 38	S D07	赤生土器	底 B 1	口縁～側部(50)	ミガキ	摩状浮文 4	B I 灰色	15.7								
148 38	S D07	赤生土器	底 B 3	口縁～側部(40)	摩状浮文 4	鑿文?	A 灰白色	(14.5)								
149 38	S D07	赤生土器	底 B 3	口縁～側部(45)	口唇契状文		A 褐色	(16.0)								
150 38	S D07	赤生土器	底 B 2	口縁～側部(90)	ハケ、ミガキ	ハケ→L R 緑文→ミガキ	A 灰白色	13.0								
151 38	S D07	赤生土器	底 B 2	口縁～側部(20)	摩状浮文 3、劍突契文、円形浮文	瘤形文	D 2 灰白色	(16.0)						圓面にて 復元		
152 38	S D07	赤生土器	底 B 2	口縁～側部(60)	ハケ、劍突文、L R 緑文	ハケ→L R 緑文	明黄色	13.0								
153 38	S D07	赤生土器	底 B 2	口縁～側部(100)		劍突契文	A に赤い褐色	13.3								
154 38	S D07	赤生土器	底 B 1	口縁～側部(40)			D 2 灰白色	9.3								
155 38 21	S D07	赤生土器	底 B 3	口縁～底部(75)	口縁刻み、柳井庄緑文 2、圓文		A 灰白色	9.5								
156 39	S D07	赤生土器	底 C 1	口縁～側部(50)	羽状浮文 4→摩状浮文 6、ハケ		A 灰白色	(28.0)								
157 39 21	S D07	赤生土器	底 C 1	口縁～側部(30)	羽状浮文 4→摩状浮文 6、ハケ	口唇部鑿文	A 灰白色	(28.0)								
158 39	S D07	赤生土器	底 C 2	口縁～側部(15)	摩状浮文 4		A 灰色	(24.6)								
159 39 21	S D07	赤生土器	底 C 3	口縁～側部(100)	L R 緑文→摩状浮文 4が重複		A 灰色	21.8								
160 39	S D07	赤生土器	底 C 3	口縁～側部(30)	L R 緑文、窓み、ハケ	口唇部ハケ	灰白色	(23.7)								
161 39 21	S D07	赤生土器	底 C 1	口縁～側部(100)	柳井庄緑文、L R 緑文、ミガキ	鑿文	A 灰色	16.9	6.8					上好底		
162 39 22	S D07	赤生土器	底 A	底部～底部(100)	柳井庄緑文		A 灰色	13.6	6.8							
163 39 22	S D07	赤生土器	底 A	底部～底部(100)	ミガキ		A 褐色	15.6	6.3					底部木底		
164 39	S D07	赤生土器	底 A	底部～底部(25)	ハケ→ミガキ	ナデ	C I 褐黄色	12.0	6.0							
165 39	S D07	赤生土器	底 A	底部～底部(25)			B 2 灰白色	(12.2)	6.0							
166 40 22	S D07	赤生土器	底 A	底部～側部(100)	柳井庄緑文 2、ハケ		B 2 灰色	(23.0)								
167 40 22	S D07	赤生土器	底 A	底部～側部(30)	円形浮文、柳井庄緑文、圓形浮文		B I 灰白色	(15.8)								
168 40	S D07	赤生土器	底 A	底部～側部(100)	柳井庄緑文、柳井庄緑文、窓み、円形浮文	R L 緑文	A 灰白色									
169 40	S D07	赤生土器	底 A	底部～側部(40)			灰白色									
170 40 22	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部(100)	ミガキ		A 黄灰色	5.0	8.8							
171 40 22	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部(100)			A 灰白色	6.4	3.9							
172 40 22	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部(100)	口縁刻み	B I 淡黄色	24.4	24.0	10.4	27.6						
173 40 22	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部(100)	口縁刻み、ハケ	B I 淡黄色	14.9	17.0	7.5	(19.5)	傷付善					
174 41 22	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部、台部	口縁刻み、ハケ	ヨコハケ、ナデ	B I に赤い褐色	21.5	20.8	9.4	25.8	圓面にて 復元				
175 41 23	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部(100)	口縁刻み、ハケ	ヨコハケ、ナデ	B I に赤い褐色	20.1	18.7							
176 41 23	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部(100)	口縁刻み、ハケ	ヨコハケ、ナデ	B I に赤い褐色	19.9	22.7							
177 41 23	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部(100)	口縁刻み、ハケ→ナデ	ナデ	B I に赤い褐色	16.9	18.6							
178 41 23	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部(100)	口縁刻み、ハケ	ナデ	B I 褐色	15.7	17.0							
179 41 23	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部(50)	口縁刻み、ハケ	ヨコハケ、ナデ	B I に赤い褐色	16.0	17.5							
180 41	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部(25)	口縁刻み、ハケ		B I 灰白色	(14.0)								
181 41	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部(20)	口縁刻み、ハケ	ヨコハケ	B 3 灰白色	19.5	21.5							
182 42	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部(30)	口縁刻み、ハケ	ヨコハケ	B I 灰白色	(18.0)	(21.2)							
183 42	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部(30)	口縁刻み、ハケ	ヨコハケ→ハラナデ	B I 灰黃色	(20.0)	(21.6)							
184 42	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部(50)	口縁刻み、ハケ	D 4	淡黄色	19.5	22.4							
185 42	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部(20)	口縁刻み、ハケ	ハラナデ	B I 褐色	(20.0)	(20.0)							
186 42 23	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部(70)	口縁刻み、ハケ	ヨコハケ、ナデ	B I 灰黃色	(8.6)	16.8							
187 42	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部(25)	粘土帶貼付	ハラナデ	明褐色									
188 42	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部(20)	ハラナデ	ナデ	淡黄色		8.5							
189 42	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部(20)	ハラナデ	ハケ	B I 灰白色		9.0							
190 42 23	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部(100)	口縁刻み	A	灰白色	25.5	(12.1)	24.9						
191 42	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部(100)	口縁刻み	C I 灰色	灰白色	25.7								
192 42	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部(60)	口縁刻み、ミガキ	ミガキ	C I 灰色	25.7								
193 42	S D07	赤生土器	底 A	口縁～側部(20)	ハケ	ミガキ	壁色	(22.4)								

番号	被認可番号	写真 同様 番号	遺傳・ 母系	種別 形態	現存部位 (残存率%)	文様・調整		肚型 類型	色調	法量(cm)			備考	
						外因	内面			口径	裏幅 最大径	幅名 前脚部		
194 43	S D07	新生上部	高B	口縫～脚部(20)	口縫刺タ、ミガキ	ミガキ	C 2	黄灰色	(26.0)					
195 43	-	S D07	新生上部	高H	脚部(20)	脚部圧痕文2			褐色					
196 43	-	S D07	新生上部	高H	脚部(100)	脚部圧痕文5	ミガキ		灰白色					
197 43	S D07	新生上部	高H	脚部(100)	三角形		B 3	灰白色		(12.0)				
198 43	S D07	新生上部	高H	脚部(60)	三角形空		A	灰白色		(11.2)				
199 43	S D07	新生上部	高H	脚部(35)	脚部圧痕文4		B 1	灰白色		(12.3)				
200 43	S D07	新生上部	高H	脚部(100)	脚部圧痕文6	ミガキ		灰白色						
201 43 26	S D07	新生上部	高H	脚部(100)	三角形空、ハケ→L記文	ハケ→ナデ	C 2	灰白色		13.2				
202 43 26	S D07	新生上部	合脚部	口縫～台脚(50)	L記文、ミガキ、片口口縫	A	埋色	14.2			(14.6)			
203 43 26	S D07	新生上部	合脚部	口縫～台脚(100)	ミガキ	A	灰白色							
204 43 26	S D07	新生上部	脚A 1	口縫～脚部(100)	ハケ、片口口縫	C 1	灰白色	16.2	6.8	7.8				
205 43 24	S D07	新生上部	脚A 1	口縫～脚部(70)	ハケ、ミガキ	ナデ	A	灰黄色	15.8	4.5	7.3			
206 43 24	S D07	新生上部	脚A 1	口縫～脚部(100)	ハケ→ミガキ、底面ミガキ	ハケ	C 1	灰白色	11.9	6.3	5.8			
207 43 24	S D07	新生上部	脚A 1	口縫～脚部(70)	ハケ	ミガキ	B 1	灰白色	13.7		5.4			
208 43 24	S D07	新生上部	脚B	口縫～底部(20)	ハケ	A	灰白色	(12.0)	(12.8)	5.2	5.5			
209 43 24	S D07	新生上部	脚B	口縫～底部(100)	ハケ、ミガキ、片口口縫	ナデ	B 2	明度褐色	14.7	18.0	5.1	13.5		
210 44 24	S D07	新生上部	脚B	口縫～底部(30)	L記文、片口口縫	C 1	灰白色	17.7		6.8	6.9			
211 44 24	S D07	新生上部	脚B	口縫～底部(70)	ハケ→ナデ	ミガキ	A	灰黄色	(15.3)	16.1	5.4	8.1		
212 44 24	S D07	新生上部	脚B	口縫～底部(100)	口縫刺み、ハケ、ミガキ	ココハ、ナデ	A	灰白色	26.5	29.7	7.9	20.8		
213 44 25	S D07	新生上部	脚C 2	口縫～脚部(25)		C 4	浅黃褐色	(16.0)				赤影		
214 44 25	S D07	新生上部	脚C 2	口縫～底部	ハケ、ミガキ	A	灰白色	(21.4)	(28.8)	7.0	24.2			
215 45	S D08	新生上部	脚B 1	口縫～脚部(60)	口縫刺み、ハケ、脚部圧痕文?	脚部突舌状	A	灰白色	9.8				焼成良	
216 45	S D08	新生上部	脚B	底部(100)				黄灰色			6.5			
217 45 25	S D08	新生上部	小型A	口縫～底部(100)	ハケ、ミガキ	C 1	灰白色	5.1	9.1	4.6	13.9			
218 45 26	S D08	新生上部	脚A	口縫～脚部(50)	口縫刺み、ハケ	B 1	にじむ褐色	20.0	21.0					
219 45 25	S D08	新生上部	脚A	口縫～底部(100)	口縫刺み、幅広のハケ	ハケ、ヘラナデ	B 1	にじむ褐色	20.8	23.2	(5.8)	27.0		
220 45 26	S D08	新生上部	脚A	口縫～脚部(50)	口縫刺み、ハケ	ハケ、ヘラナデ	B 2	にじむ褐色	(17.2)	(19.0)				
221 45 25	S D08	新生上部	脚B	口縫～底部(100)	口縫刺み、ハケ	ハケ、ヘラナデ	B 1	灰褐色	22.7	24.0				
222 45	S D08	新生上部	脚B	合脚部(100)	ハケ	C 1	にじむ褐色			9.0				
223 45 26	S D08	新生上部	脚B	口縫～脚部(100)	ハケ、ミガキ	B 3	灰褐色	(24.1)	(10.6)	20.0				
224 45	S D08	新生上部	脚B	脚部(100)	脚部圧痕文2、ミガキ?	C 1	灰白色			10.0				
225 46 26	S D08	新生上部	脚B	口縫～脚部(50)	ハケ	B 3	にじむ褐色	(26.0)	(11.6)	20.5				
226 46 28	S D08	新生上部	脚C	口縫～脚部(100)	ミガキ、ハケ、三角突起	A	にじむ褐色	20.1						
227 46 25	S D08	新生上部	脚C	口縫～脚部(100)	ミガキ?	B 2	灰白色	20.6						
228 46 25	S D08	新生上部	脚C	口縫～脚部(100)	ミガキ、ハケ、片口口縫	B 1	灰白色	16.0	(9.0)	15.4				
229 46 25	S D08	新生上部	脚C	口縫～脚部(70)	ハケ?、ミガキ、片口口縫	B 3	にじむ褐色	20.6	(8.8)	14.5				
230 46 25	S D08	新生上部	脚C	口縫～脚部(70)	片口口縫	B 2	灰白色	14.3		6.2	6.5			
231 46 26	S D08	新生上部	脚C 2	口縫～底部(100)	ハケ→ミガキ?	ヘラナデ?	C 1	にじむ褐色	13.7	15.0	6.4	14.1		
232 47 27	S D09	新生上部	脚A 2	口縫～脚部(70)	ハケ、脚部圧痕文?	C 1	灰白色	8.4						
233 47 27	S D09	新生上部	脚A 2	口縫～脚部(70)		C 1	灰白色	7.0						
234 47	S D09	新生上部	脚A 3	口縫～脚部(25)	幾文?	C 1	灰白色	(10.0)						
235 47	S D09	新生上部	脚B 1	口縫～底部(25)	口縫刺み	A	にじむ褐色	(14.0)	(21.8)	7.3				
236 47 27	S D09	新生上部	脚B	口縫～合脚部(100)	口縫刺み、ハケ、黏土跡引付け→脚部	B 3	浅黃褐色	22.1	22.3	9.8	30.2			
237 47 27	S D09	新生上部	脚B	脚部(100)	脚部圧痕文8、ハケ	A	灰白色							
238 47	S D09	新生上部	脚B	合脚部(100)				褐色						
239 47	S D11	新生上部	脚A 3	口縫～脚部(100)		A	褐色	13.6						
240 47	S D11	新生上部	脚B 1	口縫～脚部(20)	幅広のハケ→コチナデ	A	灰白色	(20.0)						
241 48 27	S D11	新生上部	脚A 4	11脚～脚部(70)	ミガキ、脚部突舌羽文	A	灰白色	17.3						
242 48 27	S D11	新生上部	脚B 1	口縫～脚部(50)	ミガキ、円形突起、円形突文	D 1	異白色	18.1						大きく圓んでいる
243 48 27	S D11	新生上部	脚B	脚部(50)	圓文?、ハケ	A	灰色	27.5	6.0					上記
244 48 27	S D11	新生上部	脚B	脚部	脚部突舌羽文	A	灰色							
245 48 27	S D11	新生上部	脚B	脚部(90)	脚部突舌?、ハケ	A	灰色	(9.0)	10.2	5.1	9.3	赤影		
246 48 27	S D11	新生上部	脚B	脚部(90)	ヨコナデ?	A	灰白色	8.8	4.1					
247 48 27	S D11	新生上部	脚B	脚部(90)	口縫刺み	A	灰褐色	(15.0)	(15.4)					
248 48 27	S D11	新生上部	脚B	脚部(90)	ヨコナデ?	A	灰白色	(13.0)	(16.2)					
249 48	S D11	新生上部	脚B	脚部(100)	接着面に粘土貼り付け→脚部			褐色						
250 49	S D11	新生上部	脚B	脚部(10)	糸?	A	灰白色	(31.8)						
251 49 28	S D11	新生上部	脚B	脚部(50)	脚部刺?	A	灰白色	(25.5)			21.1			
252 49 28	S D11	新生上部	脚C 2	脚部(100)	ハケ?、脚部突舌羽文	A	褐色	13.2						
253 49	S D11	新生上部	脚C	脚部(20)	ハケ	A	灰白色	(21.4)	(23.0)	7.6	13.9			
254 49 28	S D11	新生上部	脚A 1	口縫～脚部(100)	ハケ?、脚部	A	灰白色	10.0	5.8	4.0				
255 49 28	S D11	新生上部	脚B	脚部(80)	ヨコナデ?	A	褐色	11.4	5.2	3.7				
256 49 28	S D11	新生上部	脚B	脚部(100)	ヨコナデ?	A	にじむ褐色	13.7		10.6	10.1			
257 49	S D12	新生上部	脚B	脚部(100)	ハケ	B 1	にじむ褐色	15.4						
258 49 28	S D12	新生上部	脚B	脚部(10)	ヨコナデ?	B 1	褐色	(19.6)			(10.5)			
259 49	S D14	新生上部	脚A 2	脚部(100)	ハケ	B 1	灰白色	9.0						
260 49	S D14	新生上部	脚B	底部(100)	ミガキ	B 1	灰白色			7.0				
261 49 28	S D14	新生上部	脚B 1	底部(60)	円形突起文が4単位	B 3	淡黄色	10.5	14.4	7.7	17.1			
262 49	S D14	新生上部	脚B	底部(50)		B 1	灰白色				(18.8)	(5.4)		
263 50	S D13	新生上部	脚A 1	脚部(100)	脚部圧痕文2、L記文	A	灰白色				(28.0)			
264 50	S D13	新生上部	脚A 1	脚部(25)	ミガキ?	B 1	灰白色	(29.0)			7.2			
265 50	S D13	新生上部	脚A 1	脚部(100)		C 1	灰白色				3.6			

番号	桜田 番号	可見 同様 部分 番号	遺構・ 層位	種類	表面・ 断面 (既存部%)	文様・調査		断土 範囲	色調	法量(cm)				備考	
						外観	内面			口径	幅	厚さ	重量		
265	50	28	S D15	赤生土器	裏A 2	口縁～底部(100)	鶴狩形彌文?		A	淡黄色	9.2	15.9	5.6	29.5	上付造
267	50	S D15	赤生土器	裏A 3	口縁～胴部(30)	鶴狩形彌文		A	明黄色	(14.0)					
268	50	S D15	赤生土器	裏	底面(80)										
269	50	S D15	赤生土器	裏	台面(100)										
270	50	S D15	赤生土器	合N様A	口縁～胴部(70)	ミガキ	ミガキ?		A	淡黄色	14.6				
271	50	S D16	赤生土器	裏	側面～胴部(100)	鶴狩江瓶彌文、彌文?		A	淡白色						
272	51	28	S F01	赤生土器	裏	側面～胴部(50)	鶴狩形彌文(深状)4、円形浮文、ミガキ		A	明褐色		24.1			
273	51	S P01	赤生土器	裏	胴部～底部(40)				A	黄褐色		(24.4)	7.4		
274	51	S P01	赤生土器	裏C 2	口縁部(20)	鶴文～撫状彌文 4	ミガキ、	A	褐色	(18.0)					
275	51	S F02	赤生土器	裏B 1	口縁～胴部(100)	口縁彫み、鶴狩形彌文 2		A	淡白色	11.0					
276	51	S F02	赤生土器	裏B	口縁～底部(50)	L R彌文		A	淡白色	15.4		5.1	7.9		
277	51	S F03	赤生土器	裏A	口縁～底部(50)	ミガキ、有茎鶴彌文 3	ヨコナデ	C 3	淡白色	(16.0)	(17.6)	6.4			
278	51	S F03	赤生土器	裏A	口縁～鈎部、鈎部(20)	口縁彫み、ハケ	ヘラナデ	B 1	にい・橙色	(20.0)	(24.2)	10.0			
279	52	S F03	赤生土器	高杯	脚部(100)	接合部堅子彫り付け→ 舟形		B 1	淡白色						
280	52	S F03	赤生土器	合N様	口縁～脚部(50)	ハケ→ミガキ		C 1	淡白色	(25.0)					
281	52	S F04	赤生土器	高杯	脚部～底部(30)			A	暗灰色		(25.8)	7.8	上付造		
282	52	S F04	赤生土器	高杯	脚部(100)	鶴狩形彌文		C 1	灰褐色			12.2			
283	52	S F05	赤生土器	高杯B	口縁～脚部(50)	口縁彫み		A	灰褐色	(24.0)					
284	52	S F06	赤生土器	裏B 1	口縁部(50)			A	暗褐色	(21.8)					
285	52	29	S F06	赤生土器	台村	裏面～台部(50)	鶴狩尖彌文	A	淡白色			(10.0)			
286	52	S P06	赤生土器	小盤	脚部(20)			A	褐色	(22.0)					
287	52	29	S X01	赤生土器	心型A	口縁～底部(50)		C 1	灰色	2.3	8.3	5.2	11.6		
288	52	S X02	赤生土器	心型B	1	口縁～底部(50)	ハケ→撫状彌文 8、ハケ	ヨコナデ	A	褐色	(19.0)				
289	52	29	S X02	赤生土器	心型B	脚部～底部(50)		A	淡白色			9.6	5.7		
290	52	S X02	赤生土器	心型C	脚部～底部(100)	鶴狩形彌文 2、彌文?		A	暗灰色						
291	52	29	S X02	赤生土器	裏A	口縁～脚部(100)	口縁彫み、ハケ	B 1	にい・黄褐色	19.0					
292	52	S X02	赤生土器	高杯	脚部(100)	鶴狩形彌文		C 1	淡白色						
293	52	S X02	赤生土器	高杯	脚部(100)	鶴狩彌文		B 3	淡白色						
302	56	S H05 P 1	赤生土器	裏	口縁部	口縁彫み、ハケ	ハケ							無中付 深脚形盤	
303	56	S D07	赤生土器	裏	脚部(50)		ハケ	A	明褐色			(57.5)		大切盤	

既存部の項目について

遺構・層位 第IV章第2節第1、(1)を参照のこと

既存部 繋接着している部分の既存部を示す

文様・調査 →は既存文様を示す

追加文様 第IV章第2節1、(2)を参照のこと

既存部 基本的に土器内面の色調を記述している

( )は推定値

表II 遺物観察表(石器・玉類)

番号	桜田 番号	写真 版番	遺構・層位	種類	色調・石材	法量				備考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
294	53	29	S D09	石歯	暗灰色中粒砂岩	18.4	9.6	3.0	850	
295	53	29	S D06	石歯	暗灰色中粒砂岩	7.5	7.3	2.5	290	
296	53	29	S F02	石歯	粗粒砂岩	11.1	8.3	2.6	320	
297	53	29	S D01	打製刃器	灰綠色中粒凝灰岩	13.3	4.5	1.4	120	
298	53	29	S B03	砾石	細粒砂岩	12.2	12.9	4.7	970	
299	53	29	包含層	砾石	灰褐色中粒砂岩	15.7	15.0	5.0	1370	
300	53	29	S D09	砾石	中粒砂岩	13.4	10.7	5.4	1310	
301	53	29	S D07	砾石	細粒砂岩	6.0	5.4	1.6	75	
17			S D09	小玉		—	—	0.3	0.01	ガラス製

### 第3節 中・近世の遺構と遺物

検出された遺構は掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑、井戸状遺構などである。なお、井戸状遺構の中には、出土遺物が少ないため遺構の時期を特定できないものもあるが、すべて本節で扱うこととする。

#### 1. 掘立柱建物跡

##### S H04 (第54・62図)

1区、B・C-2グリッド付近で検出された梁間1間×桁行1間の掘立柱建物跡である。大きさは、2.7m×4.6mで、短辺部分は南西側の調査区外に展開している可能性もある。面積は12.42m<sup>2</sup>、主軸方向は、N-30°-Eである。

柱穴の人さきは、直径0.7~1.0m、検出面からの深さは、0.3~0.9mである。4基の柱穴のうち3基から柱根(325~327)が、残りの1つから礎板(328)が出土した。3つの柱根の下端面は斜めであるが(325と326は3.5cm、327は4.0cmの差がある)、平坦に削った加工痕が残っている。特に326は、刃幅4.5cmの加工痕が残っている。また、柱根の周囲も平坦になるように加工してある。どの柱根も樹齢80年以上上のヒノキを使用しており、その直径は24~32cmと民家として使用される通常の掘立柱建物の柱よりも太いのが特徴である。礎板はマツの割材を使用している。

これらのことから、この掘立柱建物跡は、当時の人々が日常使用した民家等に見られない特徴をもつた建物であり、仏堂もしくは神社など宗教施設が考えられる。実際にこの掘立柱建物跡と関係するかはわからないが、建物の内側、柱穴(P2)付近より、後述する中世墓(SF07)が検出されている。

この遺構の時期は、後述するSD17に切られていることしか分からぬいため、14世紀前半以前としておく。

##### S H05 (第54・56図)

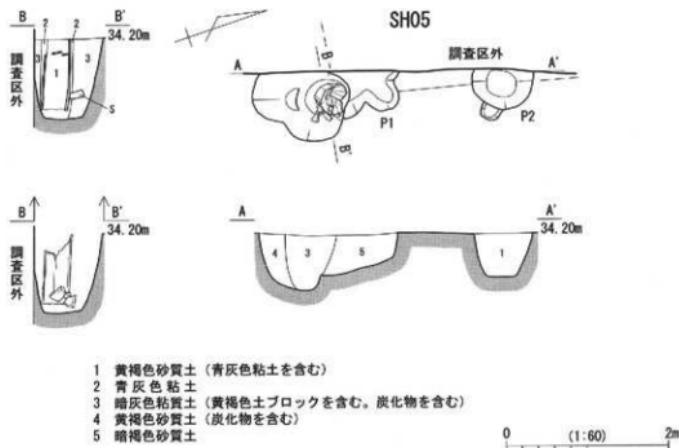
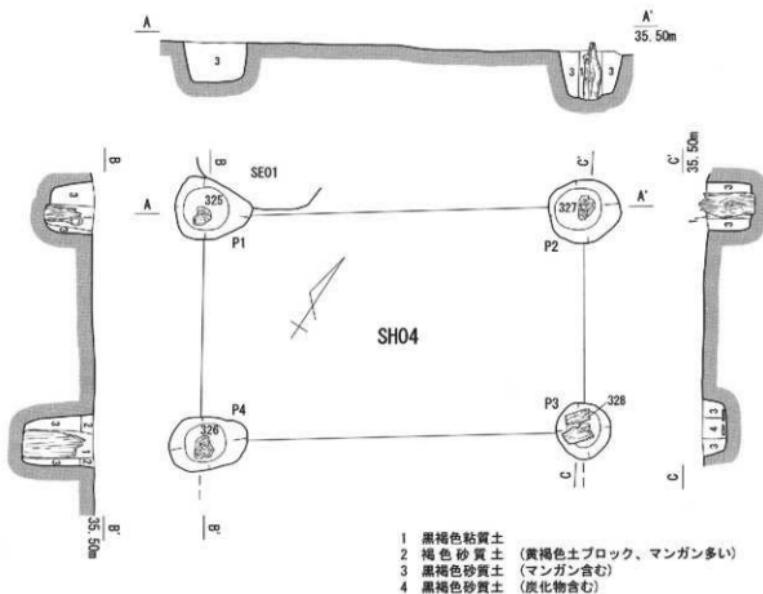
3区、A-12・13グリッドから検出された掘立柱建物跡である。調査区の北端からの検出であったため、柱穴2基しか確認できなかった。柱穴間の幅は約2mで、P1からは、長さ86.0cm、直径34.0cmの柱根とかわらけが出土した。柱根はマツを使用しているが、樹皮しか残っていなかった。この遺構の時期は、出土したかわらけ(308)から17世紀末~18世紀前半と考えられる。

#### 2. 溝状遺構

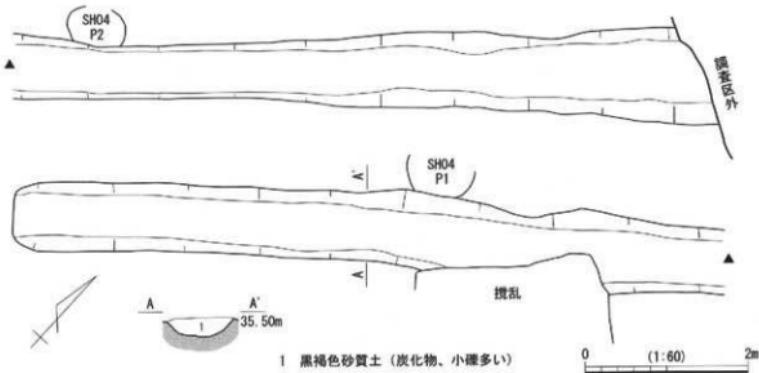
##### S D17 (第55・56図)

1区東側の中央を貫く直線的な溝状遺構である。主軸方向はN-50°-E、検出長17.0m、幅0.8~0.9m、断面形は皿状で、検出面から底面までの深さは0.2mである。後世の削平によりC-3グリッド杭付近で途切れているが、削平を受けてなければそこで収束するのではなく、引き続き南西側に延びていたと考えられる。北東側は調査区外へ続いている。埋土は炭化物・小砾を多く含んだ黒褐色砂質土で、出土遺物は少ない。

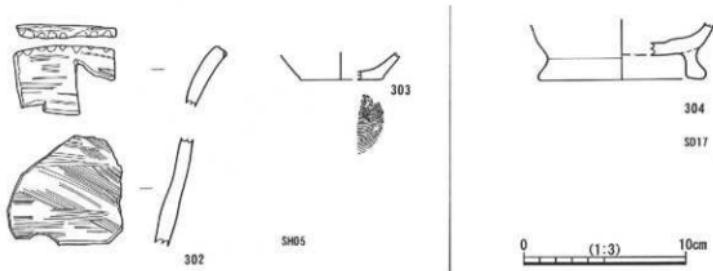
この遺構の時期は、埋土中から14世紀代の古瀬戸中期の皿(304)が出土したこと、重複しているSB01、SH04を切っていることから14世紀以降に属すると考えられる。その他の出土遺物には、須恵器や山茶碗の破片がある。



第54図 SH04・05



第55図 SD17



第56図 SH05・SD17出土土器

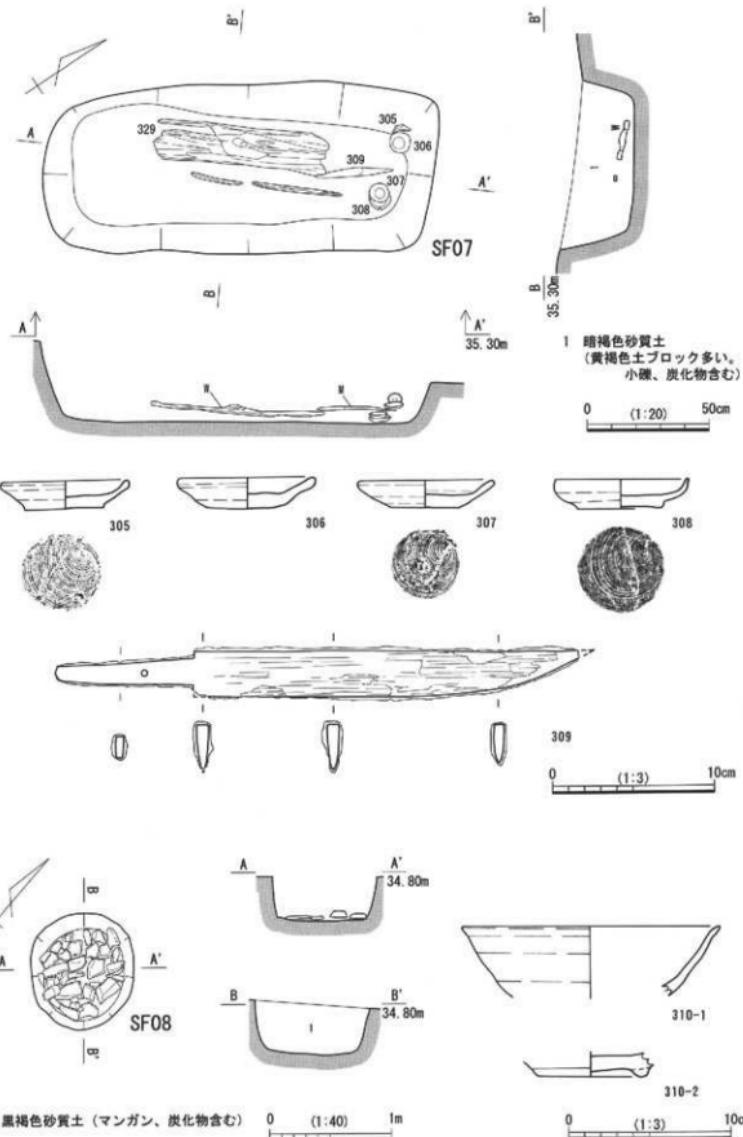
### 3. 土坑

#### S F07 (第57・62図)

1区、C-C2グリッド杭付近、前述した掘立柱建物跡の内側から検出された中世墓である。平面形はほぼ長方形で、規模は1.7m×0.7m、断面は逆台形を呈しており、底面はほぼ平坦に整えられている。検出面から底面までの深さは0.32mである。埋土は黄褐色土ブロック・炭化物・小礫を多く含む暗褐色砂質土である。

底には削板(329)を敷き、短刀1振と山茶碗小皿3枚、かわらけ1枚を副葬していた。小皿(305～307)は東遠窯の製品である。その特徴から河合修氏の編年(河合 2001)ではⅢ-1期と考えられる。308はロクロカワラケである。体部中位から直立気味に引き上げ口縁部に続く。306と307は内面が磨耗するが、305は未使用である。

短刀(309)は、残存長32.0cm、一部が欠損しているため、推定される長さ33.0cm、刃部幅3.2cm、茎部長8.5cm、刃部長24.5cmを測る。長さ30cm未満を短刀、40cmまでを小脇差という概念(小笠原 1995)に従えば、本例は小脇差である。全面を木質部が覆っているので、細部は不明であるが、目釘は1か所あり、平造である。切先は欠損しているが、その形状は刀剣鑑賞界でいう大切先である。切先は埋納以



第57図 SF07・08および出土遺物

前に欠損していたものと判断される。基部の形状は先端のとがった剣形を呈する。また、木質部には漆皮膜は認められず、鈎などの刀装具金具もない。外装をはずし、白木の鞘のまま埋納したのであろうか。この遺構の時期は出土土器から13世紀前半と考えられる。

#### S F08 (第57図)

1区、B・C-5グリッドから検出された土坑である。この遺構は、直径0.85mの円形のプランをもつ。断面は逆台形を呈しており、検出面から底面までの深さは0.34mである。埋土はマンガンや炭化物を多く含む黒褐色砂質土である。底部には河原石が一面に敷き詰められていた。遺構の性格は不明である。埋土から13世紀後半湖西窯製品の山茶碗片(310)が出土した。

表12 中・近世土坑一覧表

遺構名	グリッド	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備考
S F07	C-2	長方形	1.70	0.70	0.32	13世紀前半の中世墓
S F08	B・C-5	円形	0.85	0.85	0.34	遺構の性格不明(13世紀後半)

#### 4. 井戸状遺構

##### S E01 (第58・60図)

1区、B-2グリッドから検出された井戸である。直径1.8mの円形、検出面からの深さは0.8mである。SH04P1に切られている。埋土の上層から礫が多数出土しており、井戸の機能が停止した後、井戸の石組みを崩して埋められた可能性がある。埋土から須恵器片と山茶碗(311)が出土した。遺構の時期は12世紀中葉と考えられる。

##### S E02 (第58・60図)

1区、B-3グリッドから検出された井戸で、前述したSD01、SD03を切っている。直径1.3m、検出面からの深さは1.0mを測る。埋土からは山茶碗(312)、古瀬戸前期の壺(313)、青磁碗(314)、かわらけ(315)が出土した。この遺構の時期は出土土器から13世紀後半と考えられる。

##### S E03 (第58図)

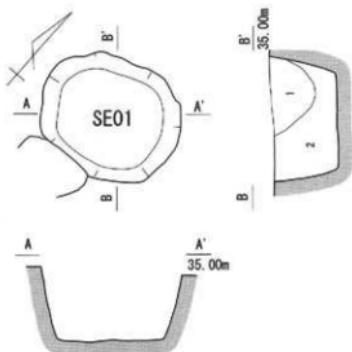
2区、C-9グリッド杭近くから検出された井戸状遺構である。SD07を切って掘られていた。出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

##### S E04 (第58図)

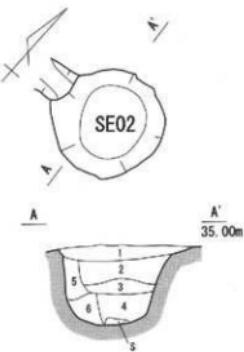
2区、B-C-9グリッドから検出された井戸状遺構である。直径2.0mのほぼ円形で、検出面からの深さは1.1mである。出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

##### S E05 (第58・60図)

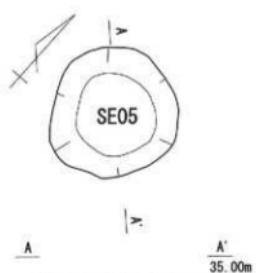
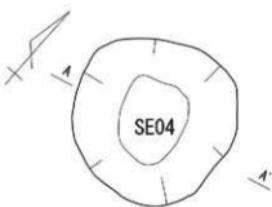
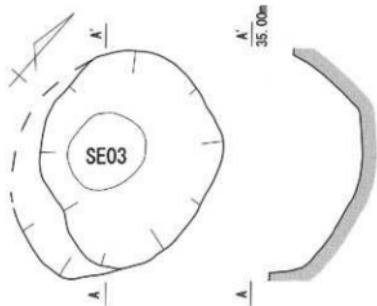
2区、B-8グリッドから検出された井戸状遺構である。直径1.6mのほぼ円形で、検出面からの深さは0.7mである。埋土からは壺鉢(316)、鉄軸を下地かけし、さらに灰釉をかけた筒形香炉(317)、かわらけ(318)が出土した。316の時期が17世紀であることから、この遺構の時期は17世紀末～18世紀前半と考えられる。



- 1 黒褐色砂質土 (礫を多く含む)  
2 黄褐色砂質土 (暗褐色土ブロック含む)



- 1 黒褐色砂質土 (小礫多い)  
2 黒褐色粘質土 (マンガン多い)  
3 暗灰色粘土 (マンガン多い)  
4 黑褐色粘質土 (小礫多い)  
5 黑褐色粘質土 (マンガン、黄褐色土ブロック多い)  
6 黑褐色粘質土 (灰色土ブロック多い)



- 1 黒褐色砂質土 (マンガン、礫多い)  
2 暗灰色砂質土 (黄褐色土ブロック含む)  
3 暗褐色粘質土 (暗緑色土多い)

- 1 暗灰色砂質土 (小礫、マンガン多い。  
黄褐色土ブロック含む)  
2 暗褐色砂質土 (小礫多い)  
3 黒褐色砂質土 (マンガン多い)  
4 黑褐色粘質土 (マンガン、黄褐色土ブロック多い)  
5 青灰色粘質土

0 (1:60) 2m

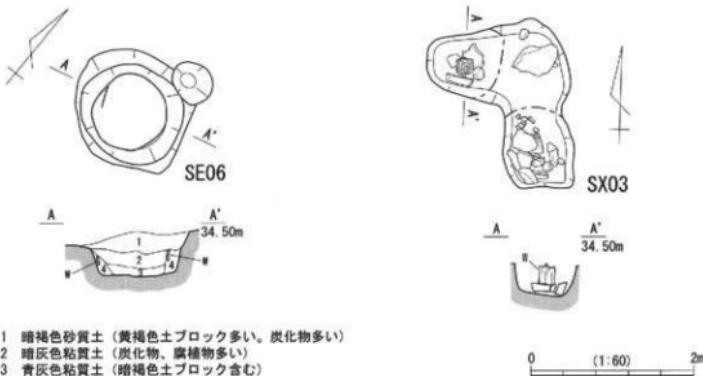
第58図 S E01～05

### S E06 (第59図)

3区、B-12グリッドから検出された井戸状遺構である。直径1.4mのほぼ円形で、検出面からの深さは0.6mである。井戸の形が崩れないように竹枠で補強していた。この遺構の時期は出土した寛永通寶から18世紀以降と考えられる。

表13 中・近世井戸状遺構一覧表

遺構名	グリッド	時期	最大径(m)	深さ(m)	備考
S E01	B-2	12世紀中葉	1.8	0.8	上層に礫多数
S E02	B-3	13世紀後半	1.3	1.0	
S E03	B・C-8・9	不明	2.7	1.1	上層に礫多数
S E04	B・C-9	不明	2.0	1.1	出土遺物なし
S E05	B-8	17世紀末～18世紀前半	1.6	0.7	
S E06	B-12	18世紀以降	1.4	0.6	寛永通寶出土

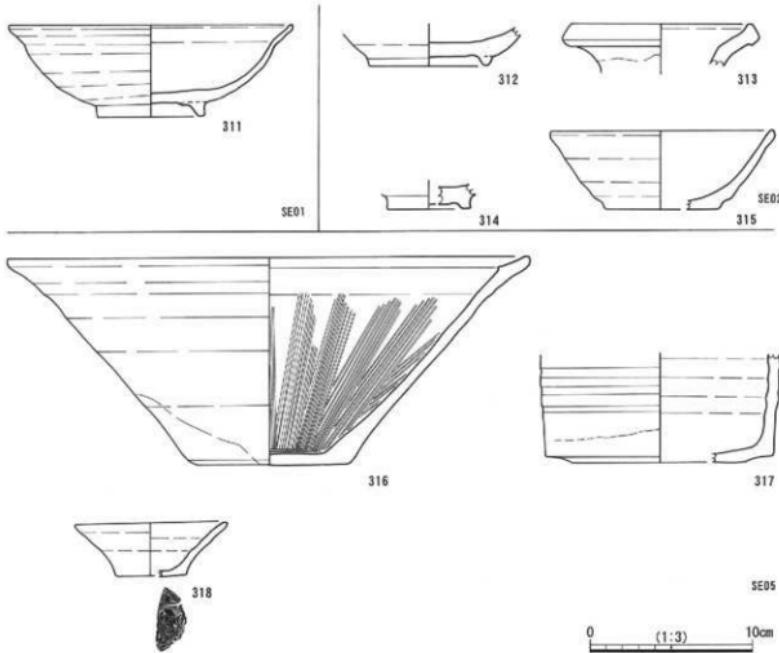


第59図 S E06・S X03

### 5. 不明遺構

#### S X03 (第59図)

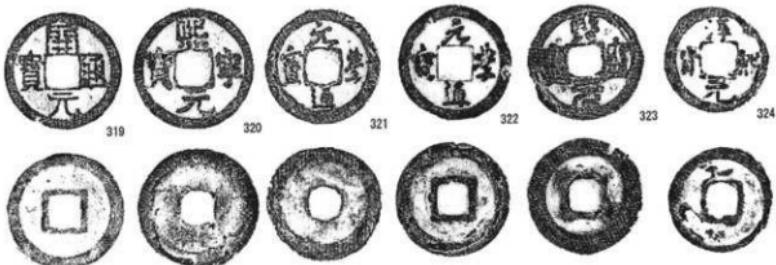
3区、B-12グリッドから検出された遺構である。四角に面取りされた柱を平らな石の上に置き、柱を固定するため周りに石を配置したピット、大小様々な礫があるピット、60cmもある大きな石を置いたピットがある。それぞれ、掘立柱建物跡の柱穴と思われるが、詳細は不明である。



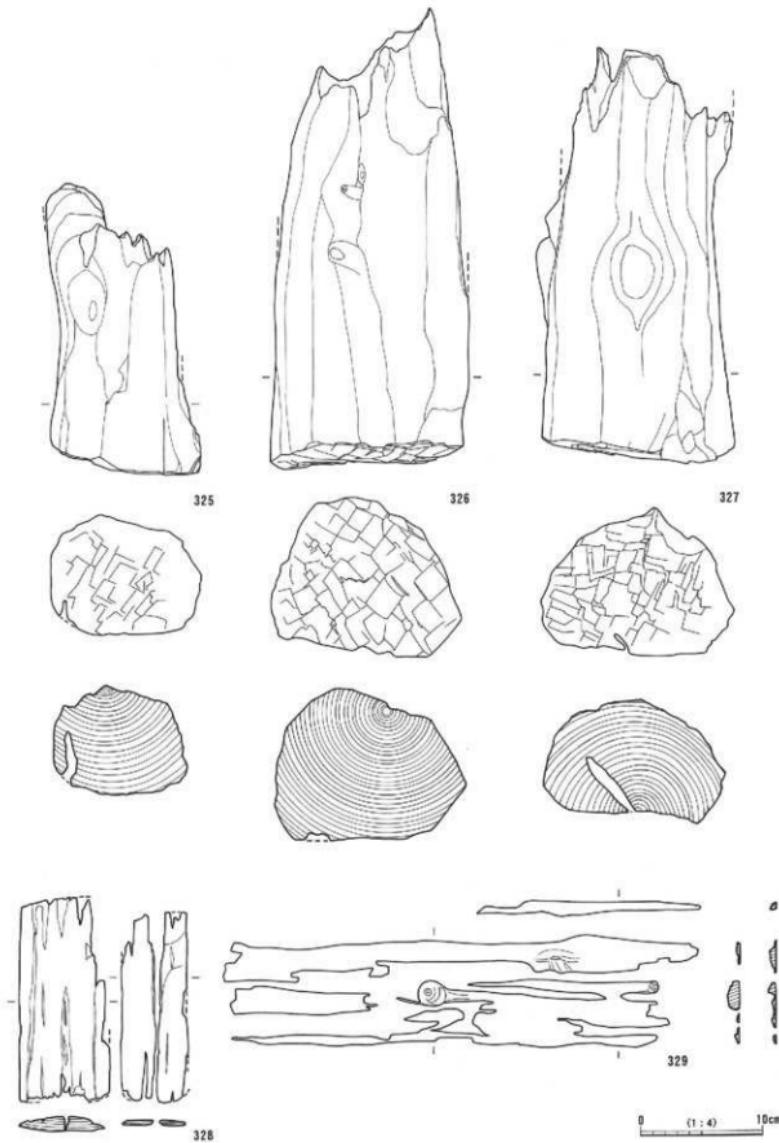
第60図 S E 01・02・05出土土器

#### 6. 遺構外の遺物（第61図）

C-9グリッドの表土から6枚重なった状態で銭貨（319～324）が出土した。周辺に土坑墓らしき遺構は確認できなかったが、中世墓に伴う六道錢であろう。319は唐錢の「開元通寶」、320と323は北宋錢の「熙寧元寶」、321と322は北宋錢の「元豐通寶」、324は南宋錢の「淳熙元寶」で、縁を削っている。



第61図 遺構外出土遺物



第62図 木製品実測図

表14 遺物観察表（山茶碗・陶磁器・土師質土器）

番号	押図番号	写真図版番号	遺構	種別	器種	産地	色調	法量(cm)		備考
								口径	底径・高台径	
303	56	S H5P 1	土師質土器	かわらけ			浅黄橙色	(5.0)		17世紀末～18世紀前半
304	56	S D17	陶器	皿	瀬戸		淡黄色	(10.4)		古瀬戸中期
305	57	30	S F07	山茶碗	小皿	東遠江	灰色	7.6	4.6	1.9
306	57	30	S F07	山茶碗	小皿	東遠江	灰白色	8.3	4.0	1.8
307	57	30	S F07	山茶碗	小皿	東遠江	灰色	8.1	4.3	1.8
308	57	30	S F07	土師質土器	かわらけ		灰黃褐色	8.2	5.2	1.8
310	57		S F08	山茶碗	碗	瀬戸	灰白色	(15.8)	(6.6)	13世紀後半
311	60	29	S E01	山茶碗	碗	東遠江	黄灰色	17.4	6.6	5.7
312	60		S E02	山茶碗	碗	瀬戸	灰白色		7.4	13世紀末
313	60		S E02	陶器	壺	瀬戸	灰白色	(11.0)		古瀬戸前期
314	60		S E02	青磁	碗		灰白色	(5.0)		
315	60	29	S E02	土師質土器	かわらけ		にぶい黄橙色	(13.6)	(7.0)	4.8
316	60		S E05	陶器	擂鉢	志戸呂	にぶい橙色	(32.0)	(9.0)	12.6
317	60		S E05	陶器	筒形香炉	志戸呂	にぶい褐色		(10.6)	
318	60		S E05	土師質土器	かわらけ		浅黄橙色	(9.4)	(4.4)	3.2

表15 遺物観察表（鉄製品）

番号	押図番号	写真図版番号	遺構	種類	長さ(cm)	幅(cm)	最大厚(cm)	備考
309	57	30	S F07	短刀	32.0	3.2	0.8	鞘残存

表16 遺物観察表（錢貨）

番号	押図番号	写真図版番号	遺構・層位	銭名	国名	初鑄年	書体	法量			備考
								直径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
319	61	31	表土	開元通寶	唐	621		2.42	0.11	2.74	
320	61	31	表土	熙寧元寶	北宋	1068	真書	2.50	0.15	4.26	
321	61	31	表土	元豐通寶	北宋	1078	行書	2.42	0.13	3.40	
322	61	31	表土	元豐通寶	北宋	1078	行書	2.39	0.13	2.55	
323	61	31	表土	熙寧元寶	北宋	1068	篆書	2.40	0.12	3.03	
324	61	31	表土	淳熙元寶	南宋	1174	真書	2.20	0.10	2.37	縁を削っている
			S E06	寛永通寶				2.27	0.10	1.93	

表17 遺物観察表（木製品）

番号	押図番号	写真図版番号	遺構・層位	種別	樹種	法量(cm)			備考
						長さ	幅・直径	厚さ	
325	62	31	S H04P 1	柱根	ヒノキ	48.1	24.4		
326	62	31	S H04P 4	柱根	ヒノキ	76.1	31.6		
327	62	31	S H04P 2	柱根	ヒノキ	68.0	31.8		
328	62	31	S H04P 3	檻板	マツ	34.0	25.8	2.4	
			S H05P 1	柱根	マツ	86.0	34.0		樹皮のみ
329	62		S F07	底板	マツ	78.5	24.8	2.0	

## 第V章 まとめ

### 第1節 石畳I遺跡における弥生集落

#### 1. 出土土器について

第IV章第2節で述べたように出土した弥生土器はほとんどが菊川様式古～中段階に属するものであつた。そしてその内の9割は古段階の土器であり、出土量が多く残りも良いため、当該期の土器変遷を考える上で重要な資料となり得る。そこで第IV章で述べた出土土器の特徴を基にして太田川・原野谷川流域の遺跡との比較を試みた。特に、古段階の土器は壺や甕の形態などで幾つかの違いが指摘でき、白岩様式の要素が残る段階と菊川様式が確立する段階の二つに分けることが可能であると判断した。表9に土器の時期的対応関係を示した。

#### ＜弥生Ia期＞

S D07の西端（第15図B B'周辺）からまとめて出土した土器とS D09出土土器が相当する。146・172・174・175・177・212・214・232・233・236などが典型的な例である。壺の口縁部はあまり外に開かず、細長い頸部をもち、肩は張らない。甕の胴部はあまり丸みを帯びず縱長となり、172のように胴部に明瞭な稜をもつものもみられる。また、172・175のように断面がV字形のはっきりした刻みを施す甕が多い。この他に212や214のような大型の鉢が存在する。これらは白岩様式にみられる要素を含んでおり、時期的には後期初頭に位置づけられる。

#### ＜弥生Ib期＞

出土土器の8割がこの段階に含まれる。Ia期に比べて、壺の頸部は短くなり、口縁部が大きく外反するものが多くなる。甕の胴部は球脛化の傾向が認められ、胴部最大径が胴部上半にあり、頸部は緩やかに屈曲する。高环にはあまり変化がみられないが、鉢は小型品が多くなる。

Ib期の土器は一般的に定義されている菊川様式古段階の特徴をもつ。特にS D08出土土器はその出土状態からほぼ同時期に廃棄されていると考えられ、非常に一括性が高い。225や226のように変わった形態の高环と台付鉢などの共伴関係は菊川式土器の研究において貴重な事例となろう。

#### ＜弥生II期＞

S D11、S F01出土土器が相当する。ただし、S D11出土土器は伊場様式の影響を受けている土器が多く、典型的な菊川式土器は少ない。

以上のように出土土器の時期区分が可能であるが、Ia期とIb期の区分は白岩様式の要素の有無によるものであり、明瞭な土器の変化が認められるわけではない。I期の土器を二つに分けたのは、環濠の埋め戻しと再掘削の過程と時期差、および白岩様式から菊川様式への変遷の流れを明らかにしたかったためである。白岩様式から菊川様式への流れは上述のように器種ごとに漸移的に変化していく傾向がみられ、高环にはあまり変化が認められなかった。これは從来から述べられているように（荻野谷、2000）、白岩様式から菊川様式への明瞭な区分の難しさを示している。その意味ではIa期は白岩様式と菊川様式の過渡期と位置づけることができる。

ここで石畳I遺跡出土土器の特徴についてまとめておこう。時期区分は上述の通りであり、ほとんどの土器が弥生時代後期前葉（菊川様式古段階）に属する。この土器群と他の遺跡との対応関係については表9の通りであり、特に袋井市鶴松遺跡、浅羽町十二所遺跡出土土器と形態や文様、器種構成などで類似点が多い。よって、石畳I遺跡出土土器は太田川・原野谷川流域の菊川様式の特徴をもっていると言えるだろう。ただし、既に述べたように伊場様式の影響をうけた土器も少数ではあるが存在している。搬入・模倣土器をみると西遠江から搬入されたものや、同じ菊川様式圏内でもより西遠江に近い天竜川、

太田川流域から搬入された土器があり、各流域の集落との交流関係を示している。

## 2. 環濠の種類と機能

石畠Ⅰ遺跡では S D01~04、S D06・07のように同じ場所に何度も掘られる環濠と、S D05のように規模が大きく、埋め戻しなどが行われていない環濠の二種類が認められる。ここでそれぞれの環濠の関係と機能についてまとめておく。

S D01~04は、1条の溝を一回の掘り直しと数えれば、3回掘り直されていることになる。それぞれの形状はやや異なるが、底面はほぼ同じ高さで統一されている。S D06・07も同様に掘り直しによるものと解釈でき、特にS D07は東側と西側からの出土土器に若干の時期差があることや、土層断面で少なくとも3つの埋土の切り合い関係が確認できることから、少なくとも部分的に2回は再掘削を行っていると考えられる。S D07西端から出土した土器がI a期であり、B B'付近の底面は特に凹凸がみられることから、この周辺は環濠の形成期から土器廃棄や再掘削を繰り返していたのであろう。

このS D01~04とS D06・07は位置関係、埋め戻しや再掘削などで共通点が多く、出土土器の時期から判断して同一時期に存在していたと考えられる。S D06・07が収束しており、S D01~04との位置関係を考慮に入れるとS D06・07の東側が環濠の開口部となる可能性が高い。また、S D08は環濠とはしなかったが、重複している環濠と時期が同じであることや埋土の状態から判断して環濠に伴う遺構であろう。この場合、S D06との関係が重要であり、S D06と同一時期に存在していたとすると、環濠の開口部となり断続的な環濠の一部を形成していたと考えられる。

では、これらの環濠はそれぞれどのような機能・役割を持っていたのであろうか。環濠の機能については既に様々な提示が為されているが、ここでは久世氏が述べている「防衛的機能」と「内部凝集的機能」(久世 2004)という二面性を基に検討する。環濠はこの2つの機能を併せもち、どちらがより大きい割合を占めていたかによって環濠の規模や形状、埋没状態などに違いが表れると考えられる。

まず「防衛的機能」とは外敵や害獣、自然災害などから身を守るために環濠の実質的な機能を指す。外敵や害獣からの防御のために、環濠にはある程度の深さと幅が必要である。また、集落への用排水、洪水などの自然災害からの防衛においても流水させる必要があるため、河川に接続していたり、環濠の底面が一定を保っていることなどが条件となろう。

「内部凝集的機能」とは「物理的な障害によって内部の拡散を妨げ求心性を高める」(久世 2004)ことを指し、また、寺沢氏の指摘(寺沢 1999)のように、環濠の掘削という共同作業と環濠によって外部と区画されることによる集団意識の高揚と精神的結束力の強化という効果があると考えられる。

S D01~04、S D06・07は既述のように埋め戻しと掘削、土器などの廃棄を繰り返しており、その幅や深さも一定していないことなどから「防衛的機能」の割合は低かったことが推定できる。また、環濠の内外に同時期の遺構が存在することを考えても集落の区画に機能の重点が置かれていたと考えられる。

それに対しS D05は幅や深さも大きく、場所をずらしての再掘削も行われていない。下層の遺物量も極端に少なく、底面の標高もほとんど変化がない。後述するが環濠の内側からのみ遺構が検出されている。検出長が短いため断定はできないが、このような溝が集落を囲っていれば、「防衛的機能」は十分にあったと言えよう。

このように石畠Ⅰ遺跡の環濠はそれぞれの主要な役割が異なっていたと考えられる。それは東遠江の他の環濠集落でも同様であり、鶴松遺跡や堀越ジョウヤマ遺跡、石畠Ⅰ遺跡S D01~04、06・07のようにその内外に遺構が確認できる遺跡と、原新田遺跡、領家遺跡、石畠Ⅰ遺跡S D05の環濠のようにその内側にのみ遺構が検出される遺跡では、その環濠の役割が異なることは明らかである。これらの環濠と石畠Ⅰ遺跡の環濠の時期を比較すると前者が後期前半、後者が後期後半に位置づけられる。これにより、

環濠の主要な機能が時期によって異なると判断することもできるが、低地と丘陵、近隣集落との関係などの立地的条件によるものとの判断も可能であり、ここではその可能性を指摘するに留める。

### 3. 弥生集落の変遷

既に述べたように出土土器の検討から石烟Ⅰ遺跡の弥生集落は二時期に分けることが可能である。表9に示したように弥生Ⅰ期（菊川様式古段階）と弥生Ⅱ期（菊川様式中～新段階）の遺構に区分できる。弥生土器の中では、Ⅰ期をさらに細分できるが、前述のようにあまり時期差が明確ではないことや環濠の埋没過程を復元するための細分であることから第63図では二時期での区分とした。

#### ＜弥生Ⅰ期＞

検出された遺構は竪穴住居跡、掘立柱建物、環濠、溝状遺構、土坑である。S B03～05、S H01・02からは時期が特定できる土器は出土していないが、位置関係や周辺遺構との重複関係から考えてⅠ期の遺構と判断した。Ⅰ期の遺構は1・2区からのみ検出されており、2区西半分で遺構密度が高く、3区では検出されていない。環濠の行方がはっきりしないが、3区はすでに集落外の可能性がある。環濠はS D01～04、S D06・07のどちらも数回にわたって埋め戻しや掘削が行われており、位置関係、規模、出土土器から判断して同一時期に存在し、環濠の開口部を形成していたと考えられる。ただし、極一部の検出のため、ここでは愛知県阿弥陀寺遺跡の環濠の事例（愛知県埋蔵文化財センター 1990）からこのように推測してみた。周辺の竪穴住居跡や掘立柱建物が重複していることから、Ⅰ期ではある程度の期間、同一の場所に集落が維持されていたと考えられる。また、白岩様式の土器がほとんど無く、出土土器でI a期とした土器が環濠の底面付近から出土していることから、集落の開始時期は後期初頭であり、環濠も集落の始まりとともに掘削されたのであろう。

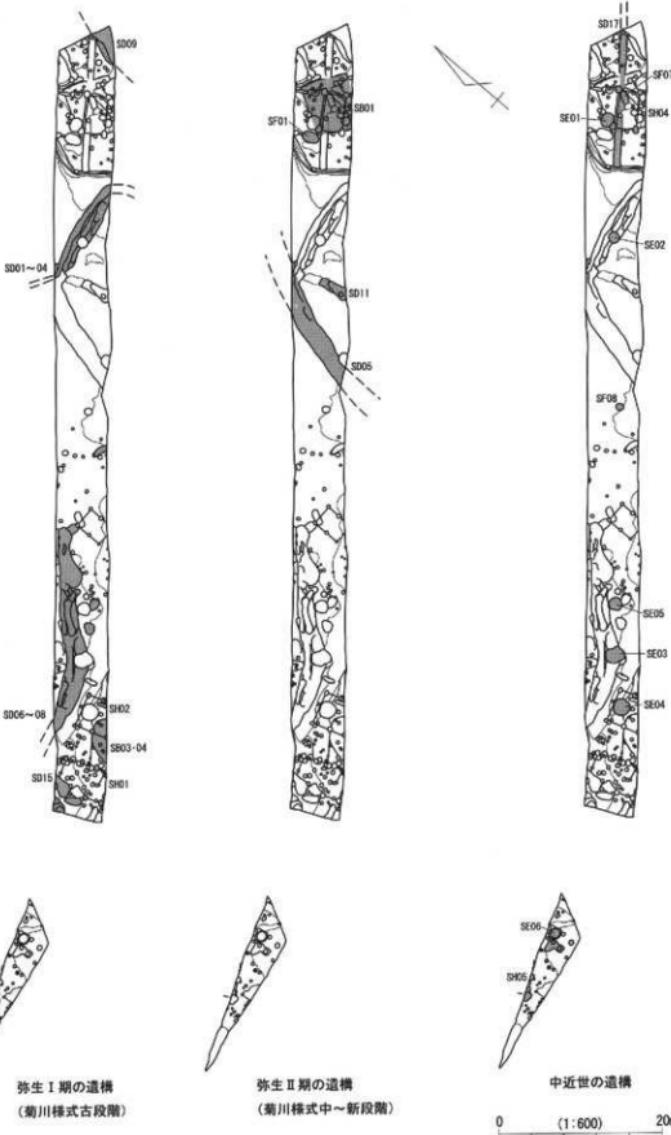
今回は集落の極一部分を調査したに過ぎず、Ⅰ期の集落の主体部分が環濠のどちら側かという重要な問題についてははっきりとした答えは導き出せない。ただし、Ⅰ期の遺構が環濠の南側に多いことや環濠が微高地の縁辺に沿って掘られていることから判断して、微高地側（環濠の南側）に集落の主体部分を推定しておく。遺跡のつながりから当遺跡の南隣の石烟Ⅱ遺跡、川久保遺跡が集落の主体部分となるのではないだろうか。

#### ＜弥生Ⅱ期＞

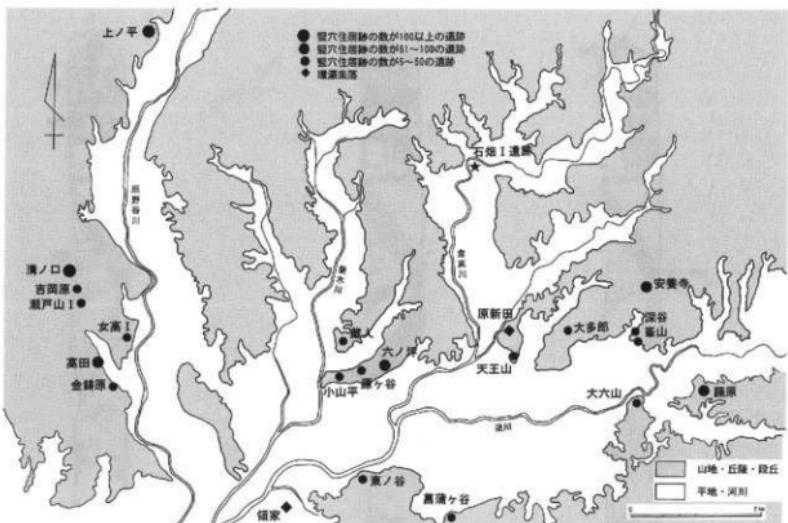
検出された遺構は環濠、溝状遺構、土坑である。S B01は出土遺物が少ないので時期が確定できないが、住居の形態や周辺遺構の重複関係から判断してⅡ期に含めた。ただし、周辺からはⅠ期の土器が出土していることから、Ⅰ期から継続している可能性もある。S D05も下層からの土器が少ないので確定な時期決定ができないが、後期末の段階では中層まで埋没していたと考えられる。

Ⅱ期の遺構はⅠ期に比べて若干の時期差がある可能性もあり、図示した遺構の全てが同一時期とは限らない。ただし、Ⅱ期の全ての遺構が1区東側でのみ検出されていることから、集落の主体部分は環濠より東側になり、丘陵末端部からのびる微高地にⅡ期においても集落が営まれていたと考えられる。

以上のように石烟Ⅰ遺跡ではⅡ期に集落の位置が丘陵側に移動していることが指摘できる。また、Ⅰ期では環濠の内外に遺構があるに対し、Ⅱ期では環濠の外側（西側）には遺構が検出されていない。この集落の変遷については、既に述べたように環濠の機能がⅠ期に比べてⅡ期の方が「防衛的」になつたことと無関係ではないだろう。その原因については推測するしかないが、集落の位置が丘陵側に移動していることなどから、自然的要因を挙げておきたい。Ⅰ期とⅡ期の間で集落をより高地に移動しなければならなくなつたということであり、河川の氾濫によって低地の居住可能区域が減少したことなどが考えられよう。



第63図 石畠Ⅰ遺跡遺構変遷図



第64図 原野谷川・逆川流域における弥生時代後期の集落

最後に石畠I遺跡近隣の原野谷川・逆川流域の後期集落の動向と比較しながら、集落の変遷と性格について考えてみたい。弥生I期では確実な集落遺跡は女高I遺跡、石畠I遺跡のみであり、この時期の集落は極少数である。ただし、第64図に示した竪穴住居跡の数が50以上の遺跡では住居跡が重複関係にあり、集落内である程度の時期差が想定できる。よってI期から継続して居住している可能性も考えられるため、現在分かっている以上にI期から集落が存在していたかもしれない。石畠I遺跡では集落形成期から環濠が掘削され、住居などの建て替えや環濠の掘り直しが頻繁に行われている。

弥生II期になると原野谷川・逆川流域では第64図のようにそのほとんどが丘陵もしくは段丘上に集落を形成する。そのような中で石畠I遺跡の集落はI期、II期と継続して低地に集落を形成しているが、当遺跡のように後期初頭から継続的に低地に集落が営まれる例はほとんどみられない。同じ菊川様式圏内の太田川、菊川流域では平野が発達しており、低地にも居住域が認められることと比較すれば、原野谷川・逆川流域の居住可能区域が自然的要因によって制限されていたことが窺える。そのような中で当遺跡周辺は平野が比較的広く、河川も小規模であるため居住可能であったと考えられる。

集落の性格については、拠点・周辺集落もしくは母集団・小集団といった集落モデルを基にして検討する必要があるが、これらの定義は明確ではないものも多い。ここでこれらの定義について詳しく論じることはできないが、①集落の継続期間、②遺構の数と重複関係、③遺物の出土量とその性格、④環濠や区画溝、特殊な遺構の有無などが分類の要素としてあげられよう。第64図の遺跡の全てのデータが分かっていないので、ここでは②と④に着目して分類すると、溝ノ口、領家、原新田、安養寺、踊原、六ノ坪遺跡などが拠点集落、その周辺の小規模な遺跡が周辺集落という小地域単位の拠点・周辺集落の組み合わせが可能であろう。そうした中でI期、II期を通して環濠集落が営まれ、他地域との交流を示す土器も出土しているなど石畠I遺跡は倉真川流域において拠点的な集落であった可能性が高く、地域間交流の中心的役割を担っていたと考えられる。

## 第2節 石畠I遺跡周辺の中世宗教

石畠I遺跡の調査では、鎌倉時代前期の土坑墓とそれを取り囲むように、仏堂や神社と推定される建物跡が発見された。今回の調査内容では、確実に両者が同時期とはいえないものの、いずれも13~14世紀の遺構と考えられる。さらに、この遺構周辺に同時期の遺構は認められなかったことから、両者が偶然重複したというよりも、何らかの必然性があると考えられる。すると、この建物跡は土坑墓のための建物=墳墓堂と推定することも可能であろう。平安末期から鎌倉期の土坑墓は掛川市内でも数例知られているが、建物を伴った例は、今のところ知られていない。

このような中世墓は遠江では12世紀前半の白磁碗を伴う例が古く、碧田市一の谷墳墓群のように集中していない。石畠の例も土葬ながらも小脇差や小皿を副葬し、丁寧に供養されたことを示していた。この供養とは、仏式による供養と考えられる。こうしたことから被葬者は、村落内でも限られた階層の墓であると考えられる。

ところで莊園公領制のこの時代、石畠周辺はどのような領域で、どのような宗教環境であったのであるか。その手がかりとして、いくつかの文書史料や金石資料があり、ここではそれを中心に考えてみたい。

江戸時代、石畠は上西郷村に属していた。この近世の上西郷村は、今の法泉寺のある瀬の谷から国道一号線掛川バイパス西郷ICのある小市あたりまでと、きわめて広い村であった。石畠のようないくつかの自然村を含み、「掛川誌稿」記載によると（註1）、村高二千百十五石、四人庄屋制であった。なお自然村にはそれぞれ小字があって、「みな某村と呼ぶ」とあり、石畠も石畠村と呼ばれていた。近世の上西郷村は、なぜこのような広い村であったのかを示す史料はなく、特異な村切りによる近世村である。推定の域を出ないが、おそらく中世の上西郷荘という単位に基づいたものと推定されるが、なぜそうなつたかは不明である。

なお西郷荘（上西郷荘）は院政期に三代御起請地として成立し、その後、高野山宝塔三昧院料と山科家料となっていた。「足利尊氏・直義所領目録」に下西郷とあり（掛川市史編纂委員会 1997）、西郷荘とはもともと上西郷の範囲かもしれない。

ところで、今回の調査で発見された建物は、仏堂や神社と推定されるものであった。この位置からは栗ヶ岳（別名 無間山）が見える。この栗ヶ岳は、山頂に岩座があり、古くから信仰の対象とされていた。この栗ヶ岳については、式内社阿波神社の記載から、阿波神を祭神とする意見もあるが、江戸時代の地誌『掛川誌稿』は、栗の神を祭しものとし、同時に山頂の観音堂の存在から、本地仏を觀音とした。

石畠に隣接する五明では粟宮の存在が『掛川誌稿』に記載されている。石畠以北では水田可耕地は少なく、この地域の中・近世集落を考えると、中山間部への進出は畑作を考えざるをえない。『掛川誌稿』の栗ヶ岳の祭神を栗の神、また本地仏を觀音とする見解に賛成したい。

さらに五明の粟宮の存在から、石畠周辺についても水田ばかりではなく、稗・粟など畑作を考慮すべきであり、それゆえこの地が、畑作を意識した石畠という字（あざな）で呼ばれたもの、と考えられる。

中世の上西郷荘の銘のある雲板が、碧田市見付の慈恩寺にある。銘文は以下の通りである。

遠江國上西郷庄滝泉禪寺長板（右）

于時応永廿六年亥年南呂念七日誌之 住持 比丘明通（左）

もともとの奉納先の滝泉寺は、今の法泉寺とされる。法泉寺はもともと雄滝、雌滝によって寺名としたというから、滝泉寺の方が直裁的であり、前身の寺名にふさわしい。なお今の法泉寺は曹洞宗であり、前身の寺院も禅寺との銘から曹洞宗か臨済宗であった。寺伝によると、開山は春屋宗能であり、この地

を春屋がおとすれた際、草庵にいた老尼（最乗寺の護法神の化身）と問答を交わした。そののち春屋は、この地を拠点に布教したという。この春屋は曹洞宗では通幻寂雲からはじまる通幻派の法流であり、師匠は大綱明宗であるといわれている。この通幻派は遠江では珍しい。

曹洞宗は遠江の仏教界でもっとも精力的に布教活動を行ってきた。なかでも如仲天闇の大源派と呼ばれる法流が大半を占める。如仲は森町の飯田崇信寺と大洞院を開き、そこを拠点として、多くの弟子とその流れをくむ孫弟子達が、子寺、孫寺を開き（鈴木泰山 1942）、教縁を拡大している。

上西郷庄滝泉寺長板（雲板の異名）は、全長45cmを測り、応永26（1419）年と古い。法泉寺の開山は通幻派の春屋宗能と伝えられるが、それ以前にも雲板をもつにふさわしい、滝泉寺という禅寺があつたことも、中世の上西郷を考える上で注目すべき点であろう。

上西郷村北袋に今は廢寺となっている法泉寺の末寺観音寺があった。この観音寺は一寧一山開基と伝わっている（『掛川誌稿』）。この一寧は浙江省出身で臨済宗の僧侶であり、太宰府に着いた後、一時鎌倉幕府にとらえられ、その後、建長寺や円覚寺に転じ、最後は文保元（1317）年、南禅寺にて示寂した（禅学大辞典編纂所 1978）。その供養塔と伝わるもののが観音寺墓地内にある。この供養塔は五輪塔と宝篋印塔を寄せ集めたものであるが、五輪塔の地輪の部分に貞和2（1346）年の銘がある。もとより史実とは異なるが、在銘地輪と大型の宝篋印塔の部材はこの地域では極めて少ない。また、観音寺は通幻派盛庵和尚によって再興された、と伝わっている。中世後期の石塔は上西郷ではもっとも集中しているが、組み合わせが異なっており、原形をとどめていない。したがって寺院墓地が成立する際集められたものと理解できるが、それでも中世のある時期まで、観音寺は上西郷地域の中で、最も有力な寺院であり、さらに掛川周辺の禅宗寺院でも同様の寺格を有したものと考えられる。

石畑I遺跡周辺における宗教環境を語る上で、きわめて早い禅宗勢力の布教活動は注目してよいであろう。

註1 『掛川誌稿』は、名著出版活字本による。



写真3 上西郷庄銘の雲板



写真4 伝一寧一山供養塔

## 引用・参考文献

### 論文

- 浅井和宏 1986 「〈宮廷式土器〉について」『欠山式土器とその前後』第3回東海埋蔵文化財研究会  
足立順司 1994 「消費地出土の初山・志戸呂焼—原川遺跡を中心に—」『地域と考古学』  
石黒立人 1986 「弥生時代尾張地方の〈団郭集落〉について」  
『年報 昭和60年度 愛知県埋蔵文化財センター』  
岩本 貴 1995 「菊川式土器における編年上の問題」『10周年記念論文集』静岡県埋蔵文化財調査研究所  
岩本 貴 1997 「鶴松遺跡出土土器について」『研究紀要』第5号 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
岩本 貴 1998 「袋井市小山角田遺跡出土の菊川式土器について」『静岡県考古学研究』第30号  
小笠原信夫 1995 「日本刀の鑑賞基礎知識」至文堂  
萩野谷正宏 2000 「「白岩式土器」の再検討」『転機』7号  
河合 修 2001 「青灰色のうつわ—猿原郡金谷町横岡字釜谷の灰釉系陶器について—」『研究紀要』第8号  
静岡県埋蔵文化財調査研究所  
菊川式土器研究会 1998 『第1回菊川式土器研究会資料集』  
久世辰男 2004 「環濠と土墻—その構造と機能—」『考古学ジャーナル』511  
佐藤山紀男・萩野谷正宏・藤原和大 2002 「遠江・駿河」「弥生土器の様式と編年 東海編」木耳社  
静岡県考古学会 2002 『静岡県における弥生時代集落の変遷』  
柴田 稔 1983 「中遠地区の弥生後期の土器」「弥生後期の集団関係」静岡県考古学会シンポジウム  
柴田 稔・白澤 崇・岩本 貴 1997 「古浅羽川流域の弥生後期の土器編年」『浅羽町史 資料編I』  
鈴木泰山 1942 「傳宗の地方發展」  
鈴木敏則 1983 「二之宮式土器について」『森町考古』18号  
鈴木敏則 1985 「弥生時代～古墳時代前期の土器」「三沢西原遺跡」菊川町教育委員会  
鈴木敏則 1996 「遠江・駿河（後期）」「YAY！」弥生土器を語る会  
鈴木敏則 2001 「三河・遠江系土器の移動とその背景」「弥生後期のヒトの移動」西相模考古学研究会  
辰巳 均 1982 「弥生土器の概述」「伊場遺跡遺物編3」  
坪井清足 1958 「弥生式土器と土師器」「世界陶磁全集」1  
寺沢 薫 1999 「環濠集落の系譜」「古代学研究」146 古代学研究会  
中嶋郁夫 1985 「弥生土器から土師器への画期 遠江を中心にして」「古墳時代の土師器」静岡県考古学会  
中嶋郁夫 1988 「いわゆる「菊川式」と「飯田式」の再検討」『転機』2号  
中嶋郁夫 1991 「東遠江における後期弥生土器編年と土器移動」  
『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』  
中嶋郁夫 1993 「東海地方東部における後期弥生土器の「移動」・「模倣」—「菊川様式」編—」  
『転機』4号  
中間研志 1990 「環濠集落の構造」「季刊考古学」31号  
瀬宜田佳男 1990 「環濠集落と環濠の規模」「季刊考古学」31号  
平野吾郎 1986 「東海地方における弥生時代の石器について」  
『研究紀要』I 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
松井一明 1988a 「静岡県における団郭集落と高地性集落について」『マージナル』8号 愛知考古学談話会  
松井一明 1988b 「静岡県」「弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題」埋蔵文化財研究会  
松井一明 1995 「弥生時代の石鏡について（上）」「弥生文化博物館研究報告」第4集  
松井一明 2001 「東西弥生集落の交差点—東海地方の弥生集落—」「弥生時代の集落」学生社  
宮健矩司 1990 「環濠集落の地域性 東海地方」「季刊考古学」31号  
森岡秀人 1993 「土器移動の諸類型とその意味」『転機』4号

報告書

愛知県埋蔵文化財センター	1990	「阿弥陀寺遺跡」
磐田市教育委員会	1981	『御殿・二之宮遺跡発掘調査報告Ⅰ』
小笠町教育委員会	2001	『川田・東原田遺跡』
掛川市教育委員会	1968	『掛川市天王山遺跡発掘調査報告書』
掛川市教育委員会	1972	『国道一号线掛川バイパス建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
掛川市教育委員会	1982	『金鉢原遺跡』
掛川市教育委員会	1996	『女高Ⅰ遺跡発掘調査概報』
掛川市教育委員会	2000	『満ノ口遺跡』
菊川市教育委員会	1985	『三沢西原遺跡』
菊川市教育委員会	1986	『耳川遺跡(Ⅱ)』
静岡県埋蔵文化財調査研究所	1992	『向畠遺跡・社宮寺遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査研究所	1997	『小笠山総合運動公園内遺跡群』
静岡県埋蔵文化財調査研究所	2001	『領家遺跡Ⅱ・梅橋古墳』
静岡県埋蔵文化財調査研究所	2001	『菖蒲ヶ谷遺跡・山ノ口古墳群』
袋井市教育委員会	1981	『袋井市一色前田遺跡』
袋井市教育委員会	1985	『土橋遺跡—基礎資料編—』
袋井市教育委員会	1987	『鶴松遺跡Ⅱ』
袋井市教育委員会	1991	『袋井市鶴田Ⅱ遺跡』
袋井市教育委員会	1991	『堀越ジョウヤマ遺跡発掘調査報告書』
袋井市教育委員会	1998	『鶴松遺跡IX』
掛川市教育委員会	1981	『掛川市遺跡地名表』
掛川市教育委員会	1982	『掛川市遺跡地図』
掛川市教育委員会	1984	『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ』
掛川市教育委員会	1984	『掛川市遺跡分布調査報告Ⅱ』
掛川市史編纂委員会	1997	『掛川市史 上巻』
掛川市史編纂委員会	2000	『掛川市史 資料編 古代・中世』
静岡県教育委員会	1989	『静岡県文化財地図Ⅱ—焼津市以西—』
静岡県教育委員会	1989	『静岡県文化財地名表Ⅱ—焼津市以西—』
禅学大辞典編纂所	1978	『禅学大辞典 上巻』

現地調査及び本書の作成に当たっては、次の方々に有益な御指導、御助言を賜りました。ここに銘記して深謝申し上げます。(敬称略・五十音順)

大熊茂広 木村弘之 後藤建一 柴田 稔 竹内直文 平野吾郎 松本一男 向坂鋼二 村松弘規

# 写 真 図 版

カラー図版 1



石畠 I 遺跡遠景（西より）

カラー図版2



石畠I遺跡遠景（北東より）



調査区全景（合成）

カラー図版4



1 1区全景

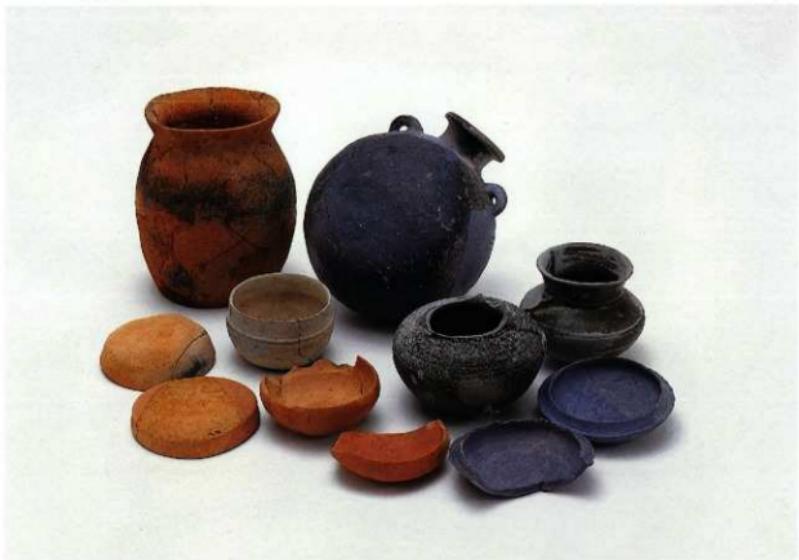


2 2区全景



石畠I遺跡出土後期弥生土器

カラー図版6



1 SD05上層出土土器



2 SD06出土土器



1 SD07出土土器



2 SD08出土土器

カラー図版8



1 SD11出土土器

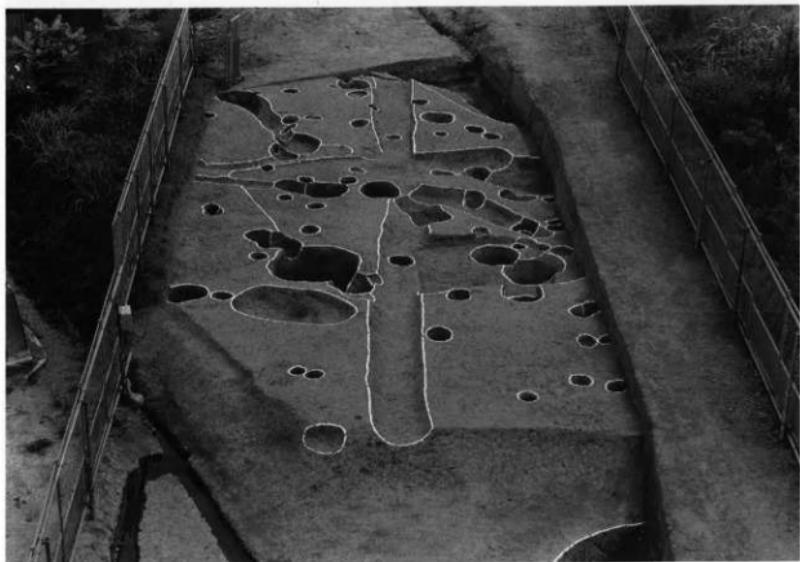


2 他の溝状遺構出土土器

図版 1



1 3区全景



2 1区東側完掘状況（西より）

図版2



1 SD01～05完掘状況（西より）



2 SD06～08完掘状況（西より）

図版3



1 SB01・02完掘状況（西より）



2 SB03・04完掘状況（西より）

図版4



1 SH01・02完掘状況（西より）

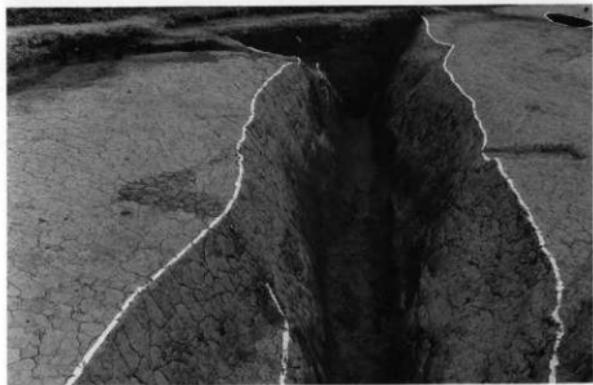


2 SD01～04完掘状況（南東より）

図版5



1 S D05完掘状況  
(西より)



2 S D05完掘状況  
(北より)



3 S D05土層断面

図版6



1 S D06遺物出土状況  
(東より)



2 S D06遺物出土状況  
(東より)



3 S D06遺物出土状況  
(西より)

図版7



1 SD07遺物出土状況（東より）



2 SD07・08遺物出土状況（東より）

図版8



1 S D07遺物出土状況  
(北より)



2 S D08遺物出土状況  
(南より)



3 S D07遺物出土状況  
(西より)

図版9



1 SD07土層断面



2 SD09遺物出土状況  
(西より)



3 SD09遺物出土状況  
(北より)

図版10



1 S D11遺物出土状況  
(西より)



2 S D12遺物出土状況  
(西より)



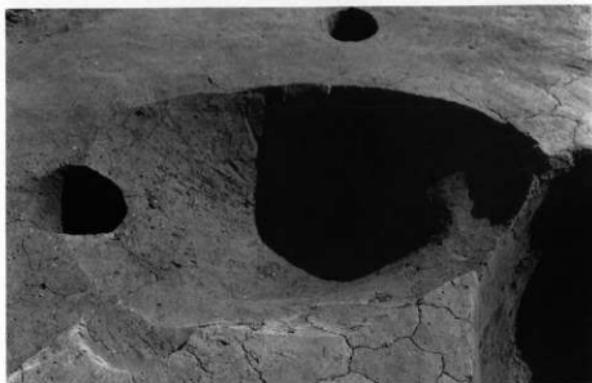
3 S D15遺物出土状況  
(南東より)



1 SF01遺物出土状況  
(南より)

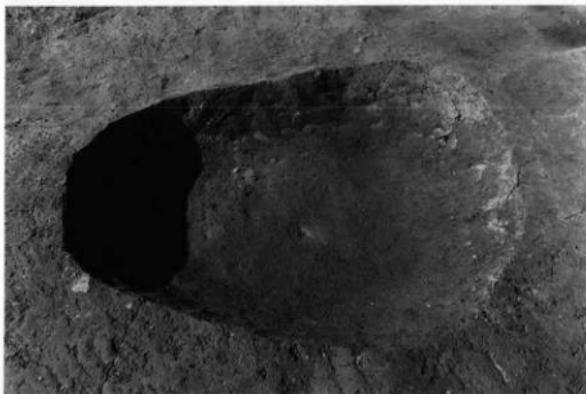


2 SF02遺物出土状況  
(南より)



3 SF04完掘状況  
(北より)

図版12



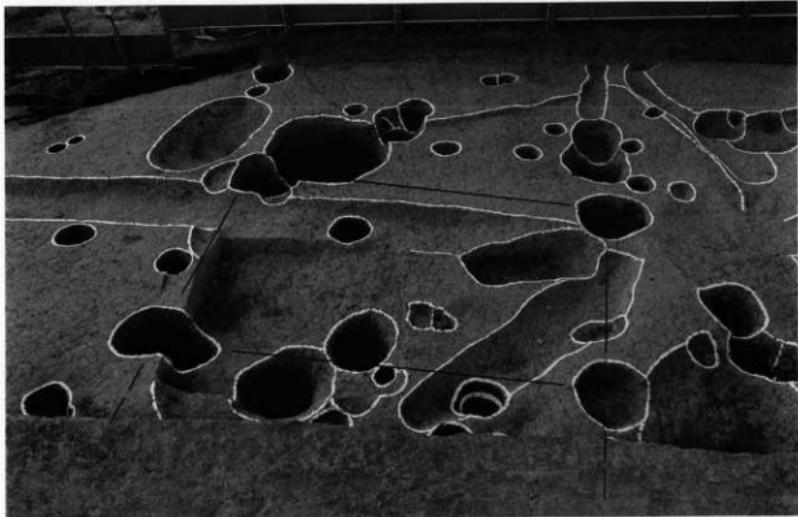
1 S F05壳掘状況  
(南より)



2 S F06遺物出土状況  
(北より)



3 S X02遺物出土状況  
(西より)



1 SH04完掘状況（南より）



2 SH04P 1柱根検出状況（北東より）



3 SH04P 2柱根検出状況（東より）



4 SH04P 3礎板検出状況（東より）



5 SH04P 4柱根検出状況（東より）

図版14



1 SH05P1柱根検出状況（西より）



2 SF08遺物出土状況（東より）



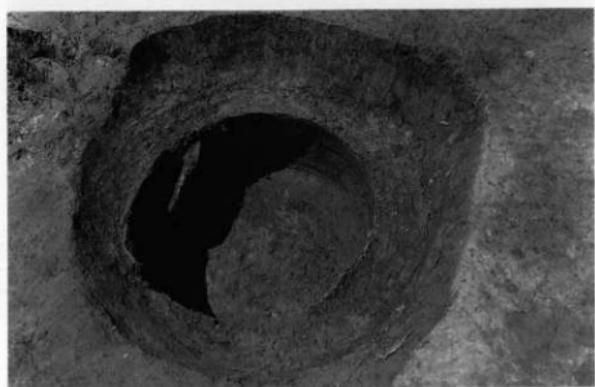
3 SF07遺物出土状況（北より）



4 SE01完掘状況（東より）



1 SE02完掘状況  
(東より)

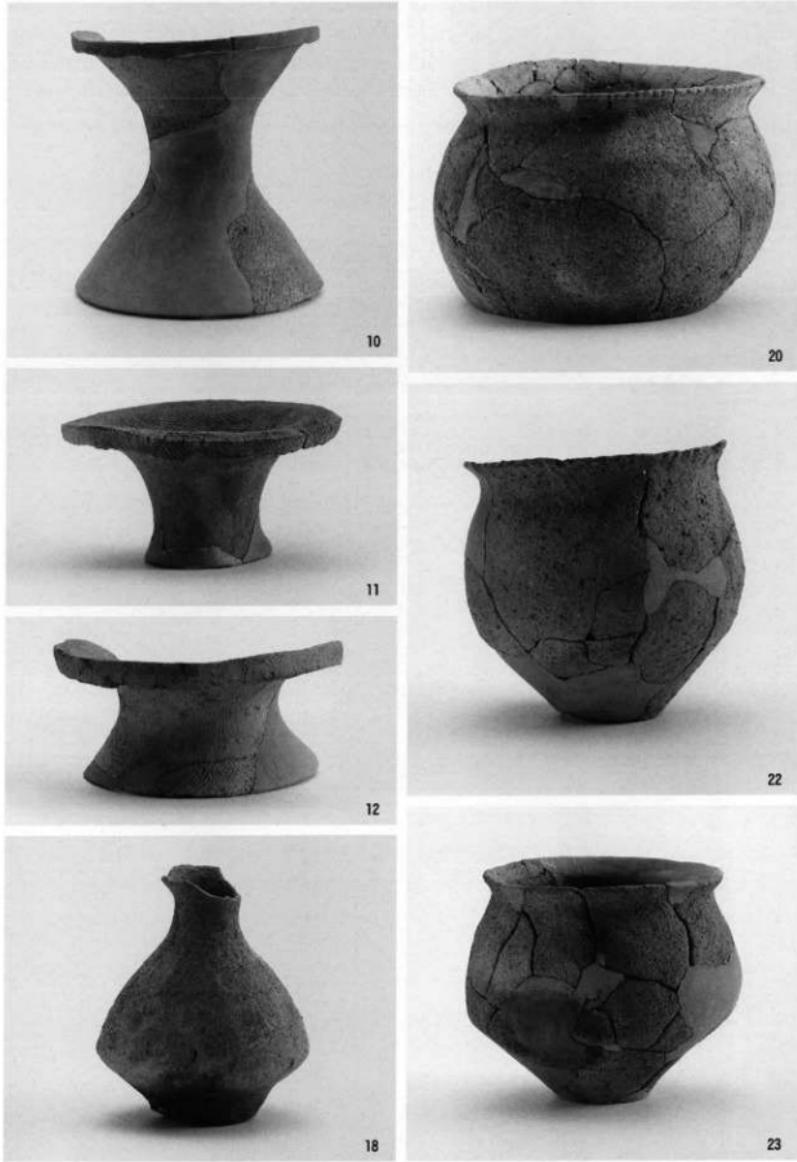


2 SE06竹枠検出状況  
(南より)



3 SX03遺物出土状況  
(北より)

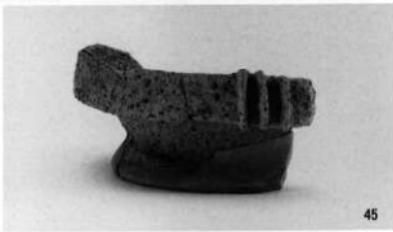
図版16



S D01出土土器



S D02出土土器



S D05中・下層出土土器



S D05上層出土土器(1)

図版18



S D05上層出土土器(2)



S D05上層出土土器(3)



S D06出土土器(1)

図版20



112



113

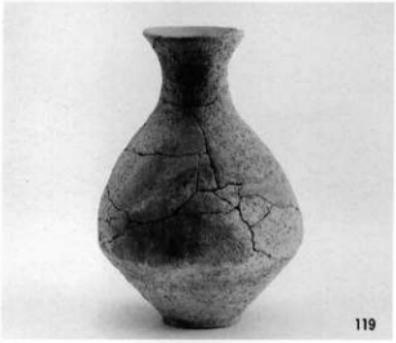


114



115

S D06出土土器(2)



119



120



123



124

S D07出土土器(1)

図版21



139



155



140



157



141



159



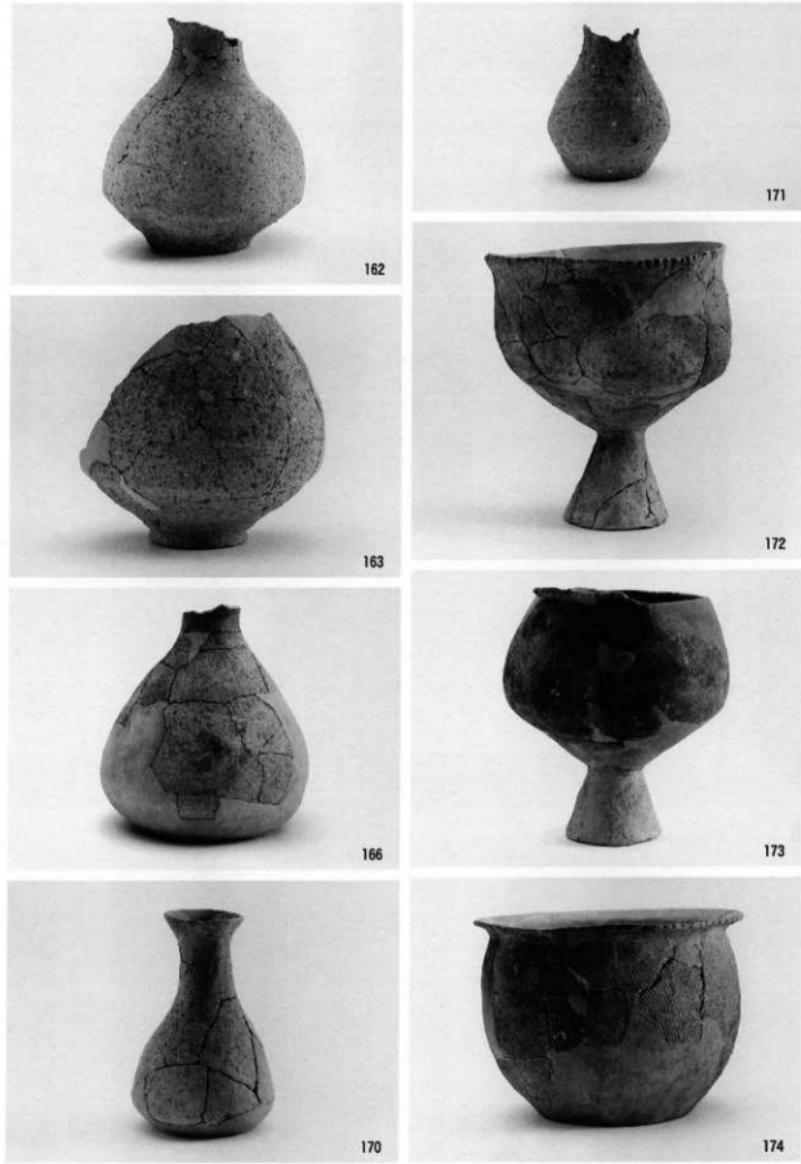
146



161

S D07出土土器(2)

図版22



S D07出土土器(3)



175



178



176



186



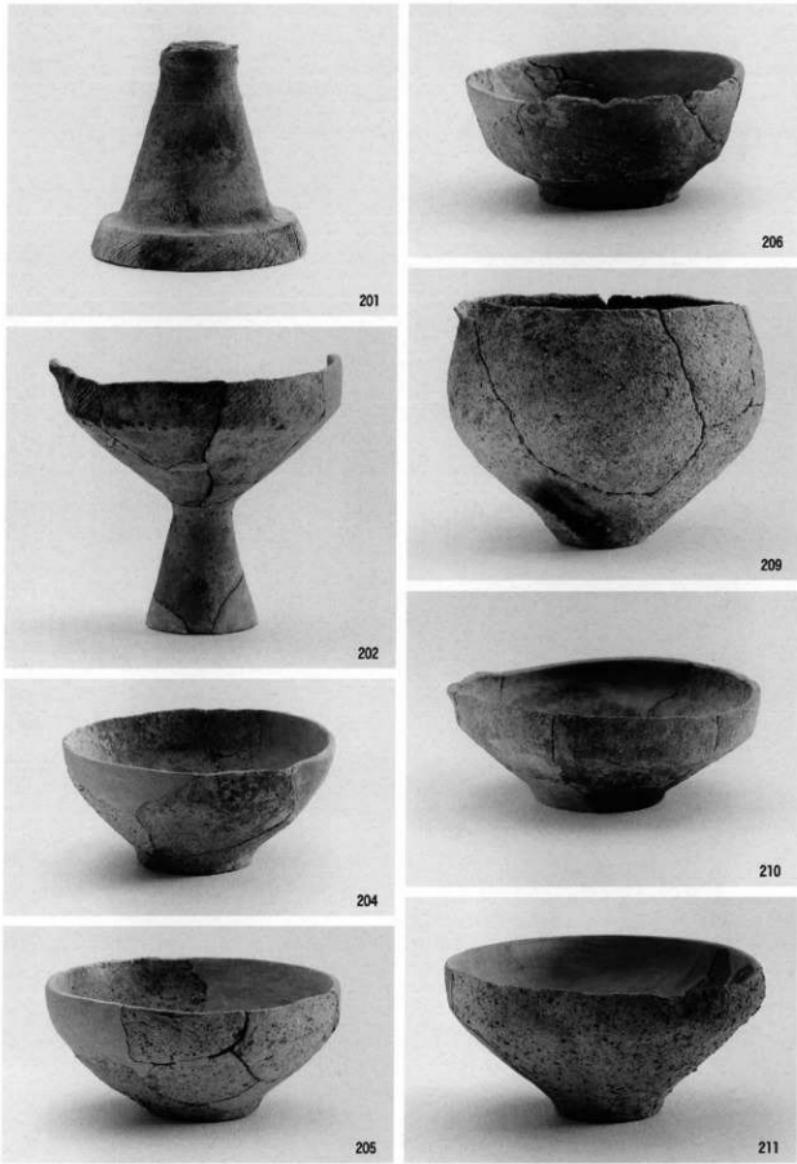
177



190

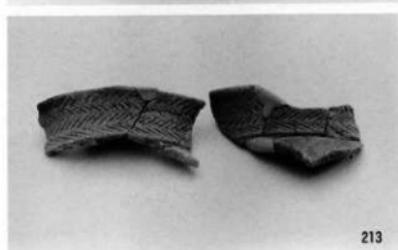
S D07出土土器(4)

図版24



S D07出土土器(5)

図版25



S D07出土土器(6)



S D08出土土器(1)

図版26



223



228



225



229



226



230



227



231

S D08出土土器(2)



232



242



236



243



237



245



241



246

図版28



S D14出土土器



S D15出土土器



S D11出土土器

S F01出土土器

256



S F 06出土土器



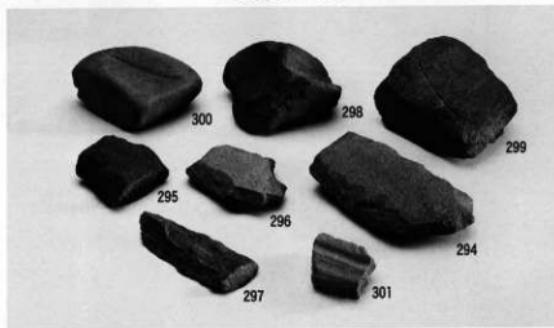
S X01出土土器



S X02出土土器



291



弥生時代の石器

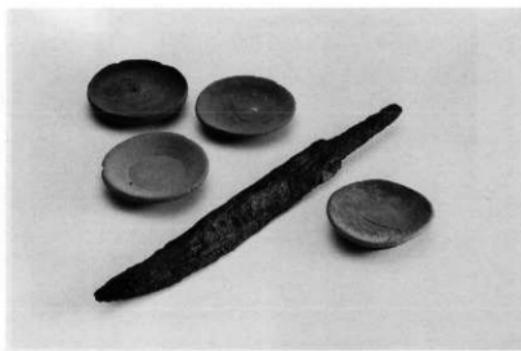


S E 01出土土器

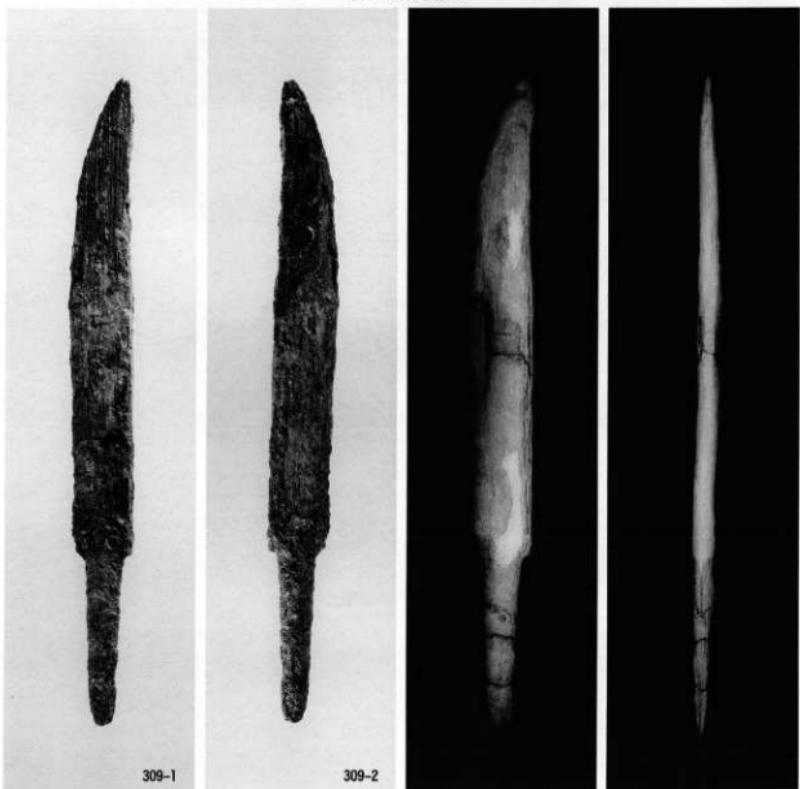


S E 02出土土器

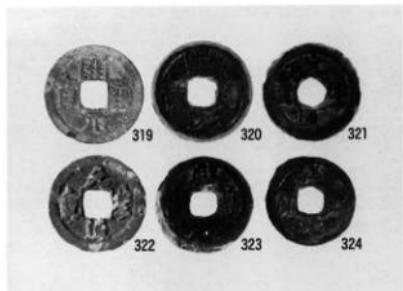
図版30



S F 07出土遺物



短刀



錢貨



328

礎板 (SH04P 3)



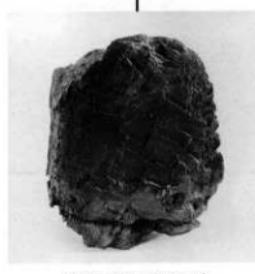
325



326



327



柱根 (SH04P 1)



柱根 (SH04P 4)



柱根 (SH04P 2)

# 報告書抄録

ふりがな	いしばたけいちらいせき						
書名	石畳Ⅰ遺跡						
調書名	平成15年度(主)焼津森線歩行者等緊急安全対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告						
シリーズ番号	第152集						
編著者名	足立順司 白鳥直樹 西井亨						
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所						
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20 TEL 054-262-4261㈹						
発行年月日	西暦2004年3月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (世界地図系)	東経 (世界地図系)	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
石畳Ⅰ遺跡	静岡県藤川市 上西郷字石畳	22213	248	34° 48' 32"	138° 00' 41"	2003/07/01 ～ 2003/10/20  2004/05/07 ～ 2004/06/03	1,000  100	(主)焼津森線 地方特許道路 改築に伴う埋 蔵文化財発掘 調査  (主)焼津森線 歩行者等緊急 安全対策事業 に伴う埋蔵文 化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
石畳Ⅰ遺跡	集落	弥生時代後期～古墳時代前期	堅穴住居跡6 掘立柱建物跡3 環濠3 溝状遺構9 土坑6 不明遺構2	弥生土器(櫛目様式)、土師器、 石器3、打製刃器1、砾石4、 ガラス小玉1	弥生後期環濠集落 掘削時期が異なる環濠を 検出 環濠は掘り直されている 藤川型式古墳群の上層部出土 台付小型壺出土(土坑) パレス壺出土(環濠)			
	散布地	古墳時代後期		須恵器(坪、蓋、短颈壺、盤、 提瓶)、土師器	環濠の最上層から出土 検出遺構なし			
	集落墓	中世	掘立柱建物跡1 溝状遺構1 中世墓1 土坑1 井戸状遺構2	山茶碗6、かわらけ2、 陶器2、短刀1、鉄質6、 木製品(柱根3、礎板1、 底板1)	太さ30cm以上の柱根検 出(掘立柱建物跡) 木質部が残る鉄刀出土 (中世墓)			
	集落	近世 時期不明	掘立柱建物跡1 井戸状遺構4 不明遺構1	陶器2、青磁1、 かわらけ2 鉄質1				
備考	抄録の緯度・経度は、世界割地系に基づく値である							

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第152集

## 石 烟 I 遺 跡

平成15年度（主）焼津森線歩行者等緊急安全対策  
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成16年8月31日

編集・発行 財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20

T E L 054-262-4261㈹

印 刷 所 松本印刷株式会社  
〒421-0303 静岡県榛原郡吉田町片岡2210  
T E L 0548-32-0851